

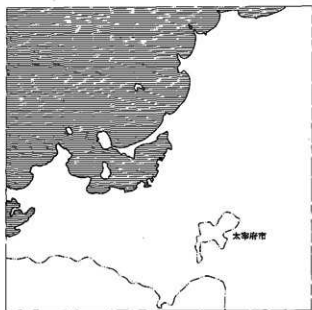
太宰府市の文化財 第24集

水城跡

1994

太宰府市教育委員会

水城跡





1. 水城跡周辺（南から福岡平野方向を望む）
2. 水城跡周辺（東から小水城方向を望む）



1. 第17次調査土塁基底部土層断面（南から）
2. 第17次調査取水口抜き跡検出状態（南から）

序

本書は太宰府市が1983年からこれまでに実施した水城跡の調査をまとめたものです。

太宰府の名前は古代に建設された大宰府に由来します。水城はその大宰府の構成要素の重要な一部であり、水城跡は築造から1300年のあいだ地域の人々により保存されてきました。しかし近年の太宰府市の発展とともに水城跡周辺の宅地化が進み、本市では記録保存のための調査に追われることになりました。そのなかで平成2年におこなった第17次調査にて水城の構造物である木樋暗渠が発見されたことが契機となり、改めて遺跡の保存について論議されました。その結果、遺跡の保存地区の拡張を進めることになりました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを願います。

本書の発刊に当たっては多くの方々のご理解とご協力をいただきました。特に園分、水城、吉松各区の皆様、調査に参加された作業員の方々に感謝いたします。

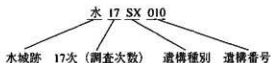
平成6年3月

太宰府市教育委員会

教育長 長野 治己

例 言

- 1、本書は太宰府市教育委員会が1983年から1993年まで行った特別史跡水城跡周辺の発掘調査報告書である。
- 2、発掘調査は上記の主体により行われ、調査組織は1章1の調査体制のなかでそれぞれ示している。
- 3、水城跡の調査次数は福岡県教育委員会が実施した調査に続けて付けており、今後も重複しないようにしていく。
- 4、遺構実測は主に調査担当者がおこなった。遺物の実測と浄書は、調査担当者と田中克子・森田レイ子・鶴味加代子・古賀里恵子・秋吉由紀子・柴田剛・久保寿一郎・山本かおるがおこなった。
- 5、遺構の写真撮影は調査担当者がおこない、空中写真撮影は(有)空中写真企画(代表 塩睦夫) アジア航測(株)がおこなった。遺物の写真撮影はフォトハウスおか(代表 岡紀久夫)がおこなった。
- 6、遺構実測図および遺構配置図はすべて国土調査法第2座標系を基準としている。よって図中に示される方位は特に注記のない限り座標北(G.N.)を指している。鑑北の場合は座標北との偏差は西偏6度30分(1992年)である。
- 7、本書に掲載する遺構番号は、以下のように理解される。



- 8、陶磁器は「太宰府条坊跡II」(1983)を基礎とする分類による。
- 9、水城土壘博多側を外側、太宰府側を内側、また御笠川から西を西堤、東を東堤と呼称した。
- 10、執筆は目次に示したとおりである。
- 11、本書の編集は山本信夫・山村信榮の協力のもと城戸康利がおこなった。
- 12、出土遺物および図面、写真等の記録類は太宰府市教育委員会が保管し、活用していく。
- 13、題字は教育長 長野治己による。
- 14、第18次調査表土出土遺物(主に近世以降)については別稿を作成する予定である。

本文目次

I	序説	(城戸康利)	1
1	はじめに		1
2	地理的歴史的環境		5
3	調査経過		5
II	試掘調査の概要	(城戸康利)	11
III	各調査地点の記録		25
1	第11次調査	(山本信夫)	25
2	第12次調査	(山本信夫)	28
3	第13次調査	(狭川真一)	32
4	第14次調査	(狭川真一)	35
5	第15次調査	(狭川真一)	43
6	第16次調査	(山村信榮)	45
7	第17次調査	(山本信夫)	55
8	第18次調査	(山村信榮)	93
9	第19次調査	(山村信榮)	104
10	第21次調査	(山村信榮)	105
11	第22次調査	(中島恒次郎)	108
12	第23次調査	(山村信榮)	111
13	第25次調査	(山村信榮)	112
IV	まとめ		124
1	水城西門内側の遺構と水城の構造	(山村信榮)	124
2	水城東門内側の遺構	(山村信榮)	125
3	水城の構造について	(山本信夫)	128
V	水城跡の保存について	(岡部大治)	132
VI	水城跡出土の鬼面文鬼瓦	(狭川真一)	136



Fig. 1 水城跡の地形的位置 (1/10万)

I 序 説 (Fig.1~3, Pla.1・2)

1 はじめに

「水城」が初めて文献に登場するのは「日本書紀」天智3年足歳条での築造記事であり、水城跡はその誕生から知られる遺構である。その規模は現在見ることができる土塁部分だけでも全長1.2km、高さ13mにおよぶ巨大なものである。

水城跡は土塁が地表上にあることから、古くよりその存在を知られておたびたび文献に登場している。しかし一方では地表に構築された部分だけが認識されることとなり、周辺の付帯施設については忘れ去られ地中に埋没し又は消失することとなった。今日でも「水城」の全体像はその構造や機能について解明されたとはいえない。

一方、旧筑紫郡の水城村という農村のなかで畑等に利用されながらも地域の人々により保存されてきた水城跡も、交通の要衝ということもあり鉄道2本、国道2本、高速自動車道1本により分断され、さらに近年の福岡都市圏の膨脹により太宰府市にも都市化の波が押し寄せ、水城跡もまさに家屋の液間に浮かぶ一筋の島となりつつある。

本報告は太宰府市が1983年より開発等への対応として土塁部分周辺の発掘・試掘調査をおこなった地点について報告することにより「水城」の全体像をその構造において理解する資料を提供することを目的としている。また土塁より太宰府側50mおよび御笠川西岸の外堀部分の特別史跡指定地（現在は水城土塁と御笠川東岸の外堀部分）への、指定拡張が進められており土塁部分のみでなく「水城」跡保存のための資料となることを、あわせて目的としている。調査地点は以下のとおり。

調査地点	調査地地籍	開発面積(m ²)	調査面積(m ²)	調査期間	調査原因
第11次調査	大字園分字玄貴 235, 236-1・2	60	5	1986.3.24	災害復旧
第12次調査	大字吉松字塚ノ下 118	1,106	180	1983.11.2~11.22	宅地造成
第13次調査	大字園分字玄貴 240-3・4	330	130	1986.4.1~4.12	住宅建築
第14次調査	大字吉松字塚ノ下 123-1	624	110	1986.10.28~11.10	住宅建築
第15次調査	大字吉松字松本 205-1	513	50	1986.11.10	住宅建築
第16次調査	大字園分字玄貴 183	770	16	1988.3.16~3.23	住宅建築
第17次調査	大字吉松字松本 139-1・2, 140, 196-1, 197-1	3,500	2,000	1990.8.6~1991.1.9	共同住宅建築
第18次調査	大字園分字玄貴 185	400	84	1990.9.17~10.24	住宅建築
第19次調査	大字吉松字松本 193-4	176	14	1991.11.13	住宅建築
第21次調査	大字吉松字塚ノ下 470	384	55	1992.5.28	住宅建築
第22次調査	大字園分字玄貴 220-3	447	125	1992.8.21~9.8	住宅建築
第23次調査	大字吉松字松本 604	846	11	1992.11.11	下水道管理設
第25次調査	大字吉松字塚ノ下 611, 610-3・4	846	160	1993.4.23~6.1	下水道管理設

Tab. 1 水城跡調査地点一覧（太宰府市教育委員会分）

調査体制

調査が長年にわたっていることもあり煩雑ではあるが、資料として掲げる。年を追う毎に不十分ながら組織の充実が計られている。調査主体はすべて太宰府市教育委員会である。

昭和58・59・60年度

総括 教育長 陶山直次郎 藤 壽人（昭和60年3月～） 庶務担当 社会教育課長
西山義則 花田勝彦（昭和59年10月～） 文化財係長 黑板 力 主事 岡部大治 調査
担当 技師 山本信夫 狭川真一

昭和61年度

総括 教育長 藤 壽人 庶務担当 社会教育課長 花田勝彦 文化財係長 鬼木富士
夫 主事 岡部大治 調査担当 技師 山本信夫 狭川真一 緒方俊輔

昭和62年度

総括 教育長 藤 壽人 庶務担当 社会教育課長 花田勝彦 文化財係長 鬼木富士
夫 主事 岡部大治 白水伸司 調査担当 技師 山本信夫 狭川真一 緒方俊輔

（囑託）山村信榮

平成元・2年度

総括 教育長 藤 壽人 長野治己（平成元年8月～） 庶務担当 教育部長 西山義
則 社会教育課長 関岡 勉 文化財係長 鬼木富士夫 主事 岡部大治 白水伸司 調
査担当 技師 山本信夫 狭川真一 城戸康利 緒方俊輔 山村信榮（囑託）中島恒次
郎 狭川麻子

平成3年度

総括 教育長 長野治己 庶務担当 教育部長 西山義則 文化課長 佐藤恭宏 埋蔵
文化財係長 富田 謙 文化振興係長 大田重信 主事 岡部大治 川谷 豊 調査担当
技師 山本信夫 狭川真一 城戸康利 緒方俊輔 山村信榮 中島恒次郎 塩地潤一

（囑託）田中克子

平成4年度

総括 教育長 長野治己 庶務担当 教育部長 中川シゲ子 文化課長 佐藤恭宏 埋
蔵文化財係長 高田克二 文化振興係長 大田重信 主事 岡部大治 川谷 豊 調
査担当 技師 山本信夫 狭川真一 城戸康利 緒方俊輔 山村信榮 中島恒次郎 塩地
潤一（囑託）田中克子

平成5年度

総括 教育長 長野治己 庶務担当 教育部長 中川シゲ子 文化課長 花田勝彦 埋
蔵文化財係長 高田克二 文化振興係長 大田重信 主事 岡部大治 川谷 豊 調査
担当 技師 山本信夫 狭川真一 城戸康利 山村信榮 中島恒次郎 塩地潤一（囑託）

田中克子 井上信正 重松麻里子

発掘調査および整理作業参加者

(発掘調査作業員)	秋山千津子	秋吉由紀子	岩男澄子	石本恭司	牛島イワヨ
内田文子	江島スミエ	江西照子	大迫フミ子	大田歌子	大田八重子 大田ヤス子
大塚恵治	大坪聖子	片岡邦子	片山 保	加藤秀雄	川原田美千代 川原久美
城戸邦典	岸 邦子	北摺和美	北村泰介	楠林静香	久保嘉香 古賀 昭
古賀恵一	古賀里恵子	古西俊博	近藤秋枝	境美佐子	篠原浩之 柴田ツキエ
柴田 剛	白石 忠	白木ハルミ	白水いせの	白水スエ子	早田ミツル 高鍋キミヨ
高原改良子	田口一郎	田口美智子	竹林照子	竹林義之	田中勝江 田中テル子
田中平助	田原智恵子	田部澄博	塚本映子	徳永モモエ	徳淵正樹 中島ウメノ
中嶋幸子	中嶋さなみ	中島タカ子	中島タキノ	中島はじめ	中溝洋子 野網明子
萩尾カネ子	萩尾須恵子	萩尾泰祐	萩尾ツチエ	萩尾 界	萩尾アキ子 萩尾万寿子
服部大介	花園美千子	平嶋優子	平田ソヨ	藤尾 薫	藤沢幸代 藤原重登
古川民子	古川ヨシ子	松島順子	三上智之	南美智子	宮田恵子 宮原圭子
宮原ハナエ	村山龍子	八柳健之助	山下澤子	山本洋子	吉田正子 米原峰子
渡辺太郎	渡辺ひとみ	渡辺律子			
(発掘調査補助員)	山田富美				
(整理作業員)	安芸朋江	秋吉由紀子	久保喜代香	古賀里恵子	酒井三保子
柴田 剛	鶴味加代子	原野正子	山本かおる	横山美津子	吉田勝子 米川治子
(整理補助員)	河田 聡	森田レイ子	山中幸子		

調査、整理及び保存に際して次の方々からご教示、ご指導を賜った。文末になったが記して感謝の意を表したい。(順不同、敬称略、当時)

平野邦雄(東京女子大学教授) 岡崎 敬(九州大学名誉教授) 笹山晴生・渡辺定夫(東京大学教授) 八木 充(山口大学教授) 川添昭二(福岡大学教授) 坪井清足(財)大阪文化財センター理事長) 横山浩一(福岡市博物館顧問) 小田富士雄(福岡大学教授) 鈴木嘉吉(奈良国立文化財研究所所長) 澤村 仁・杉本正美(九州芸術工科大学教授) 中村 一(京都大学教授) 西谷 正(九州大学教授) 西健一郎(九州大学助手) 光谷拓実(奈良国立文化財研究所) 川原純之・増淵 徹・安原啓示・狩野 久・佐藤 信・井上和人(文化庁) 渡辺正気(福岡県文化財審議委員) 石松好雄・浜田信也・磯村幸男・中間研志(福岡県教育庁文化課) 栗原和彦・亀井明德・橋口達也・森田 勉・横田賢次郎・高橋 章・赤司善彦・小田和利・吉村靖徳・小川泰樹(九州歴史資料館) 舟山良一・徳本洋一(大野城市教育委員会) 井沢洋一・大庭康時(福岡市教育委員会) 久保寿一

調査にあたり次の地権者の方々から御協力をいただいた。文末になったが記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略、当時）

大内田恵 百田勝典 昭和観光開発㈱ 浅川キミヨ 百田賢祐 萩尾義雄 西日本鉄道㈱
松島 彰 萩尾正明 (㈱九州商事 西山一敏 白水鉄雄 松島孝己 七枝 繁 百田澄雄
平嶋勝治 田中八司 西山政勝 井上 昭 筑紫食糧販売共同組合 西山源太郎 児島道
則 (㈱ナガタ建設 高田 泰 松島博之

調査および整理の方法

太宰府市では、調査・整理の方法はほぼ統一されており、調査担当者以外の者が生の資料をみても理解できるように努めている。ここではその概略を述べる。詳細については『佐野地区遺跡群Ⅰ』（太宰府市の文化財 第14集 1989年）、山本信夫「太宰府市における情報整理」（『第2回 考古学におけるパーソナルコンピューター利用の現状』1989年 帝塚山考古学研究所）を参照されたい。

試掘調査 対象地にトレンチを設定し、重機を用いて遺構面もしくは地山を検出するまで掘削を慎重におこなう。場合によっては人力で掘削をおこなう。遺構面が複数予測される場合は遺構面の状態を観察しながら一部分だけ地山に達するまで掘り下げる。これにより遺構面のおおよその数を確認する。記録はトレンチの位置、トレンチ壁面の土層堆積状態、遺構検出状態を略測メモをとり、トレンチ壁面と床面の写真撮影をおこなう。出土遺物はメモを取り、基本的に持ち帰っていない。

発掘調査 調査区を設定し、重機で表土を除去し遺構面を出していく。その後測量をおこない国土座標を基準にした3m間隔の方眼を組み、以降この方眼を使用して図面を作成する。実測図は1/100の略測図と1/20の調査区平面図を基本とし、随時個別遺構実測図・土層断面図、壁面土層断面図を、さらに必要な調査地では平板実測図、周辺地形測量図などを作成する。遺物取り上げは略測図と遺構番号台帳を使用しておこなう。これらには遺構の所見や切り合い関係、土層模式図などの情報を記入する。写真撮影は『佐野地区遺跡群Ⅰ』に同じである。遺構面毎にこの作業を繰り返していく。調査後は重機で埋め戻しをおこなう。

遺物整理、遺構略号等は『佐野地区遺跡群Ⅰ』に準じる。調査時点での遺構番号は、S-○で記録するが、整理段階で遺構種別を入れSD○○○と表示する。番号自体は遺構の統廃合がないかぎり、共通の番号を使用する。

2 地理的歴史的環境

太宰府市の所在する福岡平野の南深部は、西から脊振山地、東から三郡山地という比較的急峻な山々が迫り会合する部分であり、福岡平野の中でも袋状の小平野を形成し盆地的様相を示している。この小平野を貫流する河川は西から大佐野川、鶯田川、御笠川であり谷流して御笠川となり北流し、さらにいくつかの河川と合流しながら博多湾に注ぐ。この小平野はまた福岡平野と筑紫平野を結ぶ地峡部にあたり交通の要衝の地となっている。水城跡は福岡平野から南深部小平野を分断する形で、脊振山地から派生した牛頭丘陵と大城山を南西-北東方向に連結した線上に立地し、御笠川を挟んで標高20~30mの範囲に構築されている。水城跡により福岡平野南深部はいわば袋の口を閉じられた格好になっている。このため水城跡は土塁部分で現在西から市道、JR鹿児島本線、西鉄大牟田線、九州縦貫自動車道、国道3号線バイパス、同3号線により4ヶ所に分断されている。そのうち市道と国道3号線は水城築造の際設けられた西門と東門跡にあたると考えられている。

さて九州北部は大陸、朝鮮半島と近い立地条件を持ち、古くから対外的門戸としての位置を占めてきた。列島内での古代国家への胎動が活発になると、朝鮮半島へのヤマト政権の関わりは深く幾度も軍事活動をおこなっていることが『日本書紀』や『三国史記』に記載されている。そのなかで、663年に白村江で敗北し、唐・新羅軍の直接の脅威にさらされたことを契機に水城は664年築造がはじまっている。これは水城単独でおこなわれたのではなく、大野城、基肄城とともにつながりをもって築造されている。さらに水城の西側丘陵の開析谷部に小水城と総称される土塁が存在し、現在ではこれらと大宰府がセットになって羅城を形成していたと理解されている。

平安時代以降水城は関として機能したらしく大宰府の出入口として和歌に度々詠まれていた。元寇の際には土塁が再び防御機能を果たしたらしく記事もみえるが詳細は不明である。その後15世紀には旧蹟として認識されていたようである。近世の地誌においても同様である。近代に入り日本の軍国化にともなって、水城跡は古代の一大国防工事として顕彰の対象となっていた。

3 調査経過

水城跡は全長1.2km、高さ13mという巨大な土塁を中心とした遺構であり、全体を一括しての調査は行われていない。測量は近世以降数度おこなわれているが、長さなど数字の一致をみない。実測図は1914年と1930年に作成(1/600)したことを記録するのみである。また常に疑問とされてきたのは、「築大堤貯水、名曰水城」(『日本書紀』天智三年(664)是歲条)という記事から、どのように「貯水」していたのかという水城の全体構造の問題である。大きく2説あり、御笠川を塞ぎ止め太宰府側に貯水する土塁ダム説、内外に堀を設けて貯水す



Fig. 2 太宰府市周辺の遺跡分布図 (1/30000)

- | | | | |
|-----------|-----------------|----------|----------|
| 1 大野城跡 | 9 御笠軍団印出土地 | 17 市ノ上遺跡 | 25 尾崎遺跡 |
| 2 岩間城跡 | 10 水城跡 | 18 神ノ前宮跡 | 26 藤道遺跡 |
| 3 陣ノ尾遺跡 | 11 大宰府政庁跡 | 19 原ノ遺跡 | 27 熊城戸遺跡 |
| 4 筑前国分寺跡 | 12 觀世音寺 | 20 藤原遺跡 | 28 野口遺跡 |
| 5 法道跡 | 13 遠賀軍印出土地 | 21 前田遺跡 | 29 朝保遺跡 |
| 6 松本遺跡 | 14 大宰府集坊跡 (祇園内) | 22 宮ノ本遺跡 | 30 野人塚遺跡 |
| 7 筑前国分尼寺跡 | 15 若船遺跡 | 23 藤川遺跡 | 31 茶道跡 |
| 8 千足遺跡 | 16 鞍倉寺跡 | 24 フケ遺跡 | 32 桶田山遺跡 |
| | | | 33 石堀山遺跡 |

る據説である。その他内側に貯めた水を受け漏える施設を博多側に想定する折衷説などである。

さて水城跡についての記事は建造の際の上記の『日本書紀』の記録に始まり歌集、物語、日記、紀行文、地誌など少なくはないが、考古学的考察を加えたのは1914年の黒板勝美、中山平次郎両氏を嚆矢とする。現在のJR鹿児島本線が拡張工事のため土塁を切り崩す際に横断面を観察している。おもに土塁の構築方法について述べ、版築の中から粗朶が出土することに注目している。さらに中山氏は土塁がおおきく2段階に分けて構築されていたことを述べている。またその構造については両氏ともダム説を唱えている。1930年には武谷水城氏がダム説を肯定しながらも土塁は城壁との見解を発表している。また同年は東門西側で木樋が不時発見されたことから、水城跡の本格的な発掘調査が開始された年である。この成果は調査を行った長沼賢海氏により1932年に発表された。木樋は土塁を横断する暗渠であるが、その構造の詳細を述べたうえで、木樋は土塁の湿抜きであり内側の貯水を博多側に流す施設ではないとしている。以後30数年の中断後、1968年に発表された鏡山猛氏の見解は貯水そのものを否定するもので、内側に小規模な堀を想定している。つまり土塁は「貯水堤防ではなく単なる防塁」と認識し、大宰府を囲繞した羅城の一部との位置付けを明確にした。一方、発掘調査は1970年から国道および自動車道の整備に伴い御笠川付近の欠堤部で再開された。3次調査では土塁博多側テラスの構造確認と外堀の痕跡を検出している。これは同年におこなわれた小水城（大土居土塁）の調査で外堀が確認されたことが影響している。さらに5次調査ではよりはっきりとした外堀北側の立ち上がりを検出し、土塁博多側には堀が存在することが確実とされている。また6・7・10次調査では内側にも小規模ながら堀らしき溝が確認されている。4次調査では御笠川に石敷遺構が検出され川の部分にもならんかの施設が存在したことが確認された。これらの調査により「貯水」の問題はいちおうの決着をみているが、まだ整合的に全体の機能を説明できるまでには至っていない。




関連文献

- 1 日本書紀 天智3年是歲条・4年8月条
- 2 令義解 職員令 大宰府
- 3 続日本紀 天平神護元年3月条
- 4 万葉集 6-968
- 5 扶桑略記 天慶3年11月
- 6 小右記 寛弘2年7月10日
- 7 夫木和歌抄 藤原高遠
- 8 室治百首 藤原光俊
- 9 平家物語 寿永2年 平家大宰府落

- 10 八幡屋童記
- 11 八幡屋童調
- 12 歴代鎮西要略
- 13 元寇紀略
- 14 筑紫道記 宗愨
- 15 筑前国絨風土記 水城 貝原益軒
- 16 筑前国絨風土記付録 水城村 加藤一純
- 17 筑前国絨風土記拾遺 水城附岩垣岡 青柳種信
- 18 太宰管内志 水城關 伊藤常足
- 19 晴方瀧源 山田安榮
- 20 黒板勝美 「福岡県学術研究旅行報告書」史学雑誌25-3 1914
- 21 黒板勝美 「福岡地方旅行談」考古学雑誌4-6 1914
- 22 中山平次郎 「水城の研究」筑前史談会講演集第1集 1914
- 23 中山平次郎 「元寇研究の三参考文籍」元寇史蹟の研究 1915
- 24 武谷水城 「水城史観」筑紫史談 49~52・54 1930・31
- 25 長沼賢海「水城の大橋の調査」史蹟名勝天然記念物調査報告書7 福岡県 1932
- 26 鏡山猛「大宰府の外郭防衛 いわゆる羅城について」【大宰府都城の研究】 1969
- 26 轟田健「水城地区（水城跡）の調査」福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告1 福岡県 1970
- 27 「小水城遺跡」教育福岡—文化財保護行政特集— 福岡県 1972
- 28 浜田信也「水城地区（水城跡）の調査」福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告2 福岡県 1975
- 29 亀井明德編「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財報告書XXVI」 福岡県 1978
- 30 高橋章福「水城 昭和50年度発掘調査報告」 福岡県 1976
- 31 高倉洋彰他編「水城 昭和51・52・53年度の発掘調査概報と史跡環境整備事業実施概要」福岡県 1979
- 32 鏡山猛「大宰府の防衛工事」【大宰府遺跡】1979

調査地点	調査地地誌	調査面積(㎡)	調査期間	文献番号
第1次調査	大字水城字古門地 122-4, 123-6	1500	1970	26
第2次調査	大字水城字古門地 123-6	1000	1972	28
第3次調査	大字水城字八反田 121, 122	870	1972.6.末~9.初	29
第4次調査	大字国分字川原 261-1	70	1973	29
第5次調査	大字水城字八反田 66, 68, 69, 72-3, 73-1・2 大字国分字衣掛 224-1	350	1975.4.24~6.15	30
第6次調査	大字国分字衣掛 256	440	1976.1.19~4.2	31
第7次調査	大字国分字松本 193-5	40		31
第8次調査	大字国分字衣掛 191-1, 221-3	140	1977.7.8~7.23	31
第9次調査	大字国分字星ヶ浦 475-4	25	1978.4.17~4.22	31
第10次調査	大字国分字衣掛 221-1	250	1978.12.1~1979.1.31	31
第20次調査	大字国分字衣掛 194	22	1992.1.9~1.24	
第24次調査	大字国分字衣掛 224-1, 225-1	664	1993.3.11~1994.1.17	
昭和43年立会調査	大字国分字衣掛 1302	70	1968.11.27・28	29

Tab. 2 水城跡調査地点一覧（福岡県教育委員会分）

-  福岡県教育委員会調査地点
-  太宰府市教育委員会調査地点
-  太宰府市教育委員会試験調査地点

1～25は番号がそのまま調査次数に一致する。

- 26. 昭和43年度福岡県水道工事立会調査
- 27. 19-036地点
- 28. 19-140地点
- 29. 19-141地点
- 30. 19-011地点
- 31. 18-127地点
- 32. 18-047地点
- 33. 18-124地点
- 34. 18-129地点
- 35. 18-101地点
- 36. 18-136地点
- 37. 18-162地点
- 38. 18-189地点
- 39. 18-171地点
- 40. 18-169地点
- 41. 18-160地点
- 42. 18-163地点
- 43. 18-038A地点
- 44. 18-011地点
- 45. 18-065地点
- 46. 18-123地点
- 47. 18-172地点
- 黒塗りは調査区を示す。

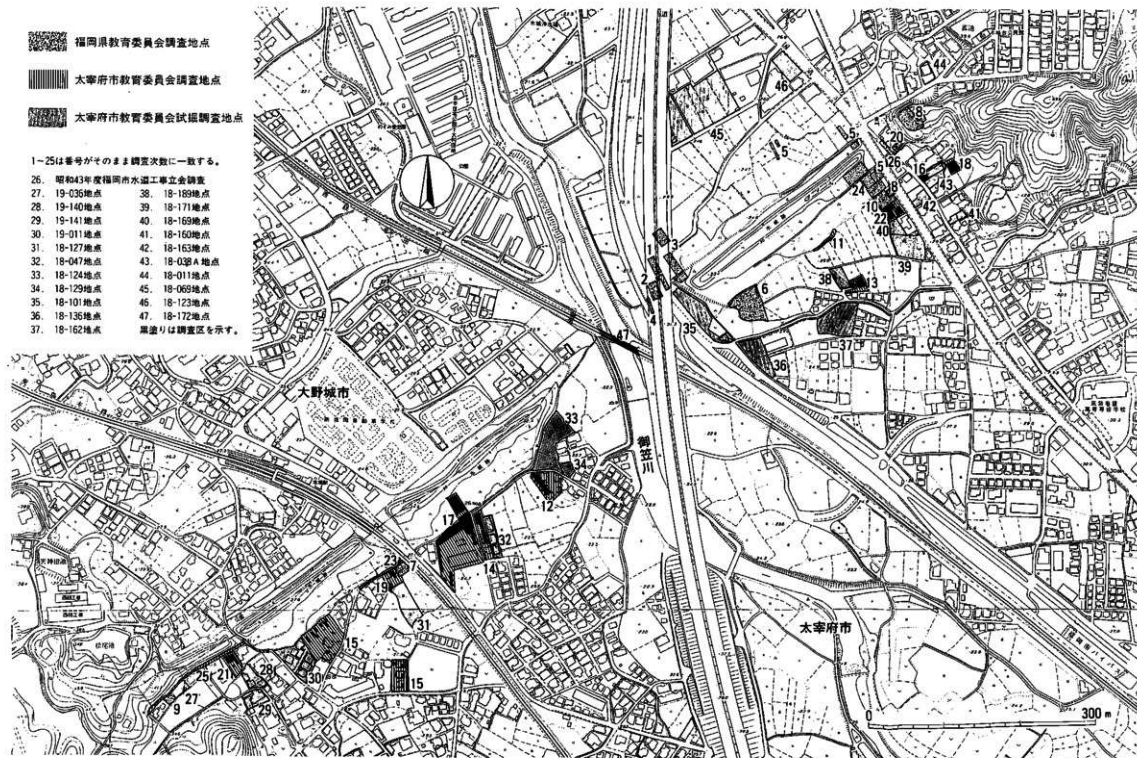


Fig. 3 水城跡調査地点図 (1/5000)

II 試掘調査の概要

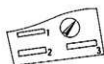
太宰府市での試掘調査は、平成3年度に発表した「遺跡区分図」に従い遺跡包蔵地区の開発等に対応して行なっている。今回の報告では水城本体の土塁線から100mの範囲を取り扱うこととし、21地点をとりあげる。年度別試掘の内訳は1984、1985、1986年が各1件、1987年2件、1989年1件、1990年4件、1991年6件、1992年5件で、年を追う毎に増加している。なお試掘後、本調査を実施したものについては含んでない。また場所別には御笠川から東で13件、西で8件となっている。

トレンチは土塁と直交する方向で設定することを基本とした。これは上塁の前後の地形の変化を捉えるためと、とくに南側では推定されている内堀の存在についての情報を得やすくするためである。

試掘地点の整理番号は、太宰府市基本図の図画割に従い製番とし、そのなかを受け付け順に枝番をふっている。なお水城が含まれる親番は18・19にあたる。今回報告の中でもそのまま使用する。西側から順に報告する。図の縮尺はトレンチ位置図で1/1000、土層概念図が縦方向約1/50、横方向は任意である。精度は土層概念図で10cm単位、平面図で1m単位程である。これは試掘調査の記録方法の限界のためである。

19-036 地点 (Fig.4, Pla.4)

所在地は大字吉松
476-2・475-5、6で、
対象面積は344m²である。共同住宅建築に先立つ調査を1990年5月24日におこなった。調査地は土塁が西から派生する丘陵との接合部から約40m東側で、土塁の南側隣接地である。



- 1 赤土
- 2 青色・バイラン土
- 3 灰色凝灰土
- 4 青色粘質土

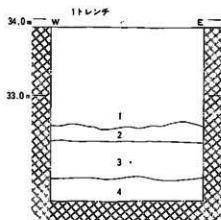


Fig. 4 19-036地点トレンチ位置および土層概念図

標高は約34mである。東西に3本のトレンチを入れたが、いずれも同じ層序であった。遺構は検出されなかった。出土遺物はなかった。

1.5m程の花崗岩風化土による盛土の下に黒灰色の泥土が堆積しており、多量に杉の自然木を含んでいる。これらの杉は折ってみるとまだ新鮮であり、長期間埋没していたとは考えにくい。泥土層下には青色粘質土があり地表から2.3m掘削しても基盤層に達しなかった。これは九州歴史資料館が1978年に西隣接地を調査した（第9次調査）所見に一致しているが、第9次調査で検出した南への地山の落ちは確認できなかった。青色粘質土は水成堆積層と考えられるが、築堤後の堆積か否かは不明である。泥土層は現代の盛土以前の環境が湿地であったことを示しており、自然木は盛土を行なう際に意図的に埋め込まれた可能性も考えられる。

調査地には軽量鉄骨2階建の共同住宅が建築されている。

19-141地点 (Fig.5)

所在地は大字吉松444-2で、対象面積は約200㎡である。個人住宅の改装にともない1990年8月8日に調査をおこなった。調査地は水城西門から約80m南に位置し、内堀推定部分にあたる。標高は31m程である。北側は隣地との間に擁壁があり調査地が約1.5m低くなっていた。本来は土塁側に向かい高くなっていたと考えられる。

土塁と直交方向にトレンチをいれた。20cmの表土を除去すると、既に削平が行なわれており、凹凸を持つ橙褐色粘質土（花崗岩風化土の2次堆積層）の地山が現われる。ピットがひとつ検出されたが、遺物がなく時期は不明である。

調査地には現在木造の住宅が建築されている。

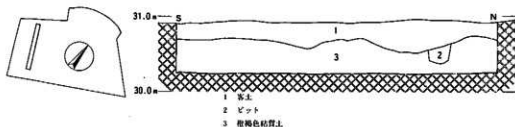


Fig. 5 19-141地点トレンチ位置および土層概念図

19-140地点 (Fig.6)

大字吉松448に所在し、敷地面積は約1200㎡である。今回はその一角にある個人住宅の建て替えに伴い調査をおこなった。調査地は、水城西門から南へ約30mで、官道西門ルート推定線の西隣接地にあたる。標高は約31mである。

50～80cmの盛土（茶色土）下に南に向かい厚く堆積していく黄茶色砂と青灰色土がある。さらに下層は青灰色粘質土が堆積しており北に厚くなっている。青灰色粘質土には丸太杭が打

ち込まれており、18～19世紀代に比定される陶磁器（広東碗、筒茶碗）が出土した。遺構は検出されなかった。このことから調査地は近世後半に流路となりその後湿地化していたらしい。

調査後、木造2階建の住居が建築されている。

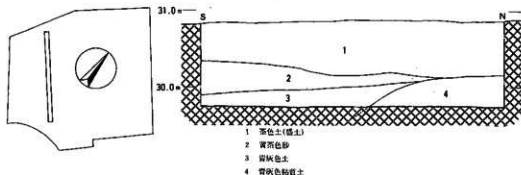


Fig. 6 19-140地点トレンチ位置および土層概念図

19-011地点 (Fig.7)

所在地は大字吉松183-2、4で、対象面積は1390 m^2 である。宅地造成に先立ち1985年4月4日に調査を行った。水城西門から南東へ50m程で、土塁のテラス部の法下にあたり、現況は水田である。標高は約30mを測る。

南半部は既に盛土造成が行なわれていたためトレンチは北側に設定した。現地表から北側では50cm、南側で60cmで地山と考えられる黄色粘質土・白灰色砂質土にいたる。地山は削平されていた。遺構は検出されなかった。遺物は瓦片が少量出土した。地山は西から東へ低くなっている。

調査地は宅地造成後分譲住宅となっている。

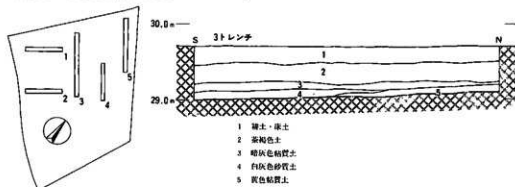


Fig. 7 19-011地点トレンチ位置および土層概念図

18-127地点 (Fig.8、Pl.51、別表1)

所在地は大宇吉松192-2で、対象面積は約900m²である。現況は水田であるが、共同住宅建築にともない、1991年4月10日に調査をおこなった。土塁から30m程南で、標高は約27mである。

5~8層は対象地全体にあり、水城に伴う流路跡と考えられる。7・8層は水流があったことを示すものである。5・6層は植物質を多く含み、流れが収まって形成された低湿地の状態を示すと考えられる。全体に緩やかな傾斜をもって北から南へ低くなっている。3層はその後開発された水田跡である。須恵器片、瓦片を出土した。

1は5・6層から出土した須恵器環aである。口径12.6cm、底径7.3cm、器高3.7cmを測る。底部外面はヘラ切り後軽くナデを、体部は横ナデをおこなっている。2は須恵器甕の口縁である。5・6層から出土した。復原口径40.2cm、頭部中央にヘラ状工具で2条の凹線をいれ、その上下に1条ずつ同じくヘラ状工具で粗い波状文を施している。内面は横ナデ調整である。

調査後は盛土され2階建共同住宅が建てられた。

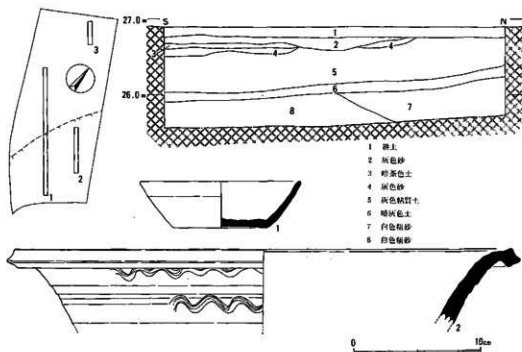


Fig. 8 18-127地点トレンチ位置・土層概念図および出土土器実測図 (1/3)

18-047地点 (Fig.9)

所在地は大宇吉松122-1で、対象面積は173㎡である。住宅建築のため、1987年9月29日に調査をおこなった。堤から南に約20mで、標高25m程である。1990年に木植の抜き跡が発見された第17次調査の30m東にあたる。

水田を80cm程埋立て、宅地としている。耕作土下には10cm弱の水田に関わる整地層と考えられるものが2層(3・4)あり、その下には水の流れによって形成された層が続く。堆積の時期は不明である。7層は南に向い厚くなっている。9層は硬くしまっている。

調査後木造住宅が建築されている。

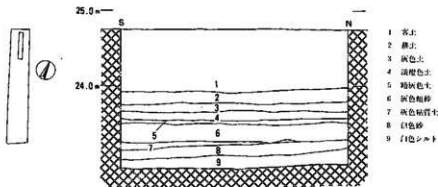


Fig. 9 18-047地点トレンチ位置および土層概念図

18-124地点 (Fig.10, Pla.4~6)

所在地は大宇吉松113-1、114-13で、対象面積は2250㎡である。宅地造成の開発許可申請に伴い、1990年12月19・20日、1991年1月9日に調査を実施した。調査地は土塁の延長線上で御笠川の西にあたり、いわゆる欠堤部と言われる範囲である。欠堤部は、本来土塁が存在したと考えられるが、御笠川の氾濫により削り取られたものと想定されている。現在の地形になった時期は不明であり、今回の調査で欠堤部に土塁が存在したのか、したなら削り取られた時期はいつなのか、という疑問に対して手掛かりを得ることが期待された。

トレンチは土塁に直角に設定した。1トレンチでは土塁ぎわで黄色の地山によく似た層(9層)を検出した。すぐに1mほど落ちている。地山の可能性もあるが、土塁からの流土の可能性もある。5層は薄い黄茶色粘質土であるが、黄色土と茶色土が斑になっており、人工的な貼り土の可能性も考えられる。6層は砂層で水流があったと思われる。8層には、遺構らしいもの(7)もあるが、遺構面とは断定できない。8層と9層の関係は不明である。遺物は出土していない。4トレンチは2・3層が流れにより堆積したと考えられる層で御笠川方向に落ちている。ト

レンチ南端では地表から1.8mの深さで流木を検出した。4・5・6層は黄色土ブロックを含み人工的な積土の要素がある。9層に至り湧水があった。

対象地の土層の存在の有無は確定できなかった。いずれにしても水城築堤以降に御笠川の氾濫原、もしくは堤に沿って西から流れる流路となっていたことが判明した。この場合、流路というのは水城の内堀であることを妨げない。また人工的な積土が考えられるならば土層は存在した可能性が強くなり、築堤以前も御笠川の氾濫原であったと考えられる。

調査後地権者のご理解により特別史跡への追加指定に同意いただき保存されることとなった。

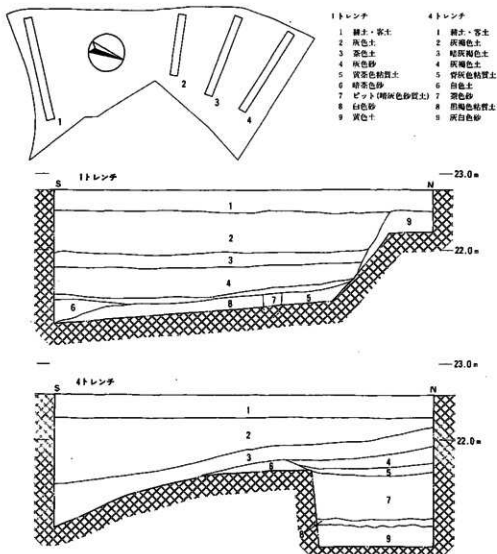


Fig. 10 18-124地点トレンチ位置および土層概念図

18-129地点 (Fig.11)

所在地は大字吉松115-1で、対象面積は200㎡である。現況は畑地であり、標高は約24mを測る。住宅建築にともない1991年3月14日に調査を行なった。対象地は御笠川から100m程西にあたり、18-124地点の隣接地である。

既に盛土がしてあり現地表面から150cm下で旧水田面にいる。18-124地点のレベルにほぼ等しい。30cmの耕作土、床土を除去すると暗茶褐色の砂層を検出した。遺物はごく僅かで中世の土師器片と考えられるもの以外は、時期等不明である。調査地は中世以降の氾濫原、もしくは流路の一部であったと考えられる。

調査後木造住宅が建築されている。

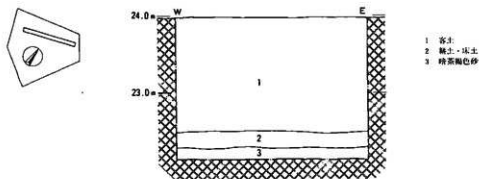


Fig. 11 18-129地点トレンチ位置および土層概念図

18-172地点 (Pla.6、7)

所在地は大字吉松1500で、御笠川の川底である。西日本鉄道大牟田線の鉄橋橋脚改修にともない工事立会調査をおこなった。川岸で標高20mである。九州縦貫道の調査で発見された川床の石敷や洗堰の検出を目的とした。

工事は橋脚の老朽化に伴いその補強を行っていた。現橋脚の周りを重機にて掘り下げコンクリート打設するものである。立会は重機での掘削の際におこなったが、2m掘り下げても水流による砂の堆積層しか観察できなかった。遺物は出土していない。

18-101地点 (Fig.12、Pla.7)

所在地は大字国分259・260-7で、対象面積は1050㎡である。資材置き場建設に先立ち1989年4月24日に調査を行なった。現況は水田で、標高は約23mである。御笠川の東約50mで、東は国分側土塁の法面に接する。18-124地点と同じで土塁がどこまで存在したのか問題となる場所

である。

耕作土、床土を除くと粘質土と砂層の互層になっておりいずれも水成堆積層と考えられる。7層から加工痕のある木片が、また8層からは土師器片、須恵器片が出土したが摩滅しており年代は不明である。土層との関係も不明である。

調査後はアスファルトが張られ廃車置き場になっている。

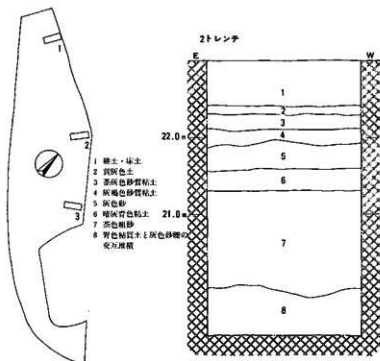


Fig. 12 18-101地点トレンチ位置および土層概念図

18-136地点 (Fig.13)

所在地は大字国分379-1・380-1、2で、対象面積は980㎡である。倉庫建築にともない事前の調査を1991年4月11日に行なった。現況は水田で、標高は約23mを測る。土層から南へ70m程の地点で、18-101地点の南にあたる。

耕作土、床土の下は18-101地点と同じく、粘質土と砂層の互層になっているが、3層の下面で遺構面が形成されている。遺構はあまりはっきりしていない。5・6・7層の関係も明確ではなく8・9層が全体に広がっているか疑問である。

調査後は盛土後軽量鉄骨の倉庫が建築された。

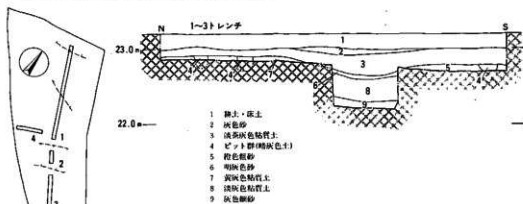


Fig. 13 18-136地点トレンチ位置および土層概念図

18-162地点 (Fig.14)

所在地は大字国分382-1で、対象面積は1740 m^2 である。住宅建築の事前調査を1993年1月12日に行なった。現況は水田で、標高は約25mである。土塁から南へ100m程であり今回報告分では土塁部分からいちばん離れている。

灰色粘質土(2層)以下は複数の流路によって堆積していることがわかり、このあたりが不安定な土地であったと思われる。6・7層が古い堆積で粘質土と砂層で構成されている。これらの層が北と南でそれぞれ新しい東西の流れによって切られている。遺物は出土せず、水城との直接の関係も不明である。

調査後、現況のままです耕田になっている。

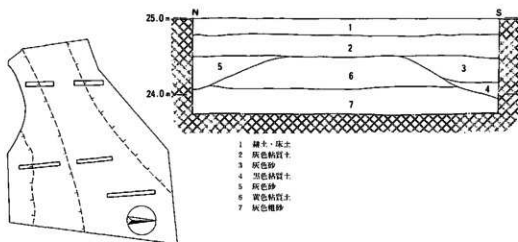


Fig. 14 18-162地点トレンチ位置および土層概念図

18-169地点 (Fig.15, Pla.9)

所在地は大字国分220-5で、対象面積は270 m^2 である。水田を土盛して家屋の増築をおこなうに際して、1992年1月22日に調査をおこなった。標高は約27.5mである。土塁の東門木樋からは50m程南にあたり第22次調査の南隣接地である。

粘質土と砂層の下で淡黄色の地山が地表からおよそ1mで検出できた。東側には四王寺山から派生する丘陵が迫っており、地山が安定して検出されるようになっている。5層は砂層で水流のあったことを示しており、第22次調査で検出された溝につながる可能性も考えられる。遺物は出土していない。調査後は休耕田のままである。

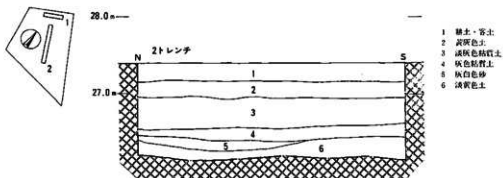


Fig. 15 18-169地点トレンチ位置および土層概念図

18-189地点 (Fig.16, Pla.8)

所在地は大字国分240-6、7で、対象面積は286㎡である。車庫建築に伴う事前調査を1993年1月12日に行った。現況は水田で、標高は約26mである。土塁から南に約50mで第13次調査の西隣にあたる。

3～6層は粘質の堆積土で、6層は遺物を包含している。9層は西から東へ、また北から南へ緩やかに傾斜している淡黄色粘質土の地山である。遺構群は溝や方形の土壇、ピットで構成されており地山に直接切り込んでいる。水城と直接関連するものは確認できなかった。第13次調査の所見に従えば、これらの遺構群は弥生時代から平安時代くらいの幅で捉えられる。調査後盛土して車庫が建てられている。

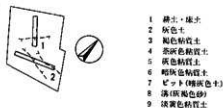


Fig. 16 18-189地点トレンチ位置および土層概念図

18-171地点 (Fig.17)

所在地は大字国分218で、対象面積は1100㎡である。住宅建築に伴い1992年2月25日に調査をおこなった。標高は約27.5mを測る。現況は水田である。18-169地点南隣接地にあたる。

土層堆積状況は18-169地点にほぼ等しく、粘質土が堆積している。南側は緩やかな傾斜を持

つ落ちが検出されており、自然流路と考えられる。流路のなかの灰色粘質土は縄目をもつ瓦を多く含んでいた。

調査後は現況のまま休耕田になっている。

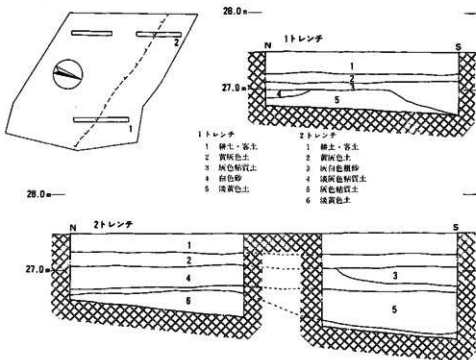


Fig. 17 18-171地点トレンチ位置および土層概念図

18-160地点 (Fig.18)

所在地は大字園分180-2で、対象面積は440㎡である。住宅建て替えに伴い旧家屋解体後の1992年2月28日に調査をおこなった。標高は約29.5mである。なお間口はコンクリート張りのためトレンチを設定することができなかった。この部分は推定官道東ルート上にあたり将来調査をおこなう必要がある。

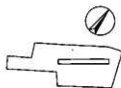


Fig. 18
18-160地点トレンチ位置図

上記の事情からトレンチは東の山側に設定したが、表土を30cm下げるとすぐに黄色の花崗岩風化土が検出され明らかに削平を受けていることが確認された。削平の時期は不明である。遺構、遺物は検出されなかった。

18-163地点 (Fig.19, Pla.9, 別表1)

所在地は大宇国分205で、対象面積は225㎡である。住宅建築の計画に先立ち1992年7月27日に調査を実施した。地目は宅地で現況は空閑地である。標高は約30mで、国分側土塁のテラス部分とはほぼ同じ高さになっている。水城東門推定地から南に50m程のところにあたり、東門から政庁へ向かう官道推定線上に面している。

東西方向にトレンチを設けた。地表から80cm程盛土がありその下面は凹凸をもっている。灰茶色粘質土(2層)は近世後半期の包含層で、3は近世のピットである。4層は8世紀以降の遺物を含む包含層である。その下に淡黄色の地山があり、奈良から平安時代と考えられるピット群が切り込んでいる。遺物は須恵器の甕が出土した。体部下半に手持ちのヘラ削りをほどこす。

地形は国道3号線を境に西は低く、東が高くなっている。高い側には旧耕作面が検出されず近世の遺構群や遺物が顕著であり、はやくから開発が進んでいたと考えられる。

調査後、地権者との協議をおこない特別史跡への追加指定に同意をいただいた。

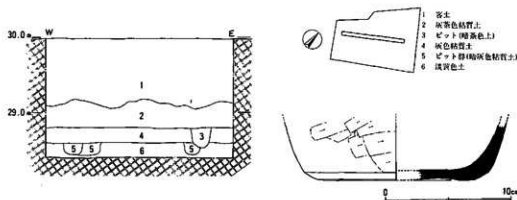


Fig. 19 18-163地点トレンチ位置・土層概念図および出土土器実測図 (1/3)

18-038A地点 (Fig.20, Pla.10)

所在地は大宇国分185で、対象面積は約1000㎡である。共同住宅建築に伴う事前調査を1988年2月8日におこなった。標高は約30.5mを測る。既に整地作業に入っており、史跡地の丘陵裾部も削っていたため工事を中断し調査にはいった。

東西方向のトレンチを設定した。西から東に高くなっており、東端では地山面が露出している。西へ行くに従い灰黒色砂質土が厚く堆積するようになり、西端では地表から地山面までは0.7~1mの厚さがある。遺構は地山に切り込んでおり、方形のピット群や数条の溝を検出して

いる。遺構の時期は確定できないが、遺物は奈良時代以降近代まであり、新旧重複して存在するものと思われる。

この調査後西側は建築で破壊される便槽の部分を第16次調査、東側を第18次調査として本調査をおこなった。盛土後軽盤鉄骨2階建の共同住宅と駐車場になっている。

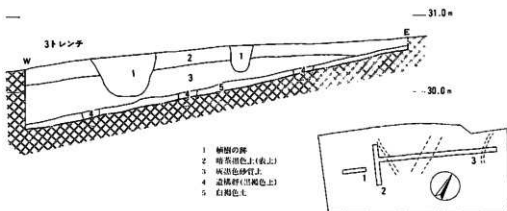


Fig. 20 18-038A地点トレンチ位置および土層概念図

18-011地点

所在地は大宇水城7で、対象面積は440m²である。共同住宅建築に際し事前調査を1985年1月におこなった。標高は約35mを測る。水城本体から博多側で自然丘陵の裾にあたる。当時の記録が散逸しており、調査担当者からの聞き取りと、写真、資料から報告する。

1m強の盛土の下から旧表土が現われその下には黒色の腐植土が約30cm堆積していた。腐植土下はすぐに青灰色の花崗岩風化土の地山が検出された。地山が青灰色を呈していたのは地下水のため還元されていたと考えられる。調査地が水城につながる丘陵の北側の谷筋にあたり、丘陵からの水流があったことが想像され、この水流が水城の外堀に導かれた可能性がある。

調査後は木造住宅が建築されている。

18-123地点

所在地は大宇水城57-1の一部で、対象面積は300m²である。事務所の改装に伴う事前調査で1990年10月25日におこなった。標高は約26.8mである。水城外堀の50m北側に位置し、現在の国道3号線西側にあたる。現況は倉庫への出入口に使用されているため、トレンチは国道際に2ヶ所(3×3m)を設定した。

両トレンチとも、地表から1.5mの盛土があり、以下旧耕作土、床土が検出された。床土直下で砂質分のやや多い黄色粘質土の地山に達した。遺構、遺物とも検出されなかった。

調査後鉄筋2階建の事務所が建築されている。

18-069地点

所在地は大字水城90-1・92-1外で、対象面積は2000㎡である。資材置き場建築に伴う事前調査を1990年2月3日におこなった。標高は約24.6mを測る。水城外堀の北70m程に位置し、外堀の北側の状況を把握することを目的とした。トレンチは土塁の軸線に垂直に対象地の東西にそれぞれ設定した。

各トレンチとも、また同一トレンチ内でも土層堆積状況は酷似しており、対象地が広い範囲で長期間同一環境にあったことを反映している。層序は、30～50cmの耕作土、床土を除くと黄色砂質土を検出した。この砂質土は20cm前後の厚さで堆積しており下面是凹凸がある。以下50cm厚の灰色砂層、10cm厚の灰色粘土層、また灰色砂層となり地表下180cmまで続く。これ以下は砂と粘土の互層となっている。遺構、遺物は検出していない。外堀の立ち上がりとの連続面は不明である。

調査後は休耕田になっている。

小結

土塁周辺は砂や粘土の堆積が多く水流によるものと考えられ、「貯水」の問題を考えるうえで重要である。しかしその堆積時期が水城築造以前のものか、堀の堆積物なのか、または築造後のものかはっきりしないものが多く、さらにこれらが錯綜して分布しており、整合的な解釈を困難にしている。今後の土塁周辺の試掘調査で堆積時期と分布を明確にすることで、水城全体の構造や機能を把握する手掛かりがえられると考える。

Ⅲ 各調査地点の記録

1 第11次調査

1) はじめに

調査地は太宰府市大字園分235,236-1,236-2に所在し、水害の災害復旧工事にともなって窯跡が不時発見され、立会をおこなった。窯跡の発見された位置は東木樋から約110m西の土塁上である (Fig.21)。この部分の土塁端は他の部分に比べて、若干突出している。調査は1986年3月24日で山本信夫・狭川真一が担当した。

2) 検出遺構 (Fig.22, Pla.11)

現場は水城堤の南側の斜面が滑落し、地権者によって滑落した土砂が除去された状態であった。斜面には焼土が帯状に露呈しており、清掃をして観察したところ2基以上の窯の存在が確認された。うち1基はプランが明瞭に見られ、窯体は土塁積み土を切ってつくられたことが確認された。窯体内に埴の存在が認められた。また、除去された土砂中に複数の平瓦と埴が採取

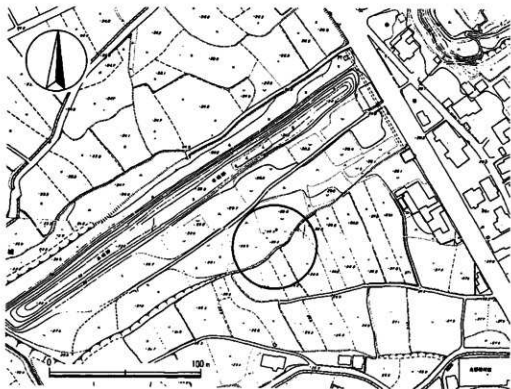


Fig. 21 第11次調査地位置図 (1/2500)



Fig. 22 第11次調査地現況

され、これによってこの窯が古代の瓦もしくは埴を焼いた窯であったことが判明した。埴は窯体の構築に使用された可能性もある。窯は指定地内であることから発掘は行わなかった。したがって窯構造の内容は不明であるが、半地下式平窯の可能性はある。

3) 出土遺物 (Fig.23、Pl.51、別表1)

瓦類

1は縄目の叩きを施す平瓦。焼きは瓦質。

2~4は埴。2は完形を保つもので、法量は $32.0 \times 20.6 \times 7.4\text{cm}$ 。砂粒を多量に含む土を用い、焼きは軟質。2次焼成は受けていない。3は $23.2+ \times 18.0 \times 7.2\text{cm}$ 。4は $18.9+ \times 17.8 \times 7.6\text{cm}$ 。

4) 小結

遺物からみてこの窯は奈良時代の可能性が高い。偶然のことながら、土塁上に窯が発見されたことにより、水城の一部が生産施設に利用された状況を知ることになった。また観察状況から窯の残存部位は奥壁に近い可能性がある。水城堤自体は窯の構築以降に削平などを受け、北側に後退した可能性が考えられる。

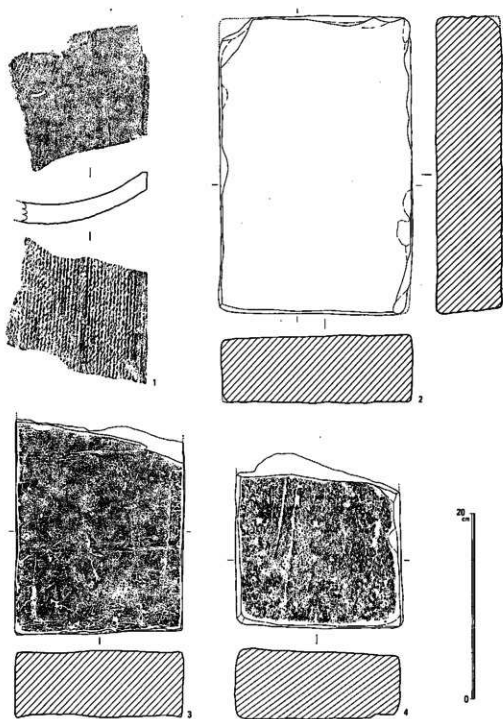


Fig. 23 第11次調査出土遺物実測図 (1/4)

2 第12次調査

1) 遺跡の位置 (Fig.24、Pla.12)

調査地は太宰府市大字吉松118に所在する。分譲住宅建築にともなって調査を実施した。調査対象面積は1106㎡、発掘面積は180㎡である。調査期間は1983年11月2日～11月22日で山本信夫が調査を担当した。

2) 土層 (Fig.26)

現代の水田耕作土=表土 (1) の下には、灰色砂 (5～8,12,14) が堆積している。ここからは白磁碗IV類、龍泉窯系青磁碗15-bが出土しており、中世の堆積といえる。この下層は青灰色粘質土 (18,19,20,24) をはさんで8世紀代の須恵器と瓦を包含する茶色粗砂 (21) の堆積がある。これより下層は灰色粗砂 (22) の無遺物層となっている。

3) 検出遺構 (Fig.25、Pla.12)

12SX001

調査区の北側で検出した竈み状の遺構で、灰色砂層から切り込んでいる。埋土は灰色粗砂の



Fig. 24 第12次調査地位置図 (1/2500)

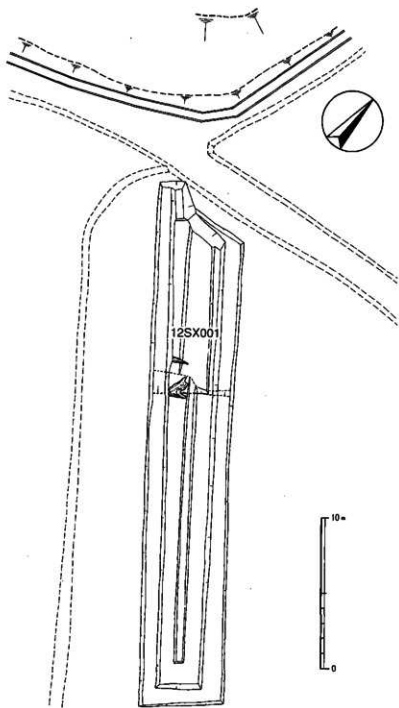


Fig. 25 第12次調査区平面図 (1/250)

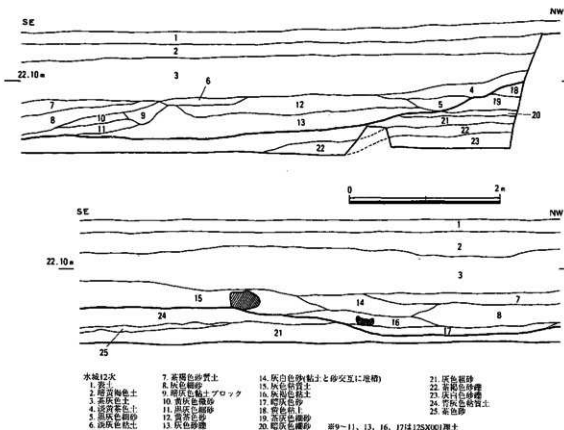


Fig. 26 第12次調査西壁土層断面図 (1/50)

堆積である。出土土器から9世紀以降の堆積と思われる。

4) 出土遺物 (Fig.27, Pla.52、別表1・2)

黒色土器

2は黒色土器A類の小甕で内面にミガキの痕跡を残す。口径は12.4cm、残存高さは4.0cm。青灰色粘土層出土。

須恵器

1は坏c。残存高さは2.3cm、底径7.6cm。青灰色粘土層出土。

瓦類

4は斜格子のタキを施す平瓦で焼きは須恵質。3は縄目のタキを施す平瓦で焼きは瓦質。

二点とも青灰色粘土層出土。

石器

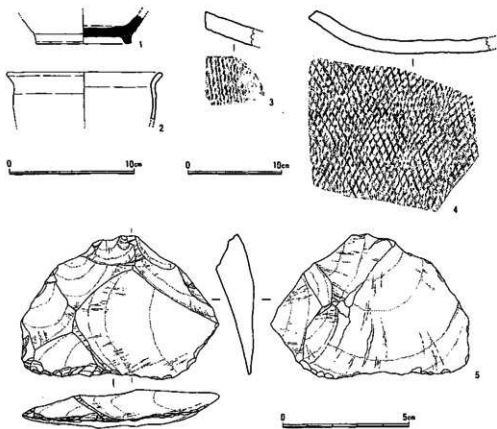


Fig. 27 第12次調査出土遺物実測図 (1/3・2/3・1/4)

5は安山岩の横長剥片を素材とした二次加工（リタッチ）を持つ剥片石器。あまり表面は風化していない。5.8×8.0×1.6cm。青灰色粘土層出土。

5) 小結

調査自体は水城堤の内堀存否の問題と堤が欠落している部分の土層の状況確認が主たる目的であった。設定したトレンチの土層断面の所見から、水城に近いほうで土層が変化していることが確認されたが、この土層変化が土塁に関わるか否かは、結局今回の調査では把握できなかった。最下層で確認した灰色粗砂層（Fig3-22）は自然の沖積作用により形成された無遺物層で、古代もしくはそれ以前のもと思われる。この沖積層の下流側である北東方向は水城の堤が欠落している箇所にあたるが、今回の調査のみでは時期的、構造的に堤の欠落を説明することは難しい。

3 第13次調査

1) はじめに

調査地は、太宰府市大字園分字衣掛240-3、4で、個人住宅建設に先だって発掘調査を実施した。調査面積は113㎡であるが、諸事情から最下層まで掘り下げ

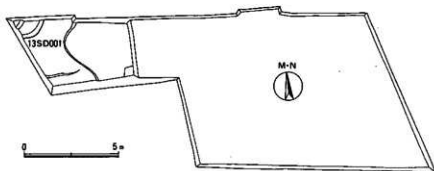


Fig. 28 第13次調査遺構配置図 (1/200・磁北)

られたのはわずか18mにすぎない。現地での調査は、1986年4月1日から4月11日まで行ない、狭川真一が担当した。

2) 層位 (Fig.29、Pla.14)

現在の水田面を除去すると、この水田を作る際の整地面 (淡黄色粘土) があり、かなりよく絞まった土層である。その直下は上位から順に灰色砂質土層、黄褐色粘土層、灰褐色粘

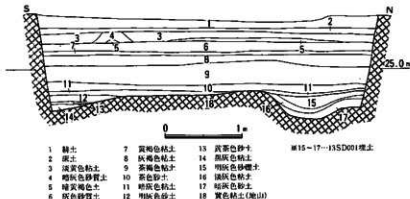


Fig. 29 第13次調査区西壁土層断面図 (1/50)

質土層、茶褐色粘土層、茶色砂層、暗灰色粘土層が堆積し、黄色粘土の地山に達する。調査区内の南側では緩やかな傾斜地形になっており、その部分では地山と暗灰色粘土層の間に、上から明灰色砂層、黄茶色砂層、黒灰色粘質土層が堆積している。浅い流路の一部である可能性が考えられる。また、溝遺構は地山から切り込んでいる。

3) 遺構

13SD001 (Fig. 29、Pla. 13・14)

幅1.1m、深さ約0.3mの溝である。長さ0.3m分を検出したにすぎない。流れは東から西方向である。埋土は上から明灰色砂礫層、淡灰色粘土、暗灰色砂層の堆積で、かなりの流れがあったことを窺わせる。ただ、堆積土は検出した溝遺構のなかで完結しない状況であり、本来の溝の規模はこれよりさらに北に広がっていたことが窺え、今回の検出部分はその一部である可能性が高い。

4) 出土遺物 (Fig.30、Pla52、別表1)

13SD001出土土

器

弥生土器

甕 (1・2) 1は口径32.0cmに復原される。2は底部の資料で、径6.8cmに復元される。

灰色砂層出土土

器

白磁

碗 (3) 口径17.0cmで、口縁部は外反している。軸は灰色味をおびた淡緑色で透明なものである。VI類またはVII類。

青磁

碗 (4) 口径16.0cmで内面に鹿書きの文様がある。軸は灰色味をおびた緑黄色で透明なものである。龍泉窯系I-4類。

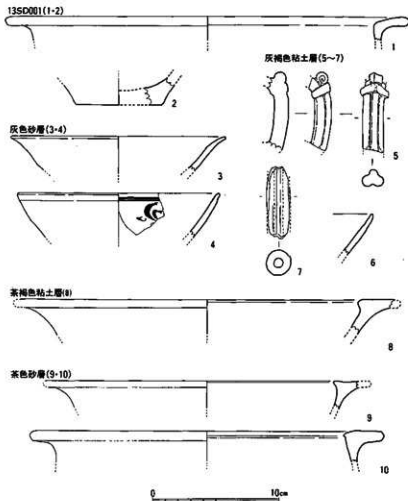


Fig. 30 第13次調査出土土器実測図 (1/3)

灰褐色粘土層出土土器

白磁

水注(5) 把手部の残欠である。残存する長さは6.3cm、幅1.6cmを測る。把手の上部に蕨手状の装飾を有する。釉は残存部分の全面に施され、やや空色味を帯びた透明釉でやわらかな光沢がある。胎土は軟質ながら緻密、精良で、若干灰色味をおびた白色を呈している。1965年に河北省曲陽県許城から出土した白磁水注(五代)の把手に同様の類例を求めることができる。

青磁

碗(6) やや灰色味をおびた緑色の釉で、やわらかな光沢がある。越州窯系青磁碗I類または初期高麗青磁と思われる。

土製品

土錘(7) 現存長5.8cm、径1.9cmで、中心に径0.7cmの貫通する孔がある。両端部ともに欠失する。

茶褐色粘土層出土土器

弥生土器

8は、口径30.6cmに復原されるか、片のためやや精度が悪い。高坏の口縁部の可能性がある。

茶色砂層出土土器

弥生土器

9は口径約20.0cmに復原される。高坏の可能性がある。10は甕で、口径28.0cmを測る。

5) 小結

調査面積が狭小のため、まとまった成果は語れない。検出された溝は、出土土器から弥生時代中期に形成されたものと思われ、その上面にかぶる茶褐色粘土層までは同時期の遺物で占められる。これより上位の堆積層は、陶磁器が若干量出土しており中世まで下るものである。ただ、灰褐色粘土層はそれよりやや古い傾向がみられ、平安時代まで遡る可能性を考えておきたい。

調査地は水城跡から約50m離れた地点で、内堀の一部が検出される可能性も考えられたが、この地点では明らかにできなかった。なお、太宰府市のこれまでの調査で弥生時代中期に属する遺構は、この地点から東側にやや離れた国分松本遺跡(筑前国分尼寺跡周辺)で集落の一部が調査されており、参考になろう。

4 第14次調査

1) はじめに

調査地は、太宰府市大字吉松字原ノ下123-1で、住宅建設に先だつて発掘調査を実施した。調査地南半分は砂層の堆積のみであったため、北側を中心に調査区を設定した。調査面積は110㎡である。現地での調査は、1986年10月28日から11月5日まで行ない、狹川真一が担当した。

2) 層位 (Fig.33)

遺構の上面を覆う堆積は、表土と床土の下に黄茶色土があり、それと遺構の間には淡茶色砂層、暗茶色礫混り層、明茶白色砂層、明灰色砂層、灰白色粘土層などが認められる。これらはいずれも調査区の南側へ堆積を繰り返しながら延びている。南側ではこれより下層に暗灰色粘土層が確認されるが、

遺構との前後関係は把握できない。したがって、暗灰色粘土層以外は後述する遺構よりも新しい堆積と言える。

遺構が穿たれる地盤は、黄色粘質土や灰黄色土、白色粘土の粗い水平堆積の様相を呈する。遺構の南側では、黄色粘質土などが堆積するがそれ以南は明らかではない。遺構の北側の地盤については、水城の積み土である可能性も考えられる。

3) 遺構

14SD001 (Fig.32・33, Pla.16)

水城に平行して構築された溝遺構である。検出長約7.5m、幅4.5~7.5mを測る。溝の肩は調査区の西側で安定した状況を示しているが、中央部分ではかなり乱れている。底面も大きく乱

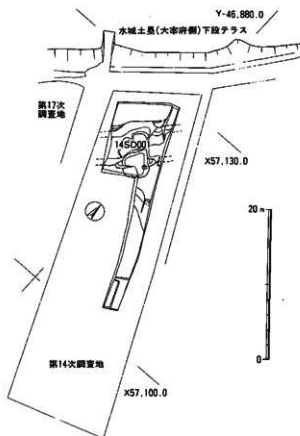


Fig. 31 水城土塁と第14次調査地位置図 (1/500)

れており、流れによる侵食作用を思わせる。遺構内の堆積は、大きく分けると上面から順に茶白色砂層（上下に分層）、黒灰色粘土層、灰白色砂層、明茶色砂層となる。これらの砂層からかなりの流れがあったものと想定されるが、埋没までには淀んでいた時期も存在していたことが黒灰色粘土層の存在から窺われる。

4) 出土遺物

土器 (Fig.34, Pla.53, 別表1・2)

14SD001茶白色砂層上層出土土器

須恵器

蓋 (1) 宝球形のつまみを有するもので、天井部は回転ヘラケズリ調整。

坏c (2) 高台径8.4cmを測る。高台の形状は四角形で低めのものである。底部と体部の境目は不明瞭で丸みを帯びている。

坏a (3) 底部は回転ヘラ切りで終わっている。底部径10.8cm。

14SD001茶白色砂層下層出土土器

須恵器

坏c (4) 口径13.0cm、器高4.1cm、高台径9.3cm。高台は台形状を呈し、底部のやや外方に貼り付けられる。体部はヨコナデで仕上げられる。

14SD001灰白色砂層出土土器

須恵器

蓋 (5) 天井部は回転ヘラケズリされる。体部中位に沈線状の軽い段が巡る。

14SD001明茶色砂層出土土器

須恵器

蓋 (6) 口径14.2cmに復原される。体部中位に沈線状の軽い段が巡る。

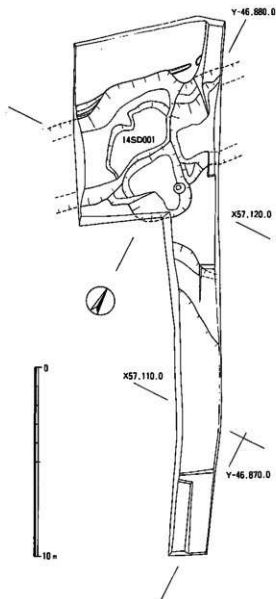


Fig. 32 第14次調査遺構配置図 (1/200)

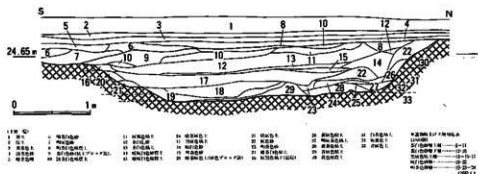


Fig. 33 14SD001土層断面図 (1/50)

木器

14SD001黒灰
色粘土層出土木
製品 (Fig.35、別
表3)

チップ材 (1~
10) 長さ5.6~
18.1cm、幅2.6~
6.4cm、厚さ0.4
~1.9cmを測る。

ほとんどの材の
両小口部分に、

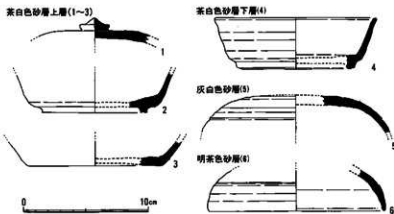


Fig. 34 14SD001各層出土土器実測図 (1/3)

工具によってカットされた形跡がある。7では資料の中位にも同様の痕跡が確認される。

杖 (11) 直径8.4~9.4cm、現存長36.8cmを測る。表面は特に加工されておらず、樹皮を剥いだ程度である。先端は3方向からカットされている。

14SD001灰白色砂層出土木製品 (Fig.36、Pl.53、別表3)

えぶり (1) 長さ32.7cm、幅7.8cm、厚さ2.2cmを測る。身は割板材を利用し、直線を呈する下縁に15箇所の山形の切り込みを入れ、歯を形成する。歯は使用によってかなり磨耗しているが中央部分が特に擦り減っている。両肩は丸みを帯び、中央やや上寄りに台形状の柄孔を穿つ。孔内には柄の先端部が残存している。柄の装着角度は、前面に対して約77°の角度を有する。柄の前面から楔として別の木片が打ち込まれている。楔に利用される木片は、長さ5.0cm、幅1.1cm、厚さ0.15~0.3cmで先細りの形状を呈している。また、歯部近くに長さ4cm、幅1cmで方形の穿孔があるが、この製品の用途からみて廃棄後に穿たれたものと思われる。

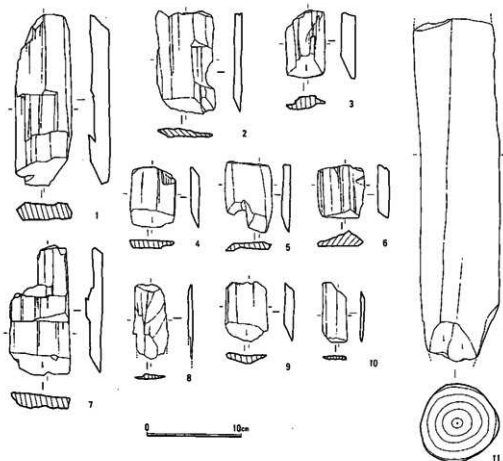


Fig. 35 14SD001黒灰色粘土層出土木製品実測図 (1/4)

杵 (2, 3) 2は長さ30.2cm、直径4.0~4.2cmを測る。表面は樹皮が残り、先端は上方から数回に分けて割り込みを行なっている。3は、長さ56.2cm、直径3.3cmを測る。先端は上方から割り込んで成形し、末端は簡単に面を整える。表面には樹皮が観察される。

チップ材 (4~21) 大小様々なチップ材である。長さ4.6~15.5cm、幅2.1~7.5cm、厚さ0.6~1.9cmを測る。ほとんどの材の両小口部分に、工具によってカットされた形跡がある。7~9、15には小口以外の部分にもカット面が確認される。

14SD001明茶色砂層出土木製品 (Fig.37・38、別表3)

チップ材 (1~34) 1~32は、長さ5.9~28.8cm、幅1.8~2.6cm、厚さ0.5~7.3cmを測る。ほとんどの材の両小口部分に、工具によってカットされた形跡がある。小口以外の部分にもカット面の確認される資料が多くある。特に9は3面が丁寧に削られており、なんらかの製品の一部

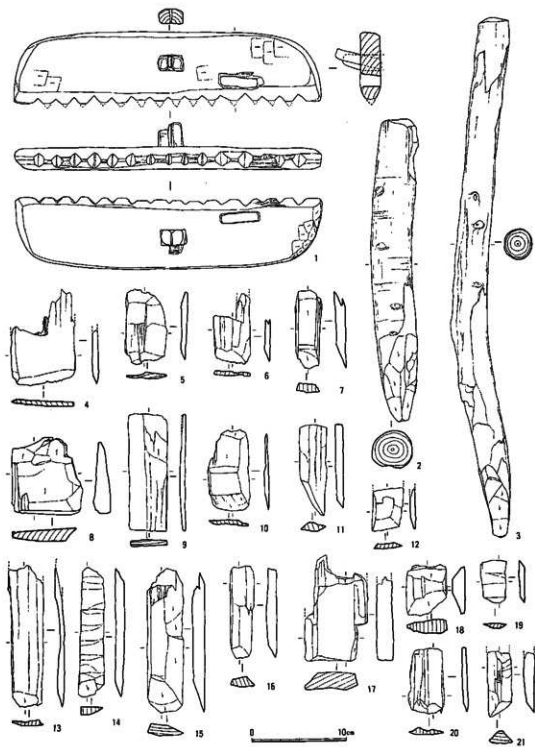


Fig. 36 14SD001灰白色砂層出土木製品実測圖 (1/4)

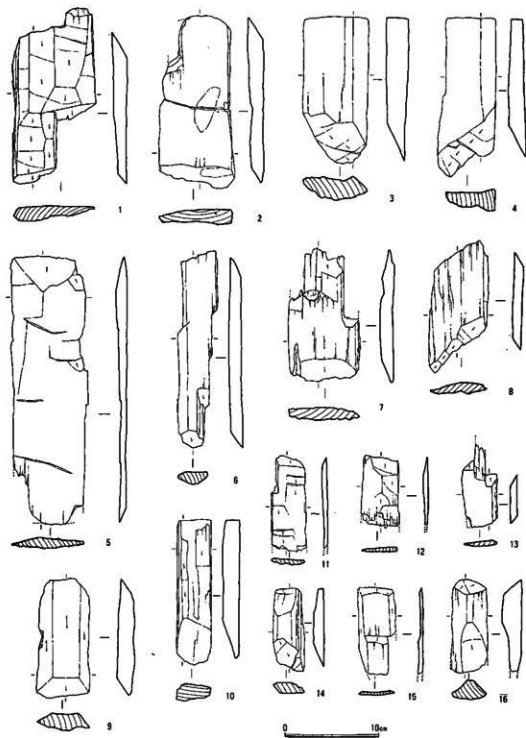


Fig. 37 14SD001明茶色砂層出土木製品実測図(1) (1/4)

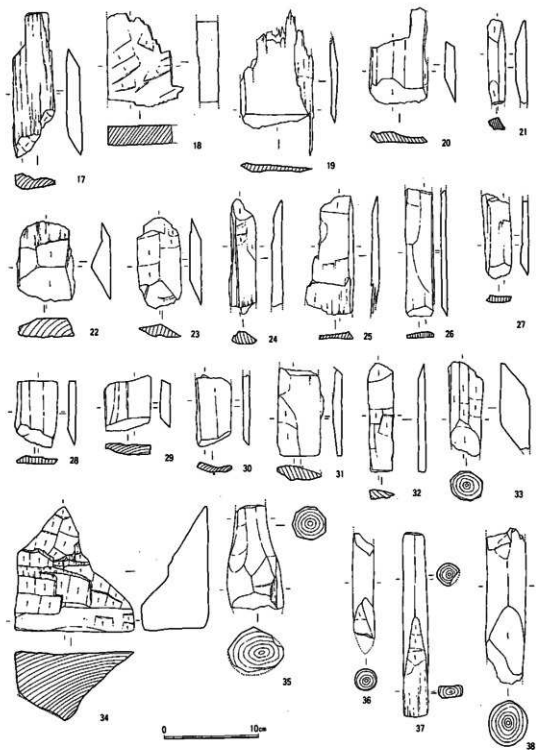


Fig. 38 14SD001明茶色砂層出土木製品実測圖(2) (1/4)

である可能性もある。33は、長さ10.3cm、幅3.6cm、厚さ3.2cmを測る。ほとんど全体にわたってカット面が確認されるが、杭の加工に伴って出たチップ材とみられる。34は角材のチップで、長さ13.3cm、幅12.6cm、厚さ7.3cmを測る。斜め方向に細かな削り込みが確認される。

杵 (35) 最大径6.0cmを測るもので、杵の一部と判断される。

杭 (36~38) 36の先端は、1方向からのカットである。37の先端は2方向からカットされ、最先端部分は未だ平坦部が残っていることから、未製品の可能性もある。

石器 (Fig.39、Pl.53)

1は、黒曜石の剥片で、床土出土。2は、安山岩の石鏃で扱りは深い。14SD001 茶白色砂層上層出土。

5) 小結

検出した遺構は、水城に平行して流れる溝遺構 (14SD001) のみであった。しかしながら、この地

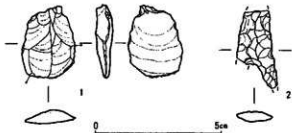


Fig. 39 第14次調査出土石器実測図 (2/3)

点は水城の両側に接している点で、この遺構が内堀の一部である可能性を窺わせるものである。溝の年代は、出土土器を見るかぎり、溝下層の明茶色砂層、その上の灰白色砂層ともに水城構築時期とされる天智朝よりも古い様相を呈している。しかし、出土した木器は農具の一部を含むもののチップ材が多数を占め、この付近で何らかの工作行為が行なわれたことを窺わせるものである。木製品の多くは、最下層の明茶色砂層からその上位の黒灰色粘土層にわたって検出されており、工作行為の時期が溝出現の早い段階で行なわれていたことを物語っている。

この調査地点の西側隣接地は、木桶を検出した第17次調査地点であり、水の流れが西から東 (17次側から14次側) であることも併せて、木桶建設に関係する木片の可能性も考えておきたい。したがって、これらの層の年代は6世紀~7世紀中頃までの範囲で考えておきたい。

また、溝の最終埋没時期であるが、出土遺物の傾向では遺構最上層である茶白色砂層から8世紀前半から中頃の遺物が出土しており、これより新しいものを含まないことから、ここでは一応最終埋没を奈良時代の中頃前後に考えておきたい。

このことから溝の性格として水城内堀が妥当か否か問題となるが、この部分のみの調査所見で結論付けることは難しく、周辺の調査所見と併せて慎重に検討すべき遺構であることを確認して結びとしたい。

5 第15次調査

1) はじめに

調査地は、太宰府市大字吉松字梨184-2外で、住宅建設に先だって調査を実施した。調査地は水城跡に隣接する部分で2箇所（字梨184-2を第15-1次調査、同185-1・185-6・185-12を第15-2次調査とする）と約50m離れた地点1箇所（字松本205-1・206-1の各一部を第15-3次調査とする）の計3箇所にトレンチを設定した。現地での調査は、1986年10月27・28日と11月10日に行ない、狭川真一が担当した。また、字梨184-1・184-2でこの折に不明であった部分に再度トレンチを設けて補足調査を行なった。この調査については1993年7月22日に行ない、中島恒次郎が担当した。

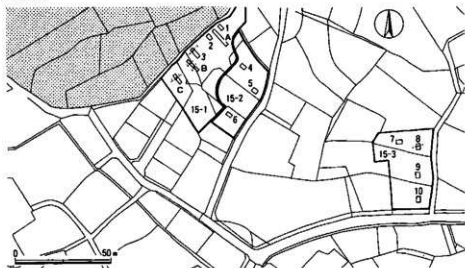


Fig. 40 第15次調査トレンチ位置図 (1/2000、網部分は特別史跡指定地)

2) 各地点の概要 (Fig.40, Pla.17)

第15-1次調査

水城の土手に沿って3箇所のトレンチを設定した（仮に北東から1~3トレンチと呼称する）。すべてのトレンチで砂の堆積層を確認しただけにとどまるが、3トレンチでは水城に近い位置で黄茶色粘土の地山を検出し、南側に傾斜する部分を確認した。砂層の堆積はこの上に確認され、下から茶色砂層、白色砂層、暗青灰色粘質土層などが堆積する。

また補足として行なった調査では、最初のトレンチよりさらに南側へ延長した部分まで地下の確認を行なった（仮にA~Cトレンチと呼称する）。この部分で最も西側に設定したCトレ

ンチと中央のBトレンチでは、水城土手裾部分から南へ約6mの地点で黄色粘土の立ち上がりが認められた。先の調査と併せて幅4～5m程度の流路の存在が想定される。さらに、Bトレンチではその立ち上がり部分から南側数mの地点で再度段落ちが確認され、砂が幾層も堆積していたことから別の流路の存在が想定される。この所見をもとに東端のAトレンチをみるといずれの延長上にも立ち上がりは確認できず、すべて砂の堆積層で形成されていた。おそらく両溝が切り合って重なり合った状況なのであろう。切り合い関係は明確にはできていない。また遺物も出土しなかった。

第15-2次調査

3箇所トレンチを設定した(4～6トレンチ)。いずれも表土下は暗灰色の粘土層で、さらにその下に白色砂層、茶色砂層などが堆積していた。白色砂層からは須恵器甕片が、茶色砂層からは土師器片がそれぞれ出土した。

第15-3次調査

4箇所トレンチを設定した(7～10トレンチ)。最も北側の7トレンチでは茶白色粘土の地山とみられる安定面が確認されたが、そのすぐ南に設けた8トレンチでは、南に向かって段落ちが確認された。落ち部分には暗白色砂層、灰色砂層などが堆積していた。また南側2箇所のトレンチ(9・10トレンチ)では、表土下に暗白色砂層、灰色砂層、茶色砂層、黄色粘土層、茶白色砂層、明青灰色粘土層の順に堆積していたが、遺物は出土していない。

3) 小結

今回の調査では、トレンチのほとんどが砂や粘土などの堆積を確認した程度であるが、水城の土手に近接する位置にそれに沿う状況で流路が確認されたことは、水城内堀の存在有無を検討するうえで貴重な所見を得たものと言える。しかしながら、調査はいづれも狭いトレンチで行なっているため、機会があればこの地区は全面的な発掘調査を実施することが望まれる。

6 第16次調査

1) はじめに

調査地は太宰府市大字国分字衣掛185に所在し、共同住宅の浄化槽設置にともない調査を実施した。調査期間は1988年3月10～3月23日で緒方俊輔が調査を担当した。調査面積は12㎡である。

2) 層位 (Fig.41, Pla.18)

土層の状況は上から、現代の遺物を含む黒灰色土、近世後期から近代にかけての遺物を含む茶褐色土(以上2層は表土と併記され遺物が取り上げられた。)が堆積し、その下位に後述する整地層(16SX025)を切り込む遺構群(上層遺構)がある。この面では調査区の北側が敷地境であったことから、東西方向の溝(16SD001)等が見られる。その下にピットを中心とした遺構が検出された。遺構の乗る基盤層は四王寺山から派生した花崗岩風化土層であるが、調査区の南側には古代に形成されたと思われる整地層が存在する。

3) 遺構 (Fig.41, Pla.18)

16SD001

調査区の北側を東西に横切る溝状遺構で、おおまかに上位に茶灰色土、下位に暗灰色土が堆積している。下位の暗灰色土は粘質味を帯び木材などの植物遺存体を包含する。木材の一部は杭で支えられ、護岸を意図したものか。

明治前半期をわずかに含み江戸時代後半期を主体とする遺物が出土した。

16SX025

調査区南側に広がる厚さ約20cmの土層で、黄茶色土(上層)と灰茶色土(下層)から成る。整地層と認識している。黄茶色土は西壁付近では北に傾いて堆積している。遺物は8世紀中頃以降の奈良時代のものが出土している。その他、多くのピットや土坑状の遺構が検出されたが、調査区が狭小のため多くを語りえない。これらの内、16SX002・007・009・011・012・029・031は古代の、16SX016・018は中世の所産と思われる。

4) 遺物 (Fig.42～48, Pla.53～58, 別表1・2)

須恵器

1は蓋3。2～4・58・59は坏c。5は外底部に粗い手持ちのケズリを残す坏。58は外底部に粗いケズリを残す。60は皿。

瓦

7は外区に珠文を持つ軒平瓦。8～10は平瓦。やや軟質で、9のみが硬質。8は黒色を呈し他は灰色。

61は内区に1+4+8の珠文を持つ鴻臚館式の軒九瓦。50は総イブシの近世以降のもの。

環

11～16は無文磚。ほとんど破片である。須恵質の灰色のものと瓦質の乳灰色のものとがある。11は硬い須恵質で表面に粗いナデが残る。62は厚さ6.4cm。硬い須恵質で表面に粗いナデが残る。

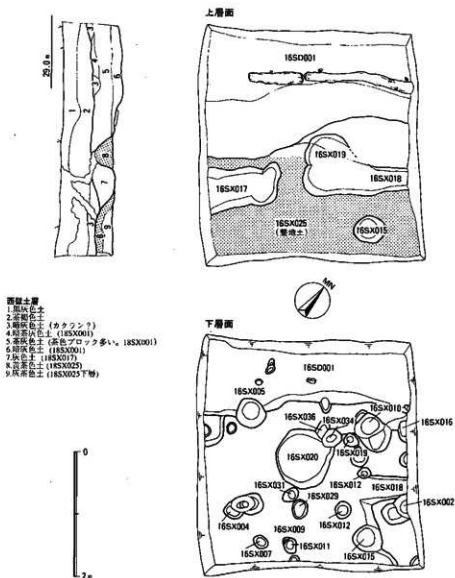


Fig. 41 第16次調査遺構実測図 (1/60・磁北)

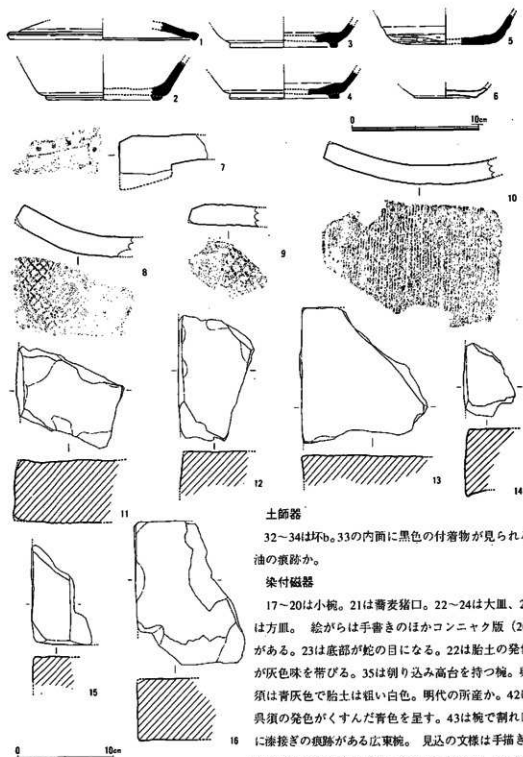


Fig. 42 第16次調査出土遺物実測図(1)
(1/3・1/4)

土師器

32~34は坏b。33の内面に黒色の付着物が見られる。油の痕跡か。

染付磁器

17~20は小碗。21は蕎麦猪口。22~24は大皿、25は方皿。絵がらは手書きのほかコンニャク版(20)がある。23は底部が蛇の目になる。22は胎土の発色が灰色味を帯びる。35は削り込み高台を持つ碗。呉須は青灰色で胎土は粗い白色。明代の所産か。42は呉須の発色がくすんだ青色を呈す。43は碗で割れ口に漆接ぎの痕跡がある広東碗。見込の文様は手描き。51は丸碗で外底部に「福」のくずし字あり。52は皿で焼成後に緑、青色を加色する。64~69は丸碗。68

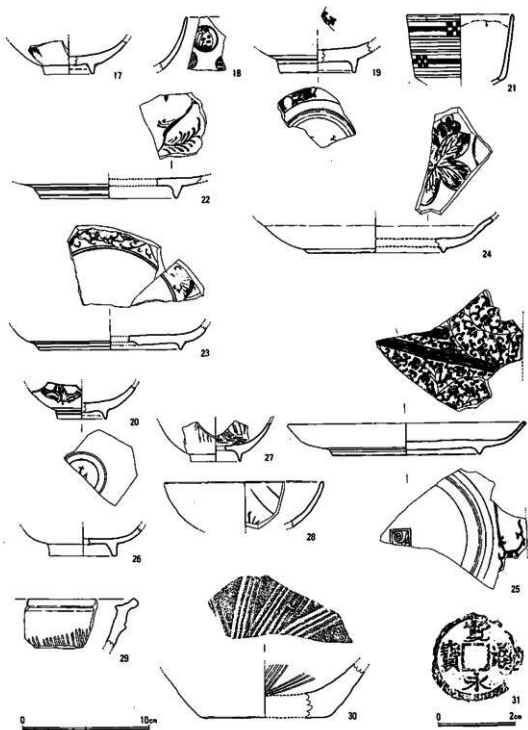


Fig. 43 第16次調査出土遺物実測図(2) (1/1・1/3)

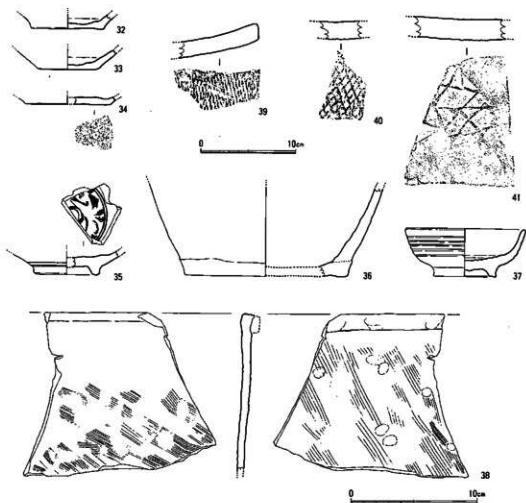


Fig. 44 第16次調査出土遺物実測図(3) (1/3・1/4)

はコンニャク版。66は二次焼成を受け、器面が荒れる。71～75は皿。71は洗坏の口縁か。74は具須がごく薄く灰色味を帯びる。

印版手（プリント）は表土層からかなりの量が出土しているが、今回は割愛した。

全体的に肥前系と考えられるものが多く、器型から18世紀以降のものが主体を占めている。特に、19世紀中葉前後のものが多い。

白磁

26は角型の高台を持つ椀。釉調は淡緑色味を帯びる。76は丸椀、14は体部が直線的になるもの。78は型抜ききの紅皿。45は坏もしくは皿。46は底部内面が輪状に軸ハギされる。

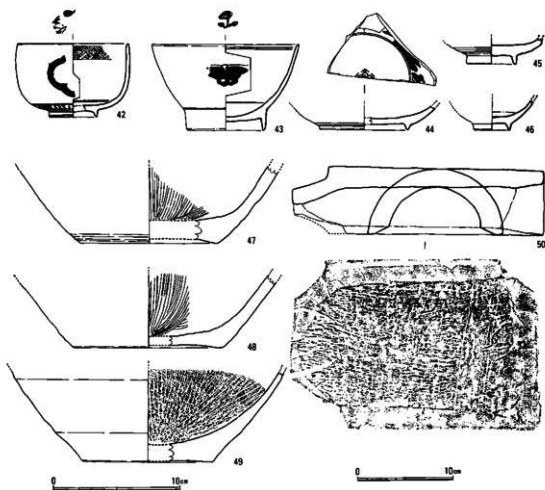


Fig. 45 第16次調査出土遺物実測図(4) (1/3・1/4)

陶器

27・28は碗。胎土がやや軟質。27は茶色の釉に白色の刷毛をかける。28は透明釉に赤、緑で加色する。29・30は揺り鉢。両者とも無釉で、29は硬質で茶色、30は須恵質で灰褐色を呈す。36は褐色釉の甕。37は列り込み高台を持つ坏。灰色を呈す。3つの目跡がある。47～49は揺り鉢。赤～褐色を呈し、48のみ軟質。49はやや須恵質。すべて無釉。53・54は天目に近い褐色釉の碗。56は刷毛手の碗。6は褐色を呈す無釉陶。57は口縁端部のみに褐色釉をかける揺り鉢。79～86は碗。79・80は灰色系の、81～83は緑色系の釉がかかる。85・86は刷毛手の仕上げ。87は榎木鉢で淡緑色釉。88～90は甕で褐色の釉がかかる。88の胎土は赤褐色で軟質。90は大型。91は大型のこね鉢で刷毛手。93は鉢で92には緑灰色の釉がかかる。93は赤茶色を呈す無釉で硬質の揺り鉢。94は器種不明。緑灰色釉がかかる。

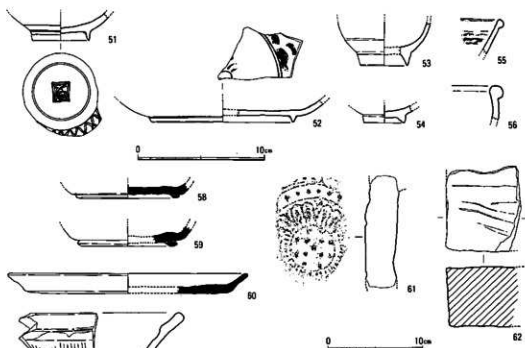


Fig. 46 第16次調査出土遺物実測図(5) (1/3・2/3・1/4)

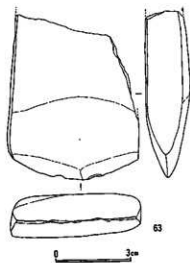
瓦質土器

38は大甕。内外でハケの幅が異なる。淡灰色を呈す。

金属器

銅銭 (31)

「寶」字の「貝」の下が「ス」になる、いわゆる古寛水通寶 (1636年～)。



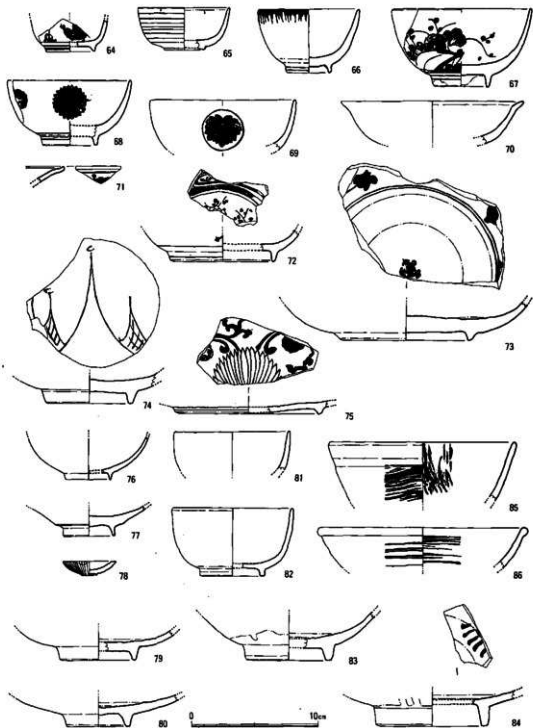


Fig. 47 第16次調査出土遺物実測図(6) (1/3)

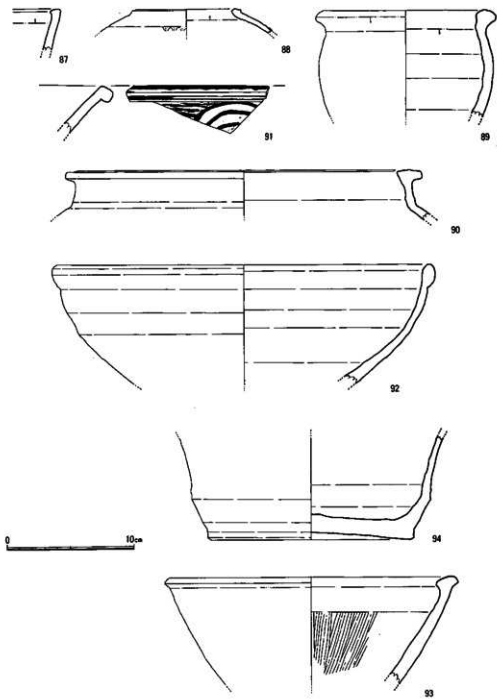


Fig. 48 第16次調査出土遺物実測図(7) (1/3)

第16次調査遺物出土地点、法量一覧

出土地点一覧

Fig.42,1~11は表土層。Fig.42,12~16, Fig.43,17~31は16SX001。Fig.44,32は16SX016。33は16SX018。34は表土層。35は16SX023。36は16SX006。37は16SX004。38は16SX005。39・40は16SX025下層。41は16SX027。42~49は暗灰色粘土層。51~56・63は黒灰色土。64~93は表土層出土。

法量一覧 (口径-器高-底径 または天上部径の順 欠損は+ α 単位cm)

1 (15.1-1.4+ α -) 2 (-3.1+ α -9.3) 3 (-1.9+ α -8.5) 4 (-2.3+ α -8.7) 5 (-2.4+ α -8.1) 6 (-0.8+ α -5.0) 8 (-2.2-) 9 (-2.2-) 10 (-2.0-) 11 (-6.7-) 14 (-7.3-) 16 (-6.5-) 17 (-2.7+ α -3.9) 19 (-2.4+ α -6.0) 20 (-2.7+ α -3.8) 21 (8.4-5.3+ α -) 22 (-1.7+ α -10.9) 23 (-2.0+ α -11.3) 24 (-2.6+ α -11.0) 25 (-2.5-12.8) 26 (-2.4+ α -5.4) 27 (-3.1+ α -4.0) 28 (12.6-3.7+ α -) 30 (-4.2+ α -5.1) 31 (2.5-0.15) 32 (-1.2+ α -5.8) 33 (-1.7+ α -4.6) 34 (-0.7+ α -6.9) 35 (-1.8+ α -5.2) 36 (-7.2+ α -12.8) 37 (9.5-3.8-4.9) 42 (8.8-5.8-3.8) 43 (11.6-6.8-6.2) 44 (-2.0+ α -7.1) 45 (-2.1+ α -4.0) 46 (-2.4+ α -3.0) 47 (-6.2+ α -11.0) 48 (-5.2+ α -12.1) 49 (-7.2+ α -10.4) 51 (-2.3+ α -4.5) 52 (-1.8+ α -11.3) 53 (-3.5+ α -3.8) 54 (-1.9+ α -3.3) 63 (6.5+ α -5.5-1.8) 64 (-2.5+ α -3.8) 65 (7.4-3.3-2.2) 66 (8.0-5.0-3.6) 67 (11.0-6.2-4.6) 68 (9.8-5.1-4.4) 69 (13.6-4.0+ α -) 70 (14.8-3.3+ α -) 72 (-2.3+ α -8.4) 73 (-2.9+ α -10.6) 74 (-2.5+ α -7.0) 75 (-1.1+ α -11.8) 76 (-3.4+ α -3.6) 77 (-2.3+ α -4.0) 78 (4.2-1.2-1.2) 79 (-2.4+ α -6.0) 80 (-2.6+ α -5.1) 81 (9.2-3.1+ α -) 82 (9.7-5.4-5.2) 83 (-3.5+ α -6.7) 84 (-2.8+ α -8.9) 85 (14.8-4.7+ α -) 86 (16.6-3.2+ α -) 88 (8.7-2.0+ α -) 89 (14.2-8.4+ α -) 90 (28.2-4.0+ α -) 92 (30.2-9.6+ α -) 93 (23.2-8.5+ α -) 94 (-8.3+ α -15.6)

第18次調査遺物出土地点、法量一覧のつづき(103ページより)

27 (1.3-8.9+ α -) 28 (18.0-1.6-14.3) 29 (17.4-2.2-14.4) 30 (14.4-1.8-11.4) 32 (5.7+ α -9.0+ α -2.0) 36 (17.2-3.1+ α -) 49 (-6.3-) 50 (-5.8-) 51 (-5.0?-) 52 (-4.7-) 53 (-6.8-) 54 (-7.5-18.4) 55 (-5.2-18.0) 56 (-5.4-) 57 (-5.0-) 58 (-6.4-) 59 (-7.7-) 60 (-5.1-) 61 (30.0-7.0+ α -) 62 (9.4-2.8-8.0) 64 (11.2-3.2+ α -) 65 (9.4-4.5-3.8) 66 (8.4-5.0-3.2) 67 (9.4-5.6-3.8) 68 (8.0-3.7+ α -) 69 (6.2-3.2+ α -) 70 (-2.0+ α -7.8) 71 (10.4-3.3-4.8) 72 (13.8-2.6+ α -) 73 (-2.3+ α -16.4) 74 (-1.5+ α -7.8) 76 (-3.7+ α -3.6) 77 (-5.0+ α -5.4) 78 (30.0-10.4-14.4) 79 (8.8-9.2-9.4) 80 (12.0-2.5-7.6) 81 (10.0-2.3-8.2) 82 (-1.8+ α -8.8) 83 (-2.5+ α -3.4) 84 (-3.5+ α -3.0) 85 (10.4-4.0+ α -) 86 (11.6-3.0+ α -) 87 (10.2-6.1-4.2) 88 (10.2-2.2-4.0) 90 (3.8-1.2) 92 (9.3-6.0-3.2) 93 (9.2-3.4-3.4) 94 (11.0-1.8-6.7) 95 (10.4-1.9+ α -) 96 (25.0-9.7-11.0) 98 (-9.2-) 102 (6.6-0.5-5.2)

7 第17次調査

1) 遺跡の位置 (Fig.49)

水城跡第17-1・2次調査位置は太宰府市大字吉松字松本196-1、197、139-1・2、139-140の地番で139は水城築堤部分(指定地内)にあたる。水城跡は、御笠川を挟んで国分側(東側)と吉松側(西側)に分断されているが、今回の調査地点は、御笠川から約300m西側の位置である。

調査対象面積は2400㎡。発掘面積は17-1次調査417.61㎡(保存面積107.06㎡)、17-2次調査377.615㎡、計795㎡。

調査期間は1990.8.6～1991.1.9。調査原因は共同住宅建設に伴う緊急調査、および緊急調査にひき続く重要遺跡確認調査である。

調査は山本信夫・城戸康利・緒方俊輔が担当し、他に大坪型子(国学院大学学生)が参加した。

2) 調査経過

この地については、1989年に建物建築申請に伴う試掘調査を行ない、その結果遺構が確認さ

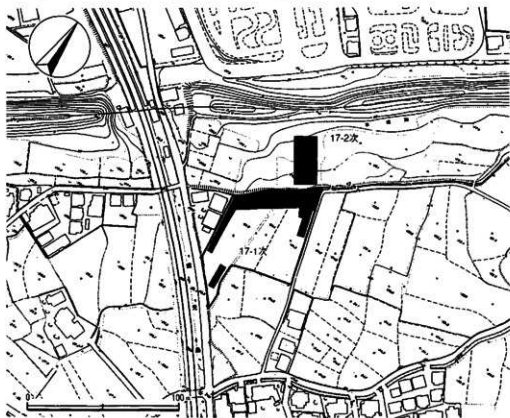


Fig. 49 第17次調査区位置図 (1/2500)

れたので本調査に到ったものである。試掘溝はFig.49に示すように水城築堤の基底部裾から内側（南側）に設定した。これは水城基底部の内側に対して、従来より内掘の存在の有無が論議されてきた点を考慮したものである。

遺構が検出されたのは基底部裾に接した南北幅10m程の部分で、黄褐色粘土あるいは茶灰色の堅い地盤上に溝、少数のピット、それに6m前後の広い整地状の凹みが掘り込まれている。この凹みは本調査の段階で木樋に伴う掘り込みである事が判明した。なお、これより南側は中世以降の深い堆積となっており、遺構は検出されなかった。

文化庁・県教育委員会と協議を行なった結果、本調査は開発部分（17-1次）に加えて木樋の北側延長部分（17-2次）についても行なうこととした。

3) 検出遺構 (Fig.50・51, Pla.19・20)

土層 (Fig.50)

17-1次は水城基底部より南側の水田であり、レベルは一段下がる。水城に近い部分は表土下20cmで地山面に達する。この地山は約10m南で切れ、これ以南は、上から表土以下1m程の堆積層、茶灰色粗砂層、砂と粘土が交互に堆積する無遺物層が堆積している。木樋取水口17SX001D付近においても同様な堆積を示すが、ここでは地山との境に水城よりも古期の溝17SD010を確認した。17SD010と表土直下の堆積層との間には暗灰色粘土が、その上は灰色砂が堆積する。これらは木樋南側に7～8世紀の間堆積した層である。この部分よりさらに南側については別に試掘を行なっているが、灰茶色系の砂層が連続している状況で遺構と捉えうるものはない。

地山面で検出された主要な遺構は、木樋取水口施設17SX001A、木樋抜き取り溝17SX001B、溝17SD010、17SD012、小ピットSX007・008・005、新期の小ピットである。その他17SX013は凹み状の堆積で、17SX001Bの最終埋没土と考えられる。下層をA、上層をBとする。17SD009はSX001Bを切る最新溝（現代）である。17SX001Aと17SD010は切り合いがなく直接重複関係を導くことはできないが、堆積状況などから17SX001Aが後出すると判断できる。

17SD010 古墳時代流路で7世紀前半代の須恵器、木製品を出土した。この流路は第14次調査14SD001に連なると考える。この上にはSX001木樋埋没時と推定される暗灰粘土の堆積土が認められる。

17SD012 水城本体に平行して掘られた東西溝で、やや純行して流れる。51m分検出した。その層は北側では明らかで、深く掘削された部分もあるが、南側層は明瞭ではなく、自然堆積を示すような状況である。溝は木樋17SX001Aの取水口とは直接切り合わないでその手前で止まり、東にも延長しないが、木樋の整地上に堆積している部分が認められる。埋没は遺物からみて8世紀中頃前後を下限とする。

17SX001 (木樋) (Fig.52～59, Pla.21～38)

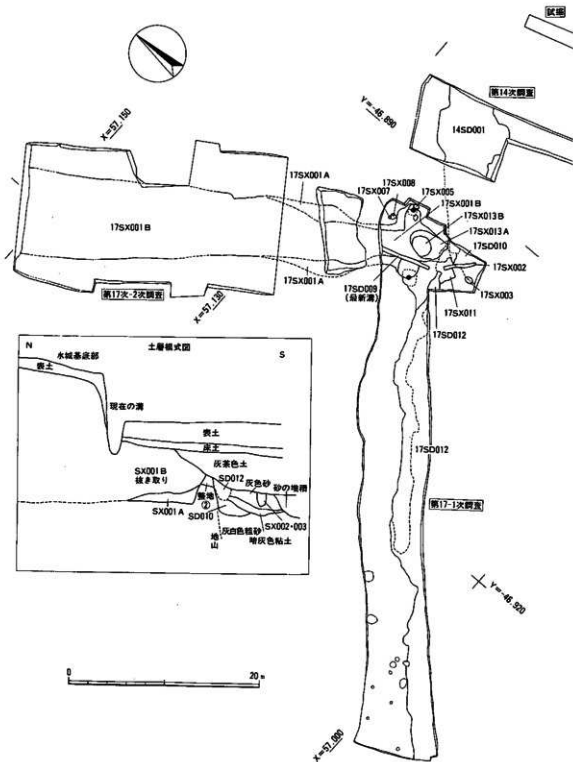


Fig. 50 第17次調査遺構配置概略図 (1/400)

検出状態

木樋本体の構造は過去に東門側で調査されたものを参考とする (Fig.60・61)。土塁を横断する縦樋は、取水口でこれと直交する横樋とT字形に組まれる。横樋の両端には立柱があり、この内側に接して小口板を立てる。縦樋の底板は横樋の下部を通過し南側に突き出る。今回検出した取水口は、地山に平面T字形で縦樋底部にあたる部分のみを一段低くした掘形17SX001Aを掘り、掘形内部に樋を設置した後、掘形上面全体をつき固めて整地している。その後木樋の部分だけに平面十字形の溝17SX001Bが掘られ、木樋は完全に抜きとられている。しかし横樋両端の立柱と樋の底部に敷かれた枕木は抜かれずに残存していた。木樋の底板、側板材の利用がその新期掘込みの目的であったらしい。

平面と土層の関係

17SX001Aは土層の色調、質から整地①と整地②に分けられる。この違いは木樋の設置に伴う前後の工程差を示すと考えられる。整地①・②はFig.52～56の図中に示す。

整地①は掘形底部一面に認められ、樋を設置する際に底板下や枕木を同時に埋め込んでいる土である。木樋固定に伴う最初の整地と考えられる。青灰色味の土層が主体である。

整地②は木樋を設置した後、掘形上面まで周辺全体を一様に突き固めた層である。黒茶褐色、黄褐色系の堅い粘土が主体である。範囲はFig.53の網をかけた部分であるが、中間部空白は木樋を抜き取った部分17SX001Bであり、もとはこの部分にも存在したと思われる。

木樋取水口周辺の土層細部 (Fig.52・53, Pla.29・31・32)

土層C1 木樋掘形整地②と17SD012、さらに南側土層の関係を示す。暗灰粘土②は地山上の薄い層で溜まり状の腐植質である。その上には灰色砂が堆積し、この上から切るピット17SX002・003がある。暗灰粘土②は以下に示す暗灰粘土①とは連続しない。

土層C2 C1と同様な状況を示す。地山を切って流れた17SD010があり、その最上層で完形の須恵器環が出土した。図示していないが、この上に部分的に堆積する暗灰粘土①は出土遺物より、8世紀中頃を下限とする。17SX001Bの新期掘込み土はこの上に乗る。

土層C3 C1の南延長にほぼ相当する。最下に地山を切って流れた17SD010がある。この層は第14次調査で検出された6・7世紀の溝14SD001に連続し、出土遺物より7世紀前半に位置づけられる。整地②と方形凹みはこの砂層より新しい。ここでは暗灰粘土①は整地②の上に堆積する。その後、南側端は氾濫状の砂層の堆積となる。

土層C4 (Fig.54) 柱穴aの南北断面、Fig.54-A3の右側部分にあたる。枕木は17SX001Aの整地①中、柱穴下部は整地①の前に埋められる。小ピット17SX005Aは17SX005Bの下層で検出されたピットで、柱上部の東側に接して掘り込まれる。ここからは13世紀前半の東播磨系須恵質土器鉢の破片が出土している。17SX005Bが17SX005Aと同一のピットとすれば、17SD001Bの年代下限

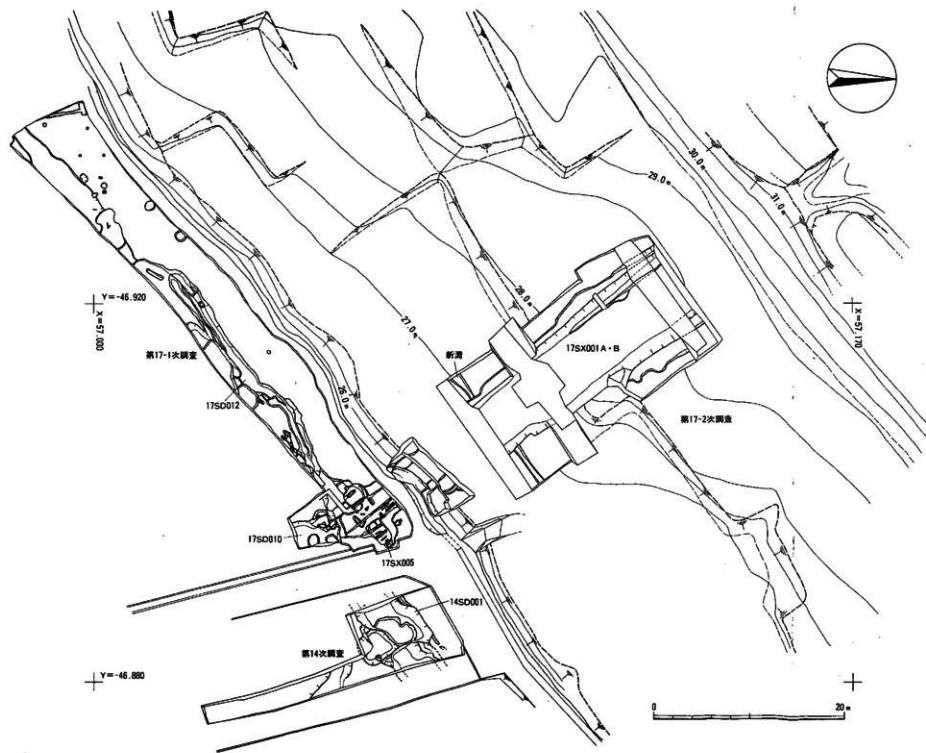


Fig. 51 第17次調査遺構配置図 (1/400)

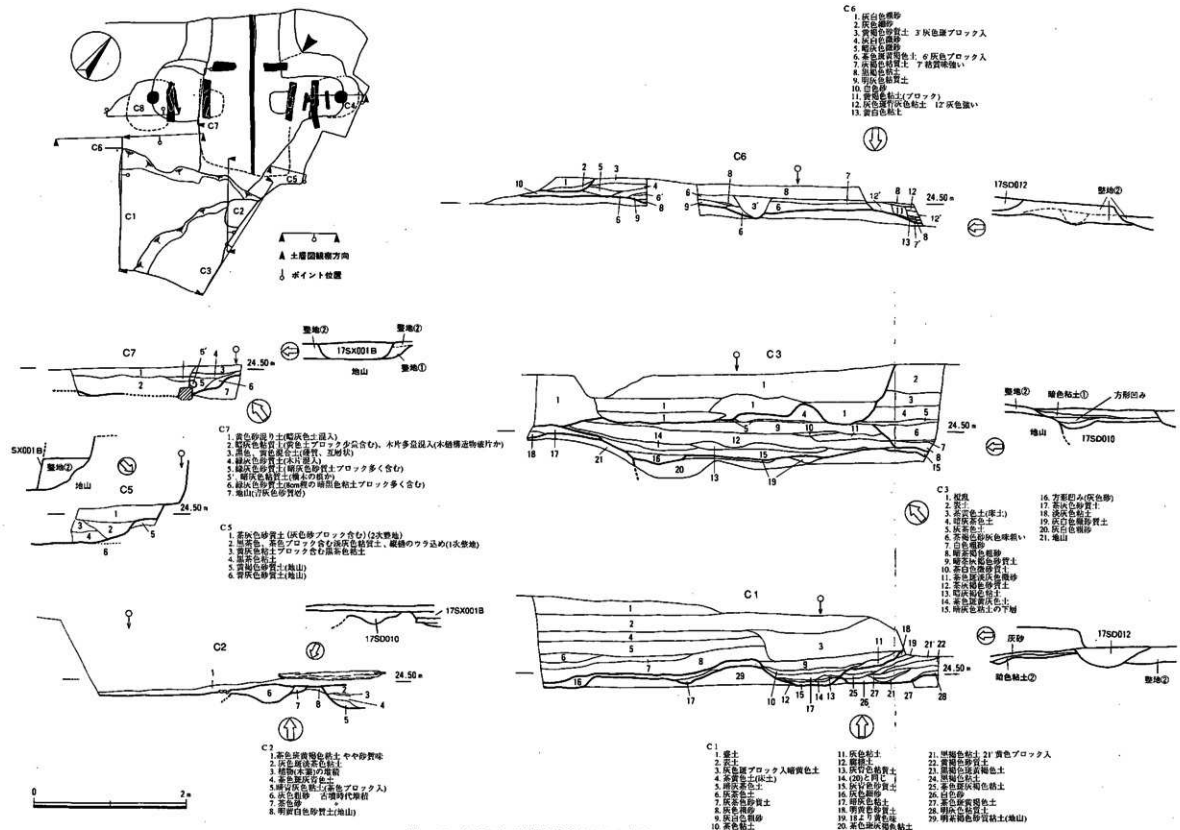


Fig. 52 木樋取水口周辺土層断面図 (1/50)

の一つの可能性は13世紀前半以前といえる。しかし17SX005Bを単に後世の堆積とするならば、17SX005Aと17SD001Bの前後関係は直接導きだせない事になる。

土層C5 木樋整地②の状況と地山、木樋抜き取り溝17SD001Bとの関係を示す。

土層C6 整地②、17SD012との関係図で、17SD012が整地②よりも後に堆積した事がわかる。図右側は整地②上面からの切り込み状の線があるが、これは整地層の境を示すものと思われる。ただし二次的に縦樋の修復・改造を行なったとみればこの限りではない。右下層は断面B6の堀形底部右の土質（茶色粘土）に近く、とくに木樋の周囲を固めた土と見られる。

土層C7 横樋の抜き取り17SX001Bと17SX001Aの関係を示す。左は整地②とみられる。

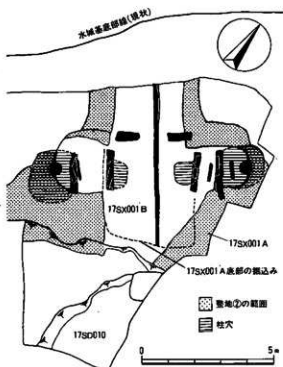


Fig. 53 木樋周辺整地状況図

土層C8 立柱と整地の関係を見たものであるが図は割愛した。この土層においても横樋設置後、周辺全体を整地②で固めた状況が示される。

土層C9 C6とC8間の土層で、図は割愛した。柱穴bを掘めた後、整地②で固める。

A縦樋に対する横断面 (Fig.54・55)

Fig.55には東門側木樋から復原した木樋構造図を示す。

断面A1 東側底面には切断、加工された木片が多数あるが、ここには原位置を示す可能性のあるものを記入した。掘形埋土最下層の整地①に密着あるいは入り込む。木樋底板下に敷かれたと思われるが、このような状況は、検出範囲内では一部に限られている。

断面A2 底部東西にそれぞれ枕木を敷く。枕木は一端が薄く加工され楔状をなす。掘形中央にこの薄い方を向け傾斜させる。枕木は整地①に入る。東側枕木長さ1.05m、幅0.3m、厚さ0.14m。西側枕木長さ0.92m、幅0.32m、厚さ0.18m。

断面A3 横樋中心軸線上の断面。柱穴a b c d、枕木、整地の作業工程が示される図である。柱穴c dの上部に枕木B5・B7と整地①が乗っていることがわかる。柱穴a bは枕木B2～8と整

地①を入れる直前には樋の掘形底面近くまで埋められており、柱穴埋土下半では柱穴内の左右の土層がほぼ一致する。柱穴 a b の柱の内側は横樋が組込まれるのでこの部分にはもともと整地はない。それぞれ外側の埋土上半は横樋設置と同時に埋められた整地である。縦樋掘形裏込め土と土質がやや異なる。これに関連して、平面において縦樋と横樋掘形の交差する北東隅外側掘形線の部分(▲印)では切り合い状を示す線があり(Pla.30)、もしこれが切り合いならば横樋は縦樋の後に埋められた事になる。柱穴 c d はFig.55-A3で見るように推定縦樋幅の両外側に接している。

断面A4 掘形底面にある東西方向の不整形の浅い凹みである。なんらかの下部構造、たとえば枕木をここに設置したなどが推定される。

底面B6からB7の間にはやはり短い木材が散在していて、これらも横樋の基礎にあたると思われるが、レベルはB1～B8の枕木よりも10cm程度低い。

B横樋に対する横断面 (Fig.56・57、Pla.34～37)

Fig.57には東門側木樋から復原した木樋構造図を示す。横樋底板レベルの調節には次の2通りの方法が見られる。(1)断面楔状を呈する小形枕木1本を使用し、片側から木樋中央に向かって打ち込む方法。(2)大型角材1本と断面楔状の薄い板2・3枚を組み合わせたもの。角材は水平に据え、その上の木樋底板との間に楔状板を噛ませて木樋の両側から中央に向かって打ち込む方法。

断面B1・B9 柱穴 a・b の南北断面。掘形面より上の整地②は柱穴の外側に連続し、柱とその周囲を一体的に整地している。柱穴下部→整地①→整地②の順に埋められた事がわかる。

断面B2・B4 (1)の方法に属する。B2枕木のみ採取した。

断面B3・B5・B7・B8 (2)の方法に属する。

断面B6 縦樋底板に敷く長い柱状の枕木で、断面は台形に面取り加工がされている。検出範囲では長さ6.6+mで、北側は水城基底部に潜っている。その北側調査区では検出されていないので、基底部の斜面近くで切れるのであろう (Fig.63土層2)。枕木の南端は縦樋掘形際面に接して設置されているが、東門側木樋例を参考にすると、枕木南端まで縦樋は連続せず、断面A4の掘形底面の凹みの位置(▲印)が縦樋の末端になる。凹みは枕木を設置した可能性が高い。枕木法量 $6.6 \times (0.14 \sim 0.22) \times 0.14m$ 。

寸法・規模・各部の計測 (Fig.59、Pla.31・32・35・38)

①立柱 a b 柱上部は腐植のためもとの径よりもやや小さくなっており、縦の柱腐植層が土層断面で認められる。柱はFig.58柱穴 a の例に示すように径0.5mの堂々としたもので、未知の上部構造は堅固なものである事を想定させる。柱下部の表面は丁寧な縦位方向の鈍加工痕を残す。

柱間心々距離7.15m (東門は6.67m)。立柱掘形は平面形隅丸方形。掘形規模、柱穴 a 軸長は東西1.7m×南北1.55m。柱穴 b 軸長は東西1.45m×南北2.0m。柱 b の下端近くには方孔が2つあ

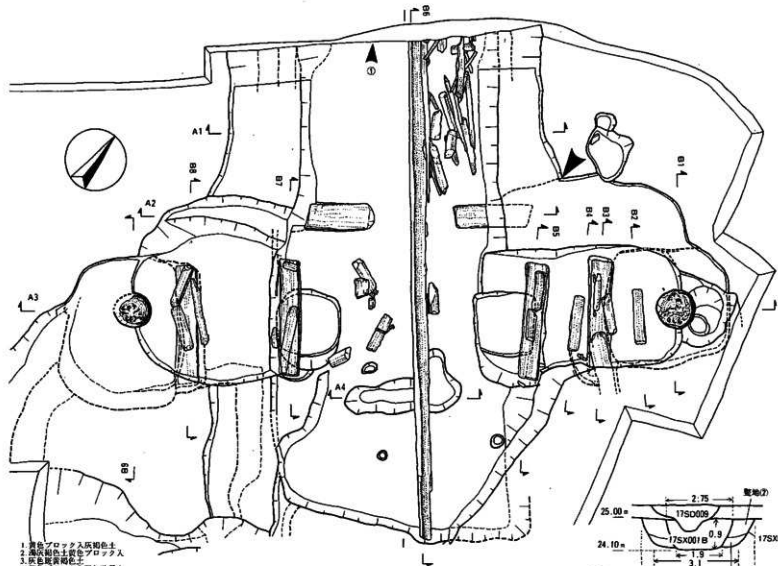
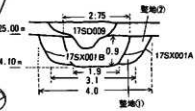
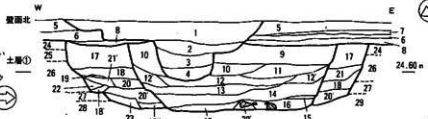


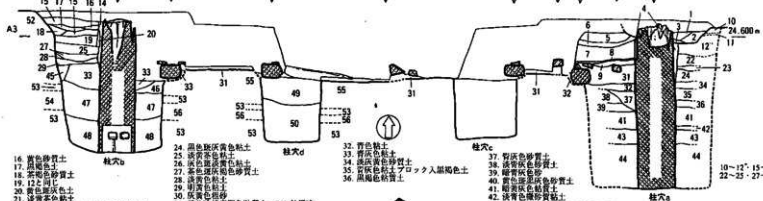
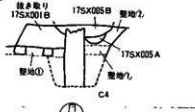
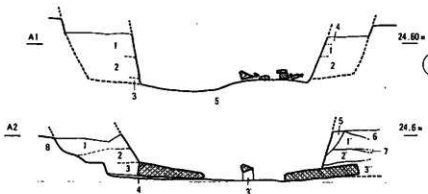
Fig. 54 木樋取水口遺構実測図(1) (縦断概略面) (1/50)

1. 黒色ブロッケン灰褐色土
2. 黒褐色土質赤色ブロッケン
3. 灰褐色砂質土
4. 赤色ブロッケン灰褐色砂質土
5. 黄土
6. 赤土(硬質砂)
7. 灰褐色赤砂質土
8. 赤褐色土
9. 赤褐色土
10. 赤褐色土
11. 赤褐色土より紫色ブロッケン多し
12. 赤褐色土より紫色ブロッケン多し
13. 赤褐色土より紫色ブロッケン多し
14. 赤褐色土より紫色ブロッケン多し
15. 赤褐色土
16. 赤褐色土
17. 赤褐色土
18. 赤褐色土
19. 赤褐色土
20. 赤褐色土
21. 赤褐色土
22. 赤褐色土
23. 赤褐色土
24. 赤褐色土
25. 赤褐色土
26. 赤褐色土
27. 赤褐色土
28. 赤褐色土
29. 赤褐色土



1. 黒褐色土
2. 黒褐色土
3. 赤褐色土
4. 赤褐色土
5. 赤褐色土
6. 赤褐色土
7. 赤褐色土
8. 赤褐色土
9. 赤褐色土
10. 赤褐色土
11. 赤褐色土
12. 赤褐色土
13. 赤褐色土
14. 赤褐色土
15. 赤褐色土
16. 赤褐色土
17. 赤褐色土
18. 赤褐色土
19. 赤褐色土
20. 赤褐色土
21. 赤褐色土
22. 赤褐色土
23. 赤褐色土
24. 赤褐色土
25. 赤褐色土
26. 赤褐色土
27. 赤褐色土
28. 赤褐色土
29. 赤褐色土

1. 黒褐色土
2. 黒褐色土
3. 赤褐色土
4. 赤褐色土
5. 赤褐色土
6. 赤褐色土
7. 赤褐色土
8. 赤褐色土
9. 赤褐色土
10. 赤褐色土
11. 赤褐色土
12. 赤褐色土
13. 赤褐色土
14. 赤褐色土
15. 赤褐色土
16. 赤褐色土
17. 赤褐色土
18. 赤褐色土
19. 赤褐色土
20. 赤褐色土
21. 赤褐色土
22. 赤褐色土
23. 赤褐色土
24. 赤褐色土
25. 赤褐色土
26. 赤褐色土
27. 赤褐色土
28. 赤褐色土
29. 赤褐色土



1. 黒褐色土
2. 黒褐色土
3. 赤褐色土
4. 赤褐色土
5. 赤褐色土
6. 赤褐色土
7. 赤褐色土
8. 赤褐色土
9. 赤褐色土
10. 赤褐色土
11. 赤褐色土
12. 赤褐色土
13. 赤褐色土
14. 赤褐色土
15. 赤褐色土
16. 赤褐色土
17. 赤褐色土
18. 赤褐色土
19. 赤褐色土
20. 赤褐色土
21. 赤褐色土
22. 赤褐色土
23. 赤褐色土
24. 赤褐色土
25. 赤褐色土
26. 赤褐色土
27. 赤褐色土
28. 赤褐色土
29. 赤褐色土
30. 赤褐色土
31. 赤褐色土
32. 赤褐色土
33. 赤褐色土
34. 赤褐色土
35. 赤褐色土
36. 赤褐色土
37. 赤褐色土
38. 赤褐色土
39. 赤褐色土
40. 赤褐色土
41. 赤褐色土
42. 赤褐色土
43. 赤褐色土
44. 赤褐色土

1. 黒褐色土
2. 黒褐色土
3. 赤褐色土
4. 赤褐色土
5. 赤褐色土
6. 赤褐色土
7. 赤褐色土
8. 赤褐色土
9. 赤褐色土
10. 赤褐色土
11. 赤褐色土
12. 赤褐色土
13. 赤褐色土
14. 赤褐色土
15. 赤褐色土
16. 赤褐色土
17. 赤褐色土
18. 赤褐色土
19. 赤褐色土
20. 赤褐色土
21. 赤褐色土
22. 赤褐色土
23. 赤褐色土
24. 赤褐色土
25. 赤褐色土
26. 赤褐色土
27. 赤褐色土
28. 赤褐色土
29. 赤褐色土
30. 赤褐色土
31. 赤褐色土
32. 赤褐色土
33. 赤褐色土
34. 赤褐色土
35. 赤褐色土
36. 赤褐色土
37. 赤褐色土
38. 赤褐色土
39. 赤褐色土
40. 赤褐色土
41. 赤褐色土
42. 赤褐色土
43. 赤褐色土
44. 赤褐色土

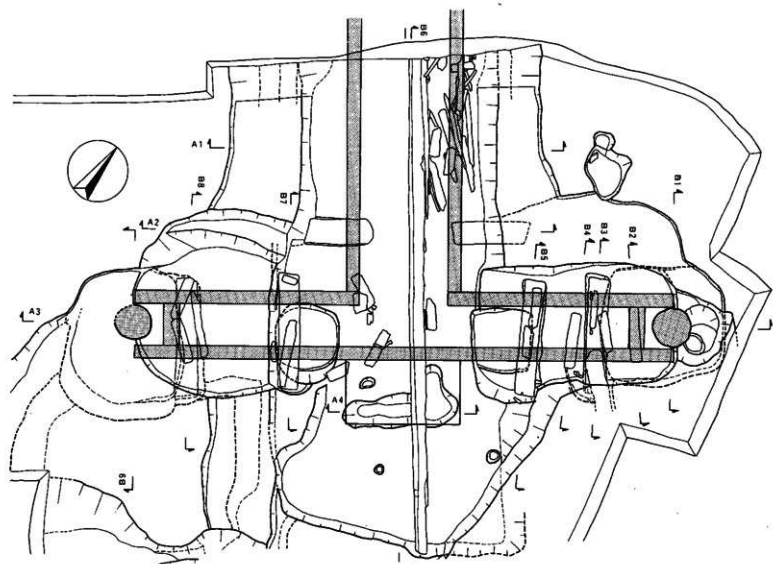
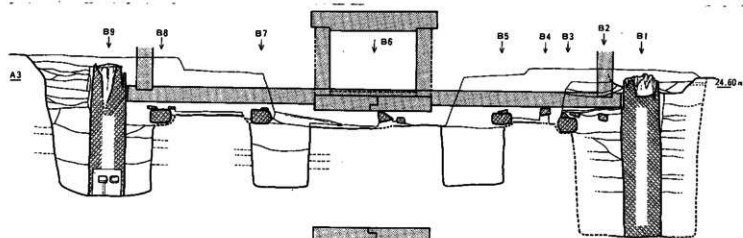
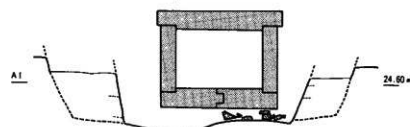
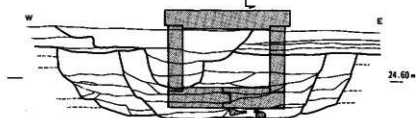


Fig. 55 木造取水口復原図(1) (1/50)



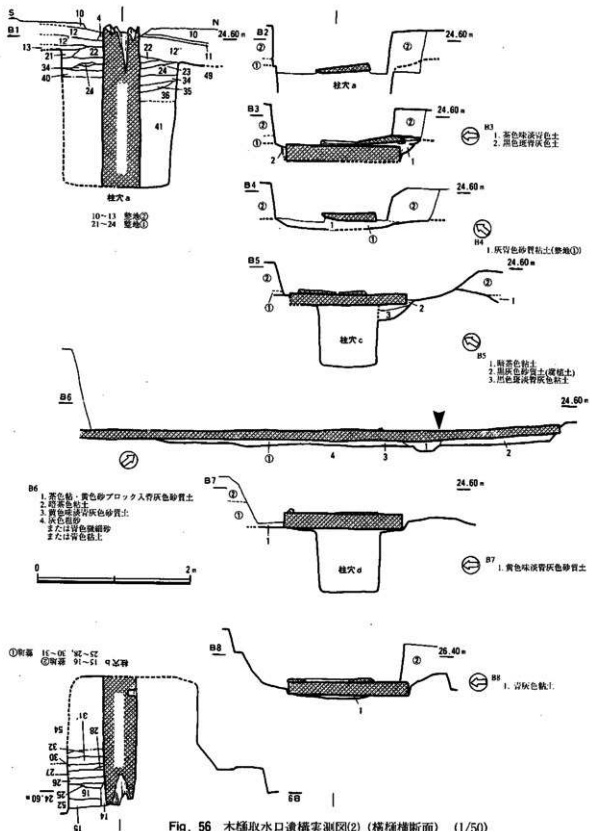


Fig. 56 木樋取水口遺構実測図(2) (横横断面) (1/50)

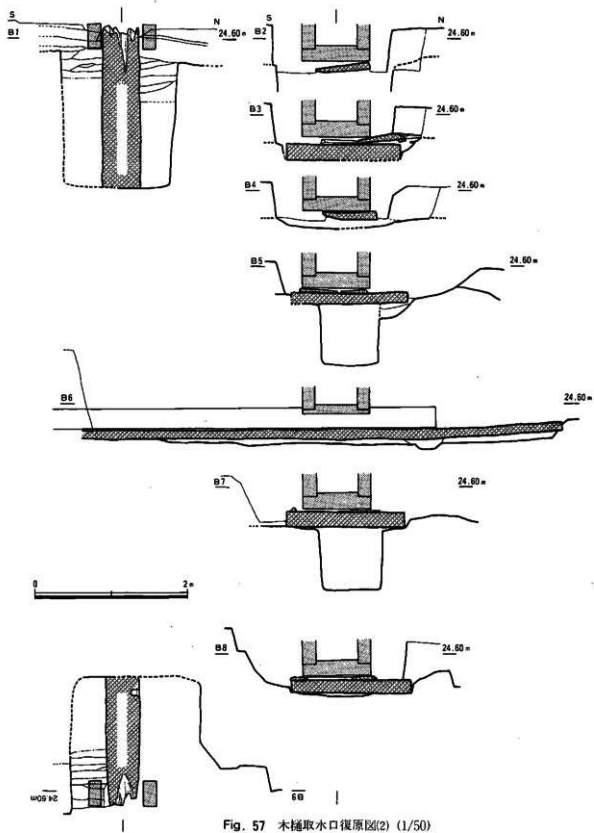


Fig. 57 木樋取水口復原図(2) (1/50)



Fig. 58 柱穴 a・立柱の状況

り、なかでつながっている。これは後穴ともいわれ、運搬・移動のため開けられたものである。

②立柱間の2本の柱穴 c d これには柱根はない。掘形は平面形隅丸方形。柱穴 a b の掘形よりもやや浅い。掘形規模、柱穴 c 軸長は東西0.85m×南北0.85m。柱穴 d 軸長は東西0.8m×南北0.9m。この2本の間の木樋掘形底面は幅3.5mにわたって周囲の底面よりさらに0.15m低くなっている。この幅は縦樋掘形の底面幅を示すと思われる。Fig.54土層①、Fig.63土層②、Fig.64土層③ A・⑨Cの数値もこれにほぼ近い。

③東門側木樋(Fig.60・61) 数次の調査が行なわれ保存良好な木樋が確認されている。Fig.60にはこの寸法を記入した。土層層は取水口から10m程北寄りの第5次調査のものである。この土層のうち掘形線の問題点が以下に対比されるので注意しておきたい。

④第17次調査木樋(Fig.55・57・62) 今回の木樋の欠落を補うためにFig.60をもとにして復原した。第17次では立柱間が東門側木樋よりも若干長いので、横樋の底板、側板はやや長く取っている。Fig.62は第17次の木樋の基礎部分を含めた構造概念図である。

築堤基底部の土層

17-2次では水城築堤下部の縦樋延長部に樋の残存の期待をかけ、発掘を行なうこととした。その範囲は基底部の南側(内側)斜面から土塁本体部分の手前まで約35mの長さである。調査の結果、築堤部にまで抜き取り跡17SX001Bは及んでいて、完全に樋は取り去られていることが判明した。築堤部では17SX001Bの上面幅は北側で最大11.2m、上面からの深さは5.5mに達する。ここでは遺構崩壊をさけるため全体を中位程まで下げ、さらにこの面で3箇所にもトレンチを入れて17SX001底面を出すことにした。ここでは樋掘形底部の枕木も残っていない。木樋の抜き取りには相当の手間がかかっていると見られ、なんらかの組織的な意図をもって掘りだしたと思われる。

このことは我々調査者の意表をつく結果となったが、土層の観察により、取水口部分では確認できなかった事実が、以下のように数点判明した。

①版築(積土)層は大きく3つに分けられる。それぞれを版築I・II・IIIとすると、下から版築

I→II→IIIの順に積まれている。版築I・IIIは水平な堆積であるが、版築IIは縦櫓の周囲を埋めた土で整地①②を含む。版築Iの上面から櫓の中心部へ向かって斜めに積まれている。

②版築下の当時の地山は一定の土層ではなく、軟弱な砂地や堅い粘土の部分がある。また積土は本体に置かれる位置により性質、色調が異なる場合があり注意される。

各土層断面(Fig.54・63～67, Pla.22～29)

厚い版築のある本体側(北側)から順に説明を加える。なお複雑な土層に対する理解を助けるためここでも略図を補足し、木樋掘形、版築積土I・IIIの厚さなどの数値を記入した。()は復原値を示す。各図断面の位置についてはFig.63参照。

③C(Fig.64) 版築Iの下は旧表土があり、その下の地山は灰色砂層となる。版築Iの下部は腐植質、砂層、青灰色味の暗い色をした軟弱な層が主体である。版築IIの下端線はだらだらと下り、下半の旧表土・地山に達した位置(▲印)から下は直に近い傾斜面となる。この図の壁は新規抜き取りのものであるが、木樋掘形が残存している土層3A・2においても同様であった。この屈折点は築堤方法を考える際重要である。版築IIIの各層は版築I・IIの層に較べて1層の幅が厚く、下部より粗い積み方である点も注意を要する。図の右下版築Iと抜き取りの境には抜き取りによる不規則な堆積がみられる。17SX001Bは上下でやや土質が異なる。中位(土層18)以下は木葉などの入る腐植土である。下端の幅は2.5mで掘形もほぼこれに近い数値と思われる。Fig.66・67、③A・Bは同一トレンチ内の各面の土層である。

③A(Fig.64) この土層は③Cとは反対方向から見た図である。基本的には③Cと似た状況であるが、ここでは木樋裏込め土が残存している。地山を見ると東側は粗砂、西側は粘土である。版築IIには③Cで認めたような暗く軟弱な層はない。版築II下部は黄色・黒茶色の粘土で強固に固められる。Fig.66・67、③B・Cは同一トレンチ内の各面の土層である。

⑤C(Fig.65) 上記した③A・③Cの間のトレンチ土層である。⑤Cはトレンチ内の西側土層図で上記と同様の堆積である。版築IIIを切るかのような線が図中に示されるがこれは局部的な積土

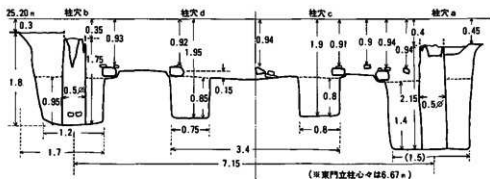


Fig. 59 横樋計測図 (単位:m)

- | | | | |
|-----------------|---------------|---------------------|-----------------|
| 1. 灰土 | 12. 白色セパイラン土 | 21. 炭酸カルシウム(灰土を混ぜる) | 34. 緑灰色粘土 |
| 2. 赤褐色土 | 13. 黄色粘質砂土 | 24. 心土 | 35. 赤褐色土 |
| 3. 白色セパイラン土 | 14. 灰土 | 25. セパイラン土(灰土)が混入 | 36. 灰土 |
| 4. 赤褐色粘質土(炭化物混) | 15. 灰土 | 26. 赤褐色粘質土 | 37. 赤褐色土 |
| 5. 赤褐色粘土 | 16. 灰土 | 27. 赤褐色粘質土 | 38. 赤褐色粘土 |
| 6. 白色セパイラン土 | 17. 灰土 | 28. 赤褐色粘質土(炭化物混) | 39. 赤褐色粘土 |
| 7. 赤褐色土 | 18. 灰土 | 29. 赤褐色粘質土(炭化物混) | 40. 赤褐色粘土 |
| 8. 赤褐色粘質土 | 19. 灰土 | 30. 赤褐色粘質土 | 41. 赤褐色粘土と黄色粘土混 |
| 9. 赤褐色粘質土(炭化物混) | 20. 灰土 | 31. 赤褐色粘土 | 42. 赤褐色粘土 |
| 10. 赤褐色粘土(炭化物混) | 21. 赤褐色粘土 | 32. 赤褐色粘土 | 43. 赤褐色粘土 |
| 11. ⑬に類似 | 22. 赤褐色セパイラン土 | 33. 赤褐色粘土 | 44. 白色セパイラン土 |

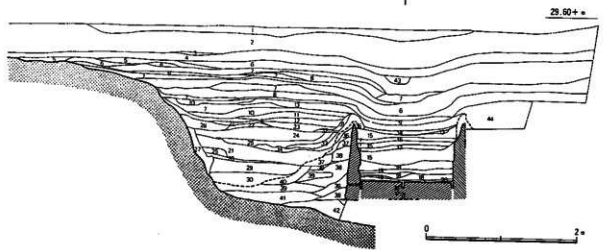
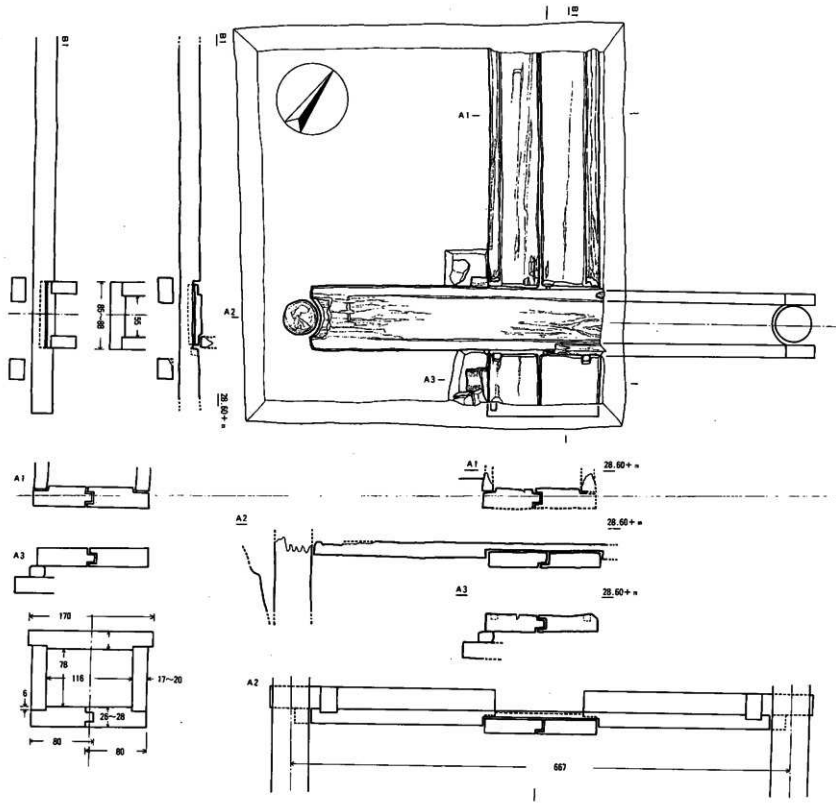


Fig. 60 東門木造取水口詳細図 (1/50) (単位:cm) (原図:大塚S.氏より転載・加筆)



の相違である。版築IIは、西側では③Cと似た暗く粗い積土であるが東側は橙色を主とするきれいな積土となる。Fig.65・67、⑤A・Bは同一トレンチ内の各面の土層である。

⑦A・C(Fig.65) ⑤と⑨の間に入れた小トレンチ内の各面土層である。

②(Fig.63) 基底部内側の斜面の土層である。ここでは確実な版築IIIは見られない。橋の掘形

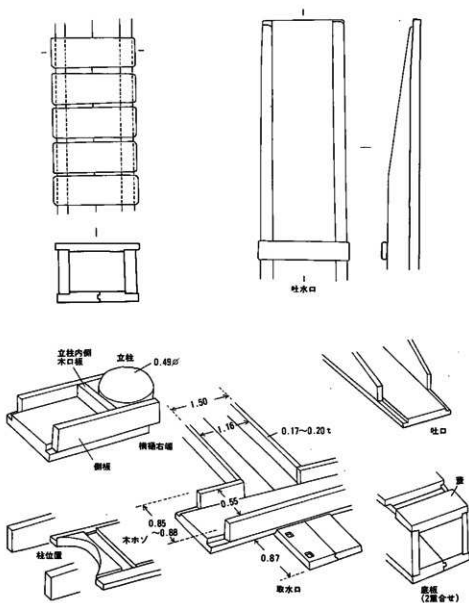


Fig.61 木橋構造図解 (単位m) (関連文献8頁25より転載・加部)

底部幅がここでは判かる(3.5m)。

①(Fig.54) 17-1次の発掘区北側土層図である。ここは上記した水城基底より一段低いので、地山以下の樋掘形が判かる程度である。掘形底部幅は3.1mである。抜き取り溝の下層は木材片や木葉が多い。

以上の樋横断面(水城と平行断面)

に対して、樋の縦断

方向(水城の横断面)の部分土層をFig.67の③B・⑤B・⑦B・⑨Bに示す。

木樋縦断線の勾配(Fig.68)

①東門側木樋(Fig.68) 昭和5年(1930)の調査による成果では取水口から北(外側)へ63mまで勾配1/394、そこからさらに北側の吐水口までの16.5mは急勾配で1/14と報告された。ところが第5・8次調査の結果では別の数値が報告されている。取水口(8次)と5次の最北端の縦樋底板の間で勾配は1/278であるとされる。

②17次木樋 木樋が残存していないので、縦樋中央下の長い枕木上面(Fig.56-B6)と木樋掘形底部レベルから推定する。枕木は、北端と横樋中軸上を測点とした。その結果、勾配は1/43となる。いっぽう木樋掘形底部では、勾配は1/46と枕木部分に近似する。このことから1/40~1/50前後の数値を17次木樋の縦断勾配として採用して良いと考える。

木樋と版築工程の復原(Fig.69)

土層の堆積状況から2通りの版築工程が復原できる。

①縦樋設置のための溝を掘ると同時に樋設置以外の部分に版築Iを行なう。このとき樋の部分は大きく空いた状態である。樋の設置後、版築IIで樋の部分を版築Iの上面まで埋めてしまう。最後に版築IIIでこの上面を覆う。

②全体に版築Iを積む。この版築Iの上面から樋の設置部分に掘込みを行なう。次に樋を設置し

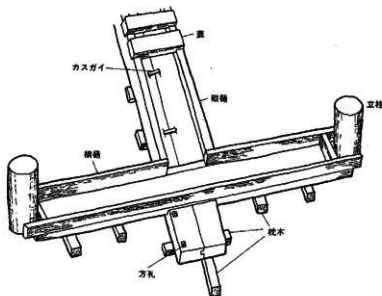
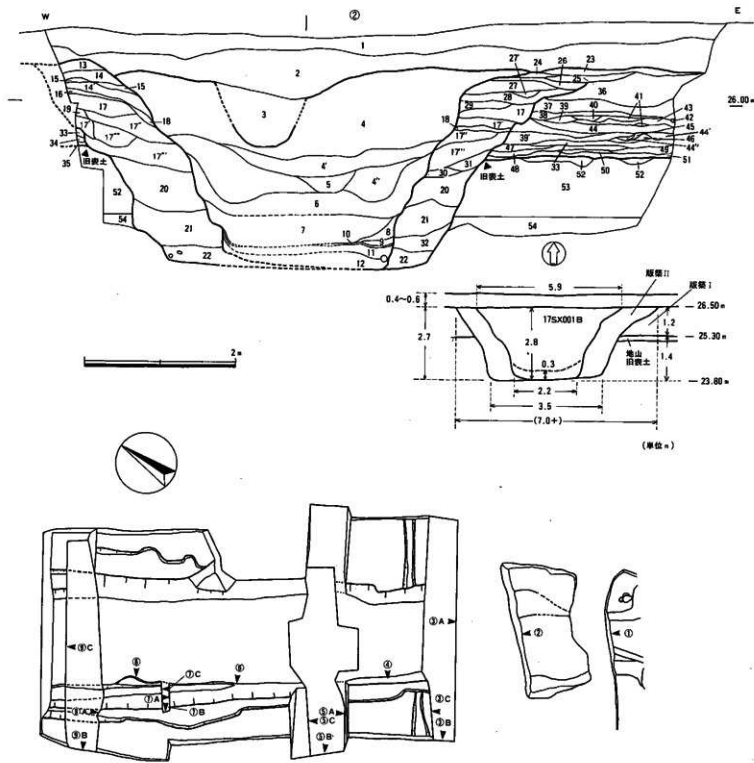


Fig. 62 第17次調査木樋取水部復原見取図



1. 黄土
2. 茶色泥質黄土
3. 茶色泥質黄土
4. 黄土・黄褐色泥質黄土(硬め厚し状の土)
5. 黄土(粘り強い)・黄褐色ブロック多い
6. 茶色砂質黄土
7. 黄褐色砂質土(黄褐色ブロック多い)
8. 黄土砂
9. 砂質砂
10. 黄土(地下水の影響)
11. 黄土(砂質)
12. 黄土(粘り強い)
13. 黄土(粘り強い)
14. 黄土(粘り強い) 14' 粘り強い
15. 黄土(粘り強い)
16. 黄土(粘り強い)
17. 黄土・茶色泥質黄土 17' 茶色砂ブロック入
- 17' 17.2より黄土ブロック入 17'' 17.2より明かしく粘質
18. 黄土(粘り強い)
19. 黄土(粘り強い)
20. 黄土(粘り強い)
21. 黄土(粘り強い)
22. 黄土(粘り強い)
23. 黄土(粘り強い)
24. 黄土(粘り強い)
25. 黄土(粘り強い)
26. 黄土(粘り強い)
27. 黄土(粘り強い)
28. 黄土(粘り強い)
29. 黄土(粘り強い)
30. 黄土(粘り強い)
31. 黄土(粘り強い)
32. 黄土(粘り強い)
33. 黄土(粘り強い)
34. 黄土(粘り強い)
35. 黄土(粘り強い)
36. 黄土(粘り強い)
37. 黄土(粘り強い)
38. 黄土(粘り強い)
39. 黄土(粘り強い)
40. 黄土(粘り強い)
41. 黄土(粘り強い)
42. 黄土(粘り強い)
43. 黄土(粘り強い)
44. 黄土(粘り強い)
45. 黄土(粘り強い)
46. 黄土(粘り強い)
47. 黄土(粘り強い)
48. 黄土(粘り強い)
49. 黄土(粘り強い)
50. 黄土(粘り強い)
51. 黄土(粘り強い)
52. 黄土(粘り強い)
53. 黄土(粘り強い)
54. 黄土(粘り強い)

Fig. 63 土層土層断面図(1) (1/50)

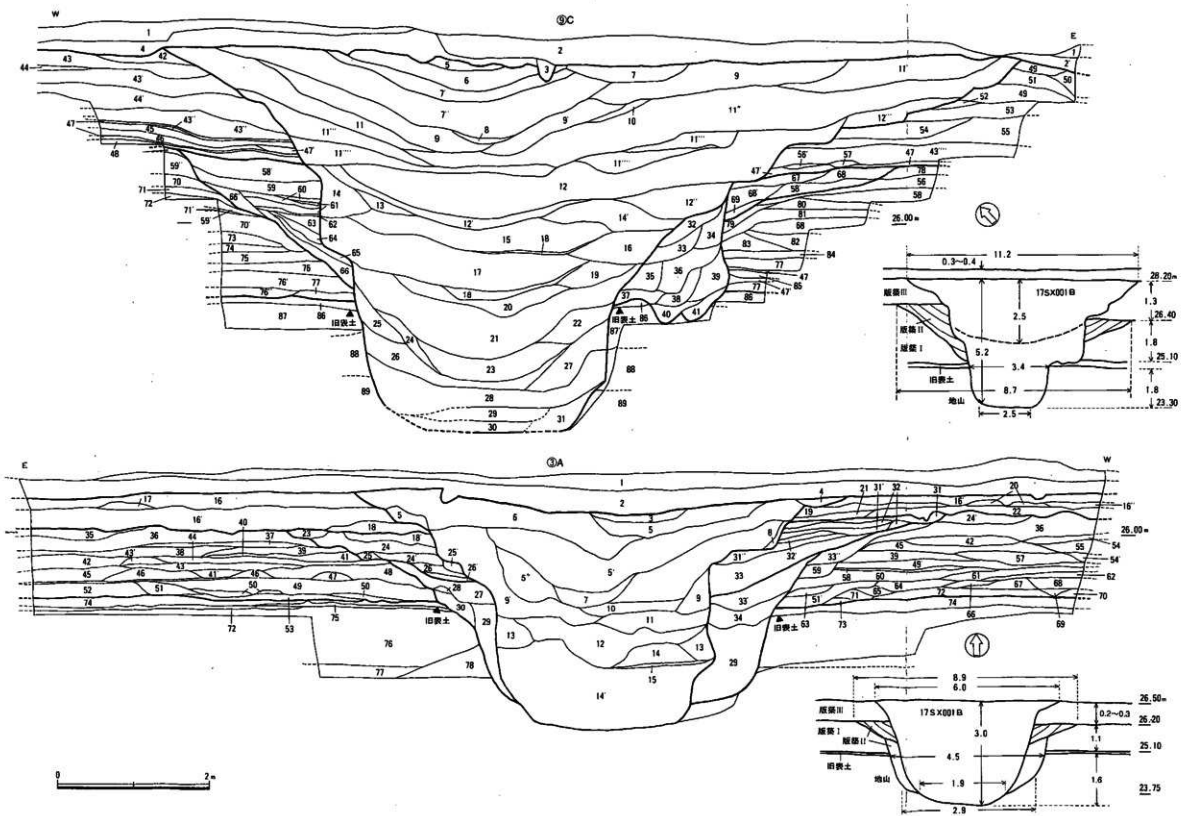


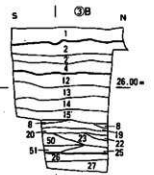
Fig. 64 土層土層断面图(2) (1/50)

①C

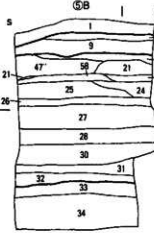
- 1 黄土
- 2 灰黄色粘土(黄褐色ブロック入) (硬質)
- 3 灰黄色粘土(黄褐色粘土) (硬質)
- 4 灰黄色粘土
- 5 灰黄色粘土
- 6 灰黄色粘土
- 7 灰黄色粘土
- 8 灰黄色粘土
- 9 灰黄色粘土
- 10 灰黄色粘土
- 11 灰黄色粘土
- 12 灰黄色粘土
- 13 灰黄色粘土
- 14 灰黄色粘土
- 15 灰黄色粘土
- 16 灰黄色粘土
- 17 灰黄色粘土
- 18 灰黄色粘土
- 19 灰黄色粘土
- 20 灰黄色粘土
- 21 灰黄色粘土
- 22 灰黄色粘土
- 23 灰黄色粘土
- 24 灰黄色粘土
- 25 灰黄色粘土
- 26 灰黄色粘土
- 27 灰黄色粘土
- 28 灰黄色粘土
- 29 灰黄色粘土
- 30 灰黄色粘土
- 31 灰黄色粘土
- 32 灰黄色粘土
- 33 灰黄色粘土
- 34 灰黄色粘土
- 35 灰黄色粘土
- 36 灰黄色粘土
- 37 灰黄色粘土
- 38 灰黄色粘土
- 39 灰黄色粘土
- 40 灰黄色粘土
- 41 灰黄色粘土
- 42 灰黄色粘土
- 43 灰黄色粘土
- 44 灰黄色粘土
- 45 灰黄色粘土
- 46 灰黄色粘土
- 47 灰黄色粘土
- 48 灰黄色粘土
- 49 灰黄色粘土
- 50 灰黄色粘土
- 51 灰黄色粘土
- 52 灰黄色粘土
- 53 灰黄色粘土
- 54 灰黄色粘土
- 55 灰黄色粘土
- 56 灰黄色粘土
- 57 灰黄色粘土
- 58 灰黄色粘土
- 59 灰黄色粘土
- 60 灰黄色粘土
- 61 灰黄色粘土
- 62 灰黄色粘土
- 63 灰黄色粘土
- 64 灰黄色粘土
- 65 灰黄色粘土
- 66 灰黄色粘土
- 67 灰黄色粘土
- 68 灰黄色粘土
- 69 灰黄色粘土
- 70 灰黄色粘土
- 71 灰黄色粘土
- 72 灰黄色粘土
- 73 灰黄色粘土
- 74 灰黄色粘土
- 75 灰黄色粘土
- 76 灰黄色粘土
- 77 灰黄色粘土
- 78 灰黄色粘土
- 79 灰黄色粘土
- 80 灰黄色粘土

①A

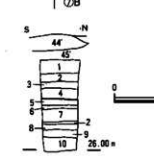
- 1 黄土
- 2 灰黄色粘土
- 3 灰黄色粘土
- 4 灰黄色粘土
- 5 灰黄色粘土
- 6 灰黄色粘土
- 7 灰黄色粘土
- 8 灰黄色粘土
- 9 灰黄色粘土
- 10 灰黄色粘土
- 11 灰黄色粘土
- 12 灰黄色粘土
- 13 灰黄色粘土
- 14 灰黄色粘土
- 15 灰黄色粘土
- 16 灰黄色粘土
- 17 灰黄色粘土
- 18 灰黄色粘土
- 19 灰黄色粘土
- 20 灰黄色粘土
- 21 灰黄色粘土
- 22 灰黄色粘土
- 23 灰黄色粘土
- 24 灰黄色粘土
- 25 灰黄色粘土
- 26 灰黄色粘土
- 27 灰黄色粘土
- 28 灰黄色粘土
- 29 灰黄色粘土
- 30 灰黄色粘土
- 31 灰黄色粘土
- 32 灰黄色粘土
- 33 灰黄色粘土
- 34 灰黄色粘土
- 35 灰黄色粘土
- 36 灰黄色粘土
- 37 灰黄色粘土
- 38 灰黄色粘土
- 39 灰黄色粘土
- 40 灰黄色粘土
- 41 灰黄色粘土
- 42 灰黄色粘土
- 43 灰黄色粘土
- 44 灰黄色粘土
- 45 灰黄色粘土
- 46 灰黄色粘土
- 47 灰黄色粘土
- 48 灰黄色粘土
- 49 灰黄色粘土
- 50 灰黄色粘土
- 51 灰黄色粘土
- 52 灰黄色粘土
- 53 灰黄色粘土
- 54 灰黄色粘土
- 55 灰黄色粘土
- 56 灰黄色粘土
- 57 灰黄色粘土
- 58 灰黄色粘土
- 59 灰黄色粘土
- 60 灰黄色粘土
- 61 灰黄色粘土
- 62 灰黄色粘土
- 63 灰黄色粘土
- 64 灰黄色粘土
- 65 灰黄色粘土
- 66 灰黄色粘土
- 67 灰黄色粘土
- 68 灰黄色粘土
- 69 灰黄色粘土
- 70 灰黄色粘土
- 71 灰黄色粘土
- 72 灰黄色粘土
- 73 灰黄色粘土
- 74 灰黄色粘土
- 75 灰黄色粘土
- 76 灰黄色粘土
- 77 灰黄色粘土
- 78 灰黄色粘土
- 79 灰黄色粘土
- 80 灰黄色粘土



①B 黄褐色粘土ブロック入層黄色粘土
11. 黄褐色粘土
12. 黄褐色粘土
13. 黄褐色粘土
14. 黄褐色粘土
15. 黄褐色粘土
16. 黄褐色粘土
17. 黄褐色粘土
18. 黄褐色粘土
19. 黄褐色粘土
20. 黄褐色粘土
21. 黄褐色粘土
22. 黄褐色粘土
23. 黄褐色粘土
24. 黄褐色粘土
25. 黄褐色粘土
26. 黄褐色粘土
27. 黄褐色粘土
28. 黄褐色粘土
29. 黄褐色粘土



①B 47. 黄褐色粘土(黄褐色粘土ブロック入)
48. 黄褐色粘土
49. 黄褐色粘土
50. 黄褐色粘土
51. 黄褐色粘土
52. 黄褐色粘土
53. 黄褐色粘土
54. 黄褐色粘土
55. 黄褐色粘土
56. 黄褐色粘土
57. 黄褐色粘土
58. 黄褐色粘土
59. 黄褐色粘土
60. 黄褐色粘土
61. 黄褐色粘土
62. 黄褐色粘土
63. 黄褐色粘土
64. 黄褐色粘土
65. 黄褐色粘土
66. 黄褐色粘土
67. 黄褐色粘土
68. 黄褐色粘土
69. 黄褐色粘土
70. 黄褐色粘土
71. 黄褐色粘土
72. 黄褐色粘土
73. 黄褐色粘土
74. 黄褐色粘土
75. 黄褐色粘土
76. 黄褐色粘土
77. 黄褐色粘土
78. 黄褐色粘土
79. 黄褐色粘土
80. 黄褐色粘土



①B 44. 黄褐色粘土ブロック入灰白色砂
45. 黄褐色粘土
46. 黄褐色粘土
47. 黄褐色粘土
48. 黄褐色粘土
49. 黄褐色粘土
50. 黄褐色粘土
51. 黄褐色粘土

Fig. 67 土層土層断面図(5) (1/50)

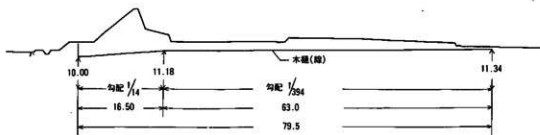


Fig. 68 水城木樋縦断面 (東門側) (岡道文献 8 頁 25 より転載・加減, 単位m)

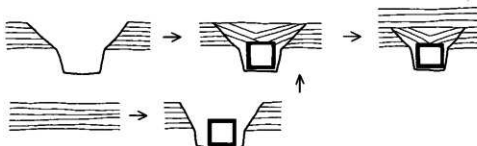


Fig. 69 第17次調査水城積土・木樋工程図

て樋の掘形内を版築IIで埋める。その後版築IIIでこの上面を覆う。

これらの他、別の観点からの解釈もできるが、それについては後述する。

4) 出土遺物

土器(Fig.70、別表1・2)

土器分類、型式編年については下記文献を参照。

「大宰府桑坊跡I」1982、「宮ノ本遺跡II」1992

17SX001B出土土器(Fig.70、別表1・2)

樋抜き取りの最下層出土である。1は須恵器坏cで体部下位の角は面取りして丸味をもつ。角高台。底径9.4cm、II~III型式。2は須恵器中甕aで単純口縁。7世紀代の可能性もある。

暗灰色粘土層出土土器

須恵器坏c(3)は1と同様な特徴を有する。II~III型式。

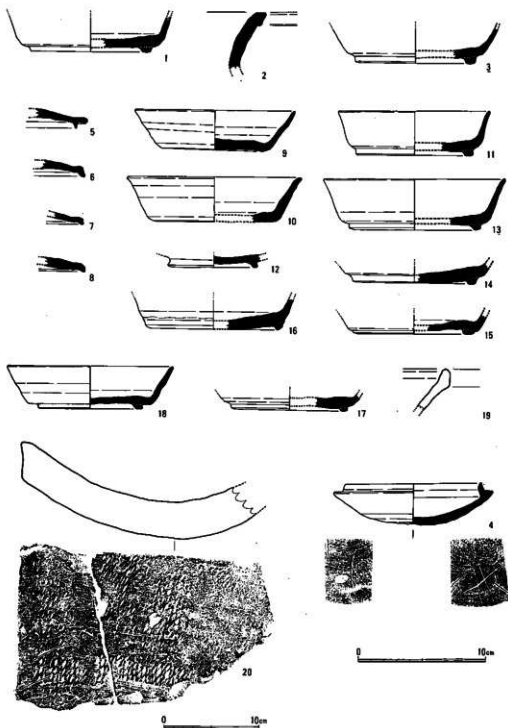


Fig. 70 第17次調査出土遺物実測図 (1/3・1/4)

17SD010出土土器 (Fig.70, Pla.58, 別表1・2)

須恵器坏(4)は小形で蓋受けの立ち上がりは低い。外面にヘラ記号がある。外径12.6口径(立ち上がり径) 10.8・器高3.2cm。宮ノ本の①②段階であるが小形化している点では後出的で、7世紀前半～中頃に考える。飛鳥I～IIに対応する。

17SD012出土土器 (Fig.70, Pla.58～59, 別表1・2)

5～16は須恵器である。蓋(5～8)はいずれもつまみの有無は不明。5は口縁形1で④段階～I型式、7世紀後半を下限とする。6は口縁形2でI～II型式。7・8は口縁形3でII・III型式。8は下がる可能性もある。中坏・坏a(9・10)の体部は立ちぎみでII型式前後。中坏・坏c(11～16)は1・3と近い特徴を持ちII・III型式。

17SD012凹み出土土器 (Fig.70, 別表1・2)

17SD012の西側で溝底に検出した凹み中の遺物である。凹みは17SD012溝に伴うと思われる。須恵器坏c(17)はII・III型式である。

17SX005A出土土器

須恵質土器鉢(19)は東播磨系で口縁小片。13世紀前半に位置する。

床土出土土器 (Fig.70, Pla.59, 別表1・2)

須恵器中坏c(18)は下位の角が鋭い。III型式。

その他17SX013Bの直上の床土から龍泉窯系青磁碗I5-bの小片が出土している。

瓦類(Fig.70, 別表1)

20は17SD012出土の平瓦で凸面には縄目叩きがある。

木製品

17SX001A出土枕木 (Fig.71, Pla.59)

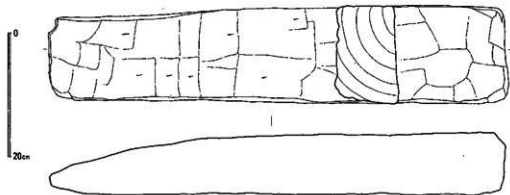


Fig. 71 17SX001A 出土枕木実測図 (1/6)

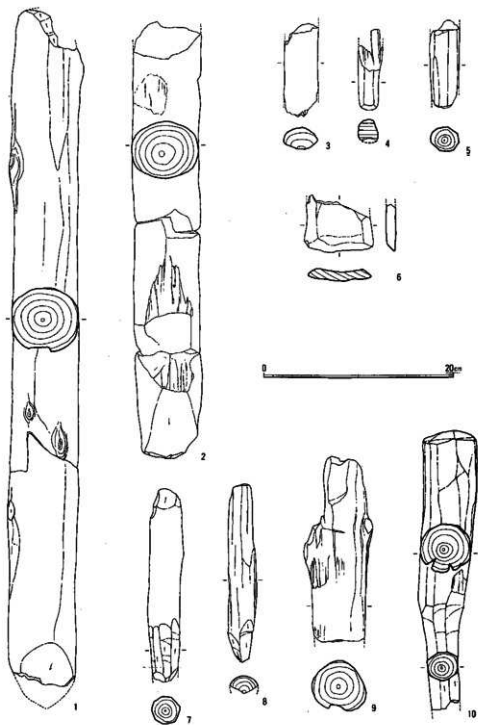


Fig. 72 17SX001出土木製品実測図 (1/4)

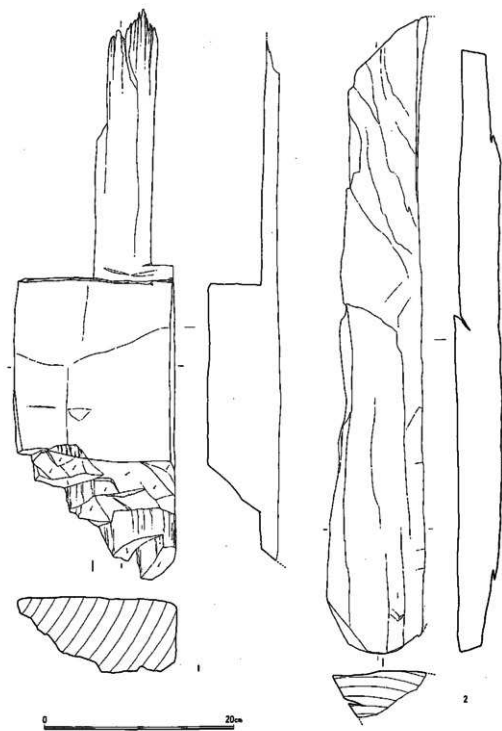


Fig. 73 17SX001出土木材片实例图(1) (1/4)

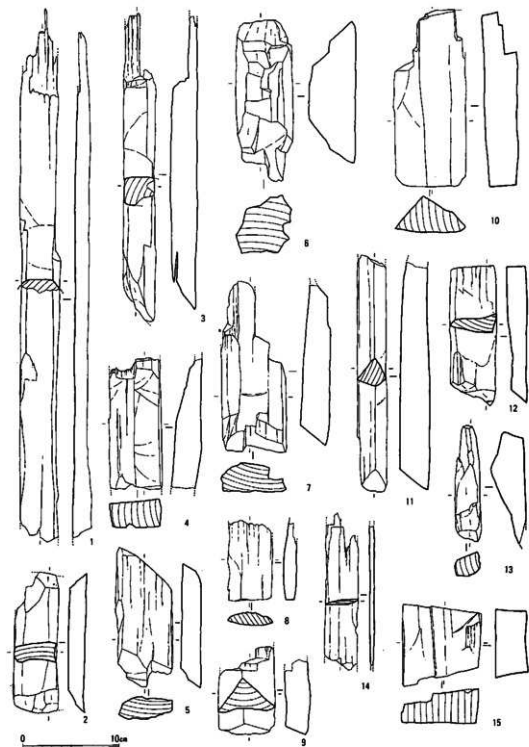


Fig. 74 17SX001出土木材片实测图(2) (1/4)

Fig.71は横樋下部に敷かれた枕木(Fig.56-B2)である。枕木のうち取り上げたのはこの1本ののみで、他はそのまま埋め戻している。角材の一端を薄くして楔状にする。長さ72.9cm、幅15.5cm、厚さ最大10.0cm。

17SX001A出土木製品(Fig.72~74、別表3)

Fig72~74は17SX001A・Bから出土した木片で、加工痕がある。これらは木樋掘形下部に埋め込まれた可能性がある。

17SX010出土木製品(Fig.75、Pl.60)

1は中央部を山形にし方孔を穿った台状の製品で、この方孔に別の部材が組み合う。2~4は加工木片。

17SX001A柱穴b出土木製品(Fig.75、別表3)

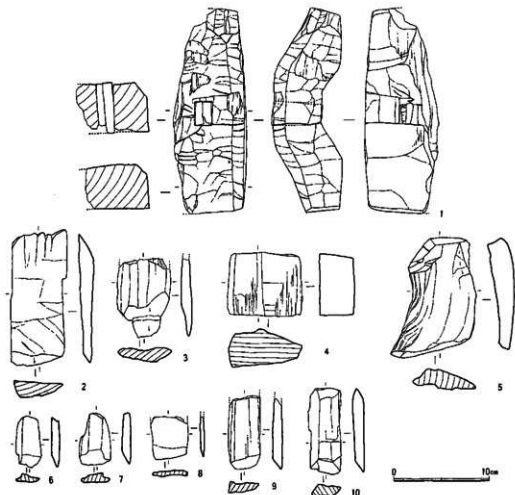


Fig. 75 17SX010・SX001柱穴出土木製品・木材片実測図 (1/4)

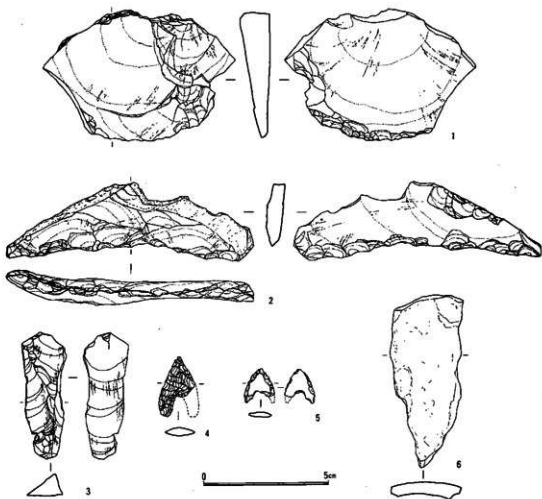


Fig. 76 第17次調査出土石器・鉄製品実測図 (2/3)

5～10は木盛柱穴bの埋土から出土した削り屑である。木盛の設置作業に伴う木材加工が現地で行なわれた可能性を示す。

石製品・鉄製品(Fig.76、Pla.59、別表1)

水城以前の縄文時代に属する石器で、水城周辺に古期の遺跡が存在した事を示す資料である。1・2は二次加工を持つ安山岩の剥片で、2はパティナが著るしい。1は17SX001B、2は17SD012出土。3は刃こぼれが見られる黒曜石の縦長剥片で鉞種型に類する。17SD012出土。4は黒曜石製の楕形鋸。17SD010出土。5は安山岩製の剥片鋸。17SD012出土。6は横断面にカーブを持つ鉄片。表土出土。

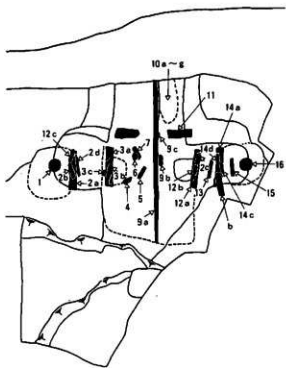


Fig. 77 樹種同定サンプル採取部位位置図

8 第18次調査

1) はじめに

調査地は太宰府市大字国分字衣掛185に所在し、住宅建設の切り土整地にともなって調査をおこなった。調査期間は1990年9月17日～10月5日で調査は緒方俊輔が担当した。調査面積は84㎡である。

2) 層位

調査区は16次調査と同じ敷地内にあり、今調査区のほうが山際に近くレベルも多少高い位置にある。土層の状況は上から、現代の遺物を含む黒灰色土の切り込み（カクラン）が所々にあり、近世後期から近代にかけての遺物を多量に含む包含層が堆積し、その下位に後述する整地層（灰色粘土層）を切り込む遺構群がある。この面では大半が江戸時代末期から明治時代前半期に形成された遺構がほとんどであった。遺構の乗る基盤層は四王寺山から派生した花崗岩風化土層であるが、調査区の南東側には古代に形成されたとと思われる整地層（灰色粘土層）が存在する。

3) 遺構 (Fig.78・79、Pla.39)

溝状遺構

18SD008

18SX001（石列）の形成以前にあった幅1.4m深さ0.6m程の溝状遺構で、西側は18SX001を残

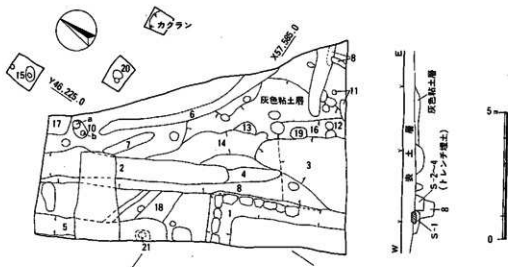


Fig. 78 第18次調査 遺構略測図

したため一部は完掘していない。

明治前半期をわずかに含み江戸時代後半期を主体とする遺物が出土した。

18SD006、007、014、018

調査区の南東から北西に流れる溝群で、江戸時代後半期を主体とする遺物が出土した。

その他の遺構

18SX001

調査区の南西隅にある矩形の石列で、蔵の基礎と思われる。18SD008埋没後に形成された。

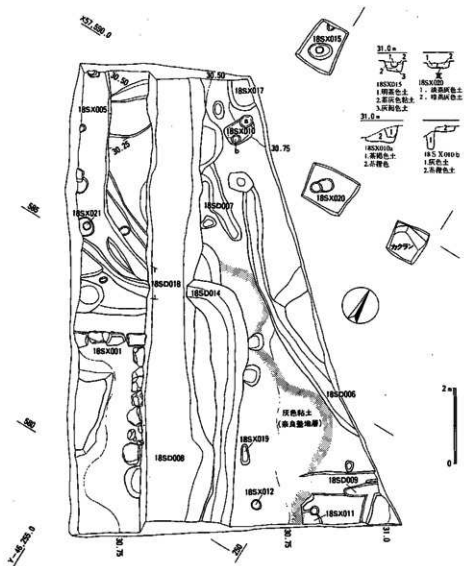


Fig. 79 第18次調査 遺構平面図 (1/100)

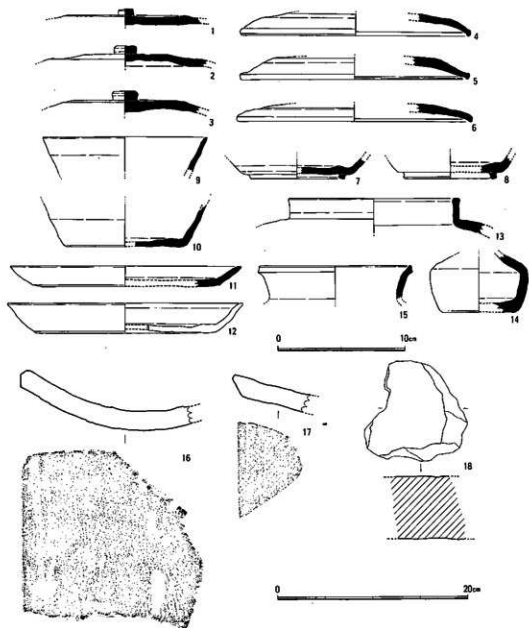


Fig. 80 第18次調査出土遺物実測図(1) (1/3・1/4)

灰色粘土層（整地層）

調査区南東側に広がる厚さ約5～10cmの土層で、調査者は整地層と認識している。

遺物は8世紀中頃以降の奈良時代のものが出土している。

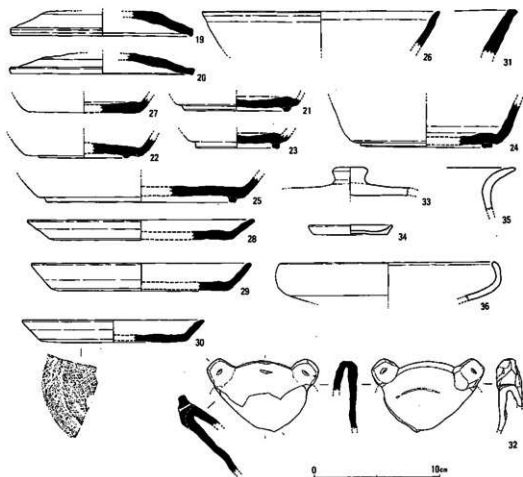


Fig. 81 第18次調査出土遺物実測図(2) (1/3)

その他、多くのピットや土坑状の遺構が検出されたが、調査区が狭小のため多くを語りえない。これらの内、18SX015、18SX020は古代の所産と思われる。

4) 遺物 (Fig.80~88、Pla.60~66、別表1・2)

第18次調査の遺物の大半は表土から多量に出土した江戸後半から明治前半期にかけて使用された、肥前系の染付磁器・国産陶器、ヒチリンなどの土師・瓦質土器、素焼き人形、瓦などであるが、今回はすべてを掲載していない。ここでは遺構から出土した遺物を中心にし、表土出土の遺物については機会を改めて報告する。

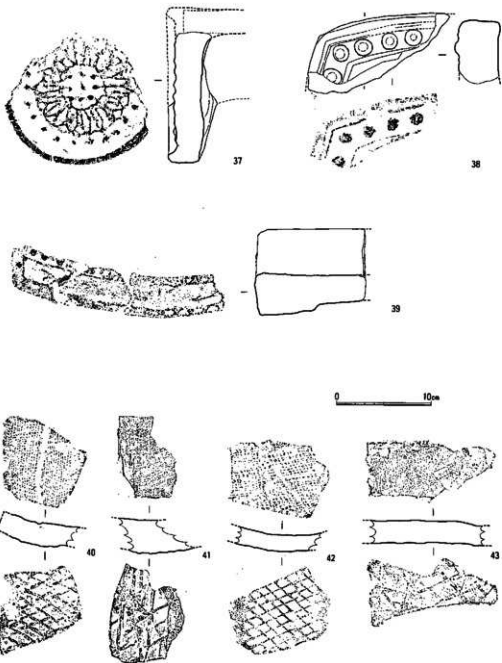


Fig. 82 第18次調査出土遺物実測図(3) (1/4)

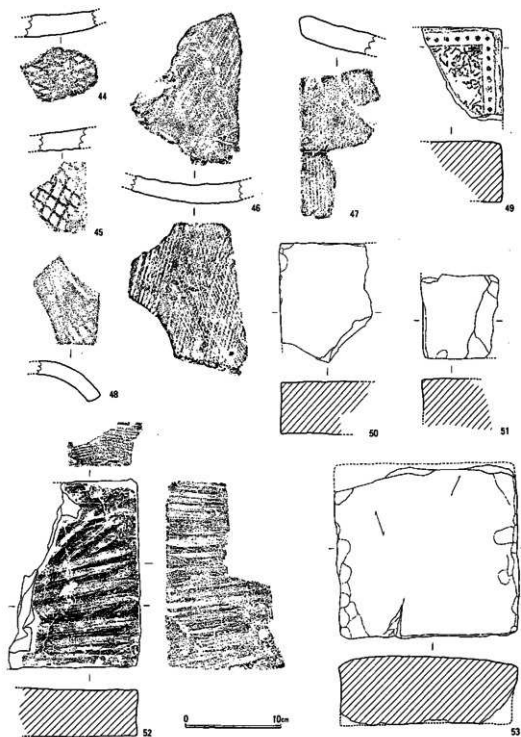


Fig. 83 第18次調査出土遺物実測図(4) (1/4)

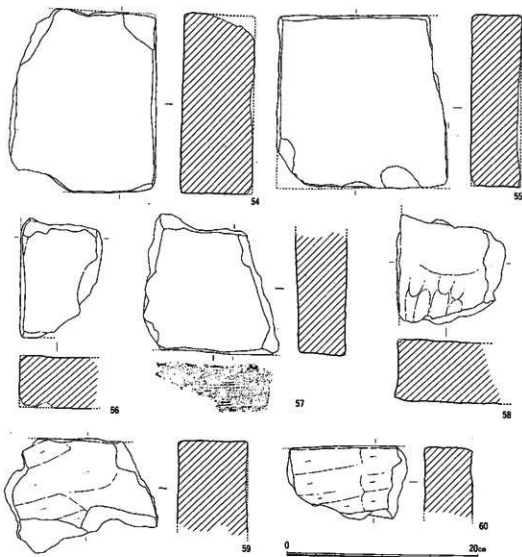


Fig. 84 第18次調査出土遺物実測図(5) (1/4)

須恵器

1~6、19・20は坏蓋c、7・8・21~25は坏c。蓋の天上部はヘラ切り後明瞭なナデは施されない。蓋のつまみはボタン状。19は内銅を硯として転用している。9・10・26は坏a。11・12・28~30は皿。12は赤焼き。11の内面には墨痕がある。13と31は短頸壺。14は小壺。15は小甕。

瓦

38は鬼瓦の周縁部分。法量的に御笠川出土のもの(本書VI参照)と合致する。やや肉薄。37は

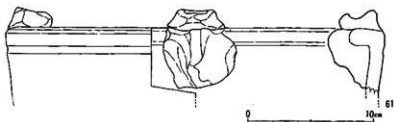


Fig. 85 第18次調査出土遺物実測図(6) (1/3)

内区に1+8の珠文を持つ軒丸瓦。顛例は大宰府史跡第26次調査(政庁跡)第一整地層に見られる。

は外区に鋸齒文、珠文を持つ軒平瓦。16・17・40~47は平瓦でタタキ目に格子と縄目がある。48は丸瓦。

磚

49は方形の文様磚。白色でやや軟質。18・50~60は厚さ4.7~7.7cmの無文磚。硬い須恵質と瓦質の軟らかいものがある。表面に粗いナデが残る。ハケ状工具の痕跡(57)も見られる。53は17.5×18.7cmに復元できるが、厚さは各々でかなりばらつきが見られ、規格性については今後問題となろう。

染付磁器(肥前系)

62~64・87・93は蓋付椀の身と蓋。文様構成から62と64はセットと思われる。64と87は口縁端部が外反する。65~68・83~86・92・95は丸椀。68は須恵焼窯表採資料に類品がある。65はコンニャク版。86・95は印版手。70~75・80~82・88・94は皿。70~72は口縁が波状を呈する。73は方皿。94は印版手。76は徳利。

陶器

77は褐釉の燈火具。78は鉢で緑灰色の釉がかかる。79は急須で緑釉がかかる。91は黄釉の行平か。89は褐釉の行平の類の壺。96は軟質で赤~褐色を呈す摺り鉢。97は褐釉の甕。

土師質土器

61は乳黄灰色を呈すヒナリン。

縄文土器

98は内外面に横方向の条痕を残す粗製の深鉢。胴部上位にくびれを持つ特徴のものは、長崎県際石原遺跡の縄文晩期中葉の資料中に類品が見られる。

弥生土器

99、100は菱形土器で中期中葉以降の所産。101は壺と甕の複合土器の壺部の下位部分。外面に赤色顔料が塗られる。

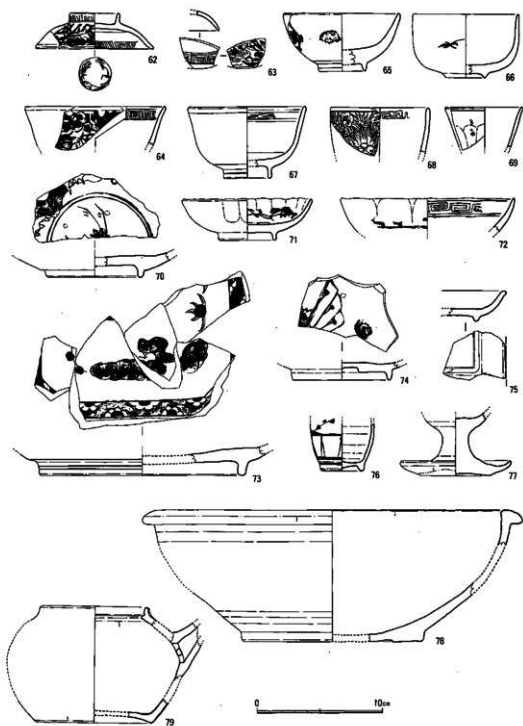


Fig. 86 第18次調査出土遺物実測図(7) (1/3)

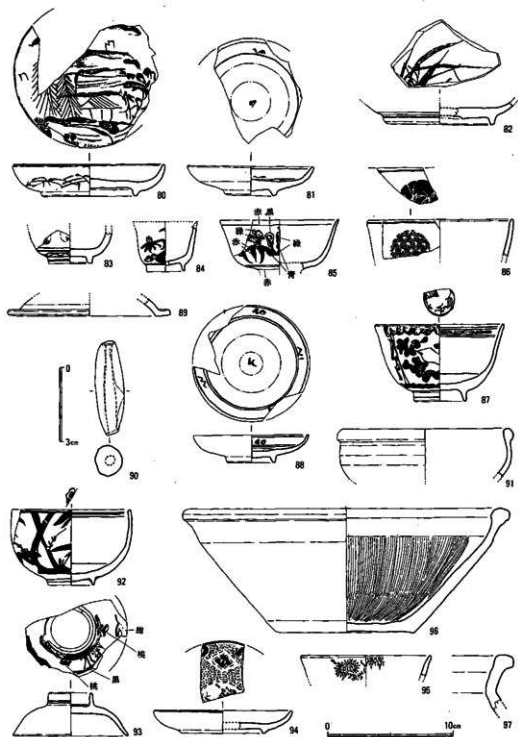


Fig. 87 第18次調査出土遺物実測図(8) (1/3・2/3)

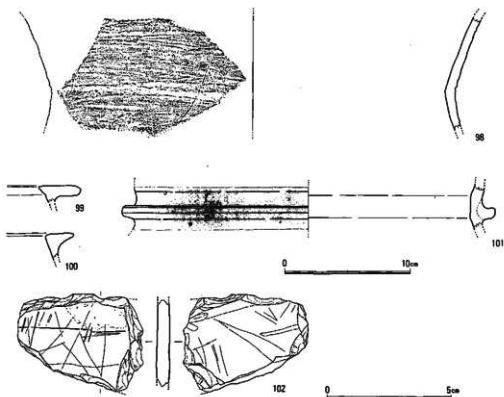


Fig. 88 第18次調査出土遺物実測図(9) (1/3・2/3)

石器

102は頁状の泥岩を用いた手持ち用の砥石。

第18次調査遺物出土地点、法量一覧

出土一覧

1～18は灰色粘土層。19～31-33-35-36は表土層。32は18SX016。34は18SD008。37～43は表土層。44は18SX003。45は18SD006。47は18SX010a。49-50-52は18SX016。51-53は18SD018。46は18SX020。54～60は表土層。61は18SD009。62～79は18SD008。80～86は18SX001。87,88は18SD006。91は18SD007。90-92-96は18SD014。93～95-97-98-99は18SX016。100は18SD005。101-102は表土層。

法量一覧(単位cm)

4 (18.2-1.7+ α) 5 (18.2-1.8+ α) 6 (18.6-1.4+ α) 7 (-1.6+ α -7.5) 8 (-1.9+ α -7.4) 9 (13.0-2.9+ α) 10 (-3.3+ α -9.7) 11 (18.2-1.6-14.8) 12 (18.6-2.3-17.6) 13 (13.3-2.3+ α) 14 (-4.6+ α -6.2) 15 (12.0-2.6) 18 (-6.7+ α) 19 (14.4-2.0-9.8) 20 (14.6-1.7-) 21 (-1.2+ α -6.6) 22 (-2.2+ α -6.9) 23 (-1.1+ α -8.4) 24 (-3.6+ α -10.4) 25 (-2.2+ α -15.5) 26 (18.8-2.9+ α)

(続きは54ページ)

9 第19次調査 (Fig.89・90, Pla.40)

調査地は大字吉松字衣掛193-4に所在し、住宅建設にともなうて1991年11月13日に調査をおこなった。調査面積は14㎡である。調査は山本信夫と山村信榮が担当した。

調査区は西門跡の東約200mで、水城土塁と道を挟んで南隣接地にあたる。調査は敷地の中央北寄りに幅約2m、長さ約3mのトレンチを設定した。

土層の堆積状況は北側に地表下1.6m（標高25.7mにあたる）で粘質の黄灰色土（Fig.90の11層）

が検出された。この層は第23次調査でも検出されたもので、この周辺に分布する水城築造以前の安定地盤であり、調査区中ほど南に落ちている。その黄灰色土の落ちぎわに黄色の粗砂と粘質土の斜堆積がある。斜堆積の先は青灰色粗砂層（8・11層）が堆積しており、河川の氾濫によって形成されたものと判断される。これらより上位の層（2～5層）は水平に堆積しており耕作に係わる層と思われる。後世の花崗岩風化土の盛り土整地後にグライ化して青味を帯びている。遺物は出土していない。

この調査で水城土塁テラス南前面の地盤の状況が観察されるとともに、水城の築成のはじまりが本調査区と第23次調査区との間にあることが考えられた。

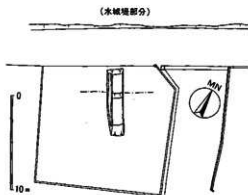


Fig. 89 第19次調査 平面図 (1/400・磁北)

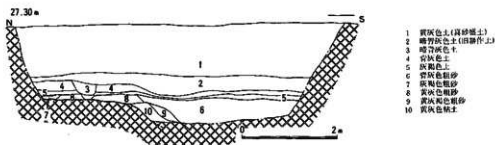


Fig. 90 第19次調査東壁土層断面図 (1/80)

10 第21次調査 (Fig.91~93, Pla.41・42、別表1・2)

1) はじめに

調査地は大宇吉松宇星ヶ浦470において、住宅建設の事前審査にもなっておこなった調査である。調査は1992年5月28日である。調査は緒方俊輔と山村信榮が担当した。調査地は水域推定西門跡の切り通し南から約10m西に位置し、テラス部の延長がある可能性が考えられた。

2) 遺構の概要

調査は南北の幅0.8m、長さ11mほどの試掘坑を設定し、東壁土層の観察をおこなった。観察の結果、北側の約4mに厚さ60cmほどの黄色粘土のブロックが堆積する人為的層 (Fig.92砂目網部分) が確認されたため、その層の上面レベルで西に調査区を拡張した。拡張した調査区では前述のブロックを含む層が安定的に広がっていることが確認された。またこの検出面上で大小のピット群が検出され、ピット群からは平安時代の土器、瓦等が出土した。このことから前述の層は平安時代以前に構築された積土層と認識され、土壘南側のテラスが推定西門以西にも

広がることを示した。前述のブロック層の上位の茶褐色土層は出土する土器から平安時代に形成された堆積層 (土壘の崩壊土の堆積) かと思われる (Fig.92斜線部分)。

遺物 (Fig.93、Pla.66)

掲載した遺物はすべてピットから出土した。

須恵器

1は坏aの底部。

5は坏蓋cのつま

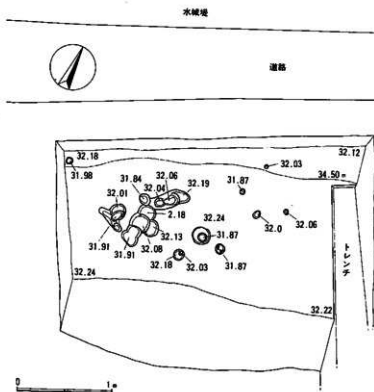


Fig. 91 第21次調査区平面実測図 (1/40)

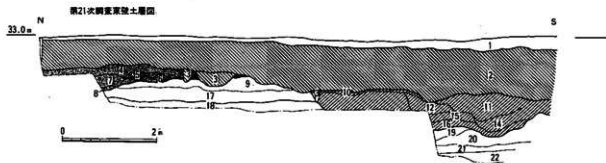
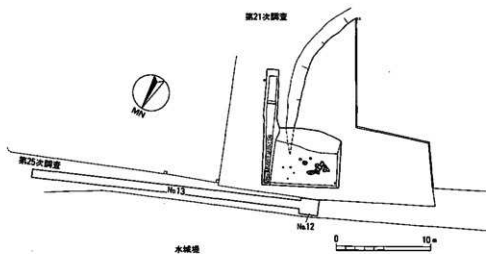


Fig. 92 第21次調査区東壁土層断面図 (1/80・1/400・路北)



- 1 暗褐色土(現在の舗土)
- 2 赤褐色土(平安朝代遺物を含む)
- 3 赤褐色土(2層下面よりの張り込み)
- 4 乳黄色粘土アロップ
- 5 暗赤色粘土
- 6 乳黄色粘土
- 7 明赤土
- 8 乳黄色粘土
- 9 明赤褐色粘土(積み土の可能性あり)
- 10 明赤色粘土
- 11 淡赤色土
- 12 暗赤褐色土
- 13 淡赤褐色土(灰入)
- 14 黄褐色土
- 15 赤褐色土
- 16 明赤色土
- 17 暗赤褐色土(積み土の可能性あり)
- 18 赤褐色砂状土
- 19 淡灰色粗砂
- 20 暗灰色粗砂
- 21 黄褐色粗砂
- 22 淡赤褐色粘土(硬質)

(鑑定水城壁土層)

(水成堆積層)

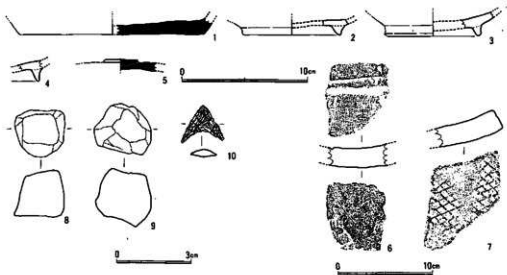


Fig. 93 第21次調査出土遺物実測図 (1/3・1/4・2/3)

み部分。

土師器

坏

瓦

8と9は割れ口や形状から瓦玉かと思われる。

石器

石鏃 (10)

黒曜石製の幅に対して長さが短い浅い抉りの入るもので、縄文時代の所産と考えられる。

第21次調査 出土遺物法量一覧

1 (-1.3+a-14.6) 2 (-1.3+a-7.8) 3 (-2.0+a-7.6) 8 (2.0-1.9-1.8) 9 (2.2-2.0-1.8) 10 (1.5-1.7-0.3)

1 1 第22次調査

1) 調査の概要

1991年11月初旬、(株)田島不動産より当該調査に関わる地番(国分1丁目220-3他)について店舗及び住宅建築という開発計画をもって文化財の取り扱いに関する問い合わせがなされた。当該地番が水城跡史跡指定拡張に係る50mの範囲内に所在し、現在保存処置がなされている木橋に近接していることから、発掘調査の必要なことを説明し、また地権者には史跡指定拡張の同意への働きかけを行なった。

発掘調査に先立ち、遺跡の規模を確認する目的で、1992年1月22日に九州歴史資料館調査課栗原課長立会のもと、試掘調査を実施した。その結果、水城に関わると考えられる遺構が確認されたため、松島博之氏(地権者)ならびに(株)田島不動産との協議の結果、1992年8月頃に重要遺跡確認調査として発掘調査を行なうことになった。調査期間は1992年8月21日から9月8日で、中島恒次郎・緒方俊輔・山村信榮が担当した。

調査後の協議の結果、史跡指定の拡張に御同意いただき、1993年9月に水城跡に追加指定された。

2) 遺構 (Fig.94・95, Pla.44・45)

2ヶ所の調査区を設定し、調査を進めた。顕著な遺構としては、溝1条を検出した。

22SD001 北西-南東の方向に、幅約3.7mの溝を検出した。調査区内において水城側へ深くなっており、南東方向へゆくにつれて浅く消失している。後世の削平によるものと考えられる。溝内には粘質土および砂質土が堆積しており、主として粘質土の堆積が顕著であることから、溝内での水の流れというものは想定し難い。最終埋没時は、流んだ状況が考えられる。検出した範囲内での最大の深さは、検出面から約90cmを測る。溝内からは、流木が出土しているものの、遺物はあまり出土していない。

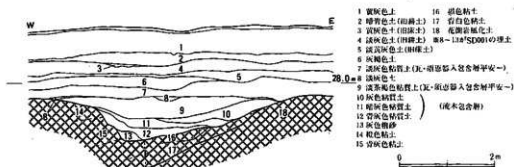


Fig. 94 第22次調査東調査区北壁土層断面図 (1/80)

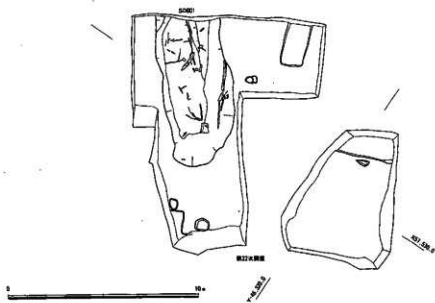
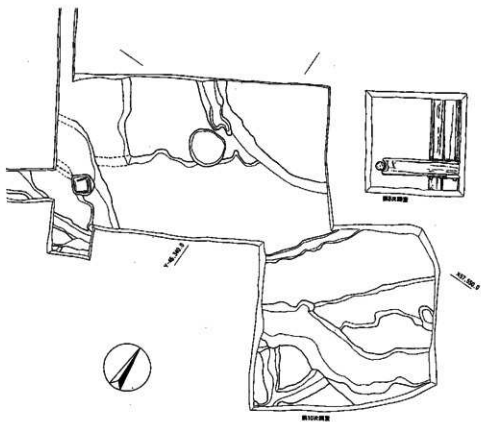


Fig. 95 第22次調查区周边遺構配置图 (1/200)

3) 遺物 (Fig.96、Pl.67、別表1)

平瓦 (1・2) いずれも平瓦の細片で、凹面に布目を有し、凸面には細かい縄目の叩き痕跡を有している。奈良時代の所産と考えられる。出土遺構は、22SD001暗青灰色土層。

瓦玉 (3)上記の凹面に布目を有し、凸面に細かい縄目の叩き痕跡を有する瓦片を、約3.0cm前後に不整形円形に加工している。出土遺構は22SD001暗青灰色土層。

土製品 (4) 径4.5cm前後を測るほぼ円形を呈するもので、断面形は、楕円形を呈している。遺構検出時に出土している。

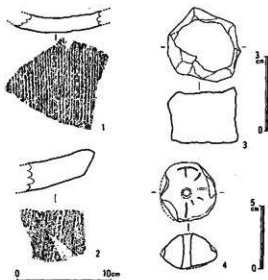


Fig. 96 第22次調査出土遺物実測図 (1/4・1/3・2/3)

4) 小結

今次調査によって検出された溝は、位置ならびに埋没時期から、水城に関連する可能性が極めて高いといえる。しかし、溝の形状ならびに調査所見から人為的な痕跡を読み取ることはやや困難である。昭和5年に発見された木樋より溝の標高は低く木樋への導水溝とは理解できない。したがって今後未調査区域の解明によって、今次調査によって検出された溝22SD001の位置づけが明らかにされるであろう。

12 第23次調査 (Fig.97, Pla.46・47)

調査地は大字吉松604に所在し、下水道管理設にともなって1992年11月11日におこなった調査である。調査は井上信正と山村信榮が担当した。

調査地点は第19次調査地点と水城土塁間の道路路面中央部分で、第19次調査の所見から水城土塁の積み土層はこの路面下から始まるものと推定されていた。土層観察の結果予測どおり地表下約60cm～120cmで褐色、黄色粘土のブロック層＝積み土層が折り重なって検出された。基盤層は黄色～橙色粘土層で東側ではこれに灰色粗砂層が乗っているものであり、積み土のブロック層は上位から耕作や廃棄による攪乱、西側は水の流下によってできた砂と粘土の互層により切り込まれて原形を保っていない。第19次調査の所見からこの水の流下によってできた砂と粘土の互層の発達レベルの低い南側でさらに顕著である。結局、この年度の下水道工事はこの箇所にも積み土層が確認されこの調査区以西では砂と粘土の互層が連続していた。

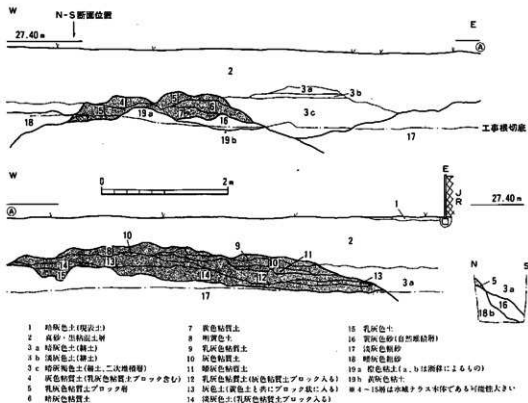


Fig. 97 第23次調査区北壁土層断面図 (1/60)

13 第25次調査

1) はじめに

調査地は大字吉松611・610-3において、下水道管埋設にともなっておこなった調査である。下水道工事としては第23次調査と一連のものである。調査は路面中に設定された掘削坑の断面観察に主眼をおき、延べ34箇所でおこなった。

調査期間は1993年4月23日～6月1日である。調査主体者は太宰府市教育委員会であるが派遣申請に基づき九州歴史資料館からの応援を得た。調査は栗原和彦、横田賢次郎（以上九州歴史資料館）、山本信夫、塩地潤一、山村信榮（以上太宰府市）が担当した。

2) 層位 (Fig.100～105, Pla.47～50)

土層観察は結果的にNo.1～11地点では西門に向かって南北に、No.12～34地点は西門以西を東西方向に水城堤の部分切る形となった。前者では明確な積土は確認されていない。後者では表土、耕作土、包含層（平安時代）、水城積土、縄文包含層、基盤層が確認された。

基盤層は西門切り通し付近に厚みのある安定した黄色粘土層が見られ、この層は切り通し部分を頂点に各方向に傾斜する。切り通し西側ではこの上に酸化した茶色粘土層が乗り、さらに自然堆積作用によってできた褐色の砂質土が乗る。この層には縄文晩期の土器が複数包含され、至近に生活域が存在したことを示している。この層の上面には褐色を主体に黄色、白色粘土のブロック層群が厚いところで約160cm観察され、これが水城の積土であると判断された。かつて、南側の第21次調査区でもこの層群の延長が確認されており、今回の調査で西門以西でテラスの延長が確認された。層群中の各層の厚さは数cmの薄いものから40cm近くある層までである。また、No.13地点ではこの上面に土器、瓦を出土する包含層があり、これも21次調査の所見と併せて、西門以西のテラス上で平安時代の遺構が展開することが確認できる。また、No.18～26地点では積土層群の上に時期不明の耕作土（畑作か）層が見られる。No.30地点以西では基盤層である花崗岩風化土が西に向かい高くなる。水城積土の始まりはNo.27～28の間に求められる。この付近の基盤層が東に傾斜する箇所は湿気が多く（地盤が脆弱なため調査中に壁が崩壊したほど）、No.28地点では積土中に木の枝葉を敷き詰めた層があり、その同一層の延長（No.21・31・30地点）には木材が並べて置かれていた。状況から、作業の足場を確保するために人為的になされたものと思われる。

3) 遺構

遺構としては西門の切り通し付近（No.13・12地点）で2本の溝状遺構を、西側（No.21・31・

30地点)で埋置された枕木状の木材群を確認した。

25SD001

No.13地点で確認した布掘状の深い溝で、推定される遺構形成面から深さ約1.2m。南北の壁面での位置からこの溝は北に対して約45度西に振れている。堆積の状況が水平方向の層が多く、埋め戻しがおこなわれた可能性がある。

25SD002

25SD001の西約12mの所で検出された。埋土の状況から、水城築造とともに一気に埋められたと判断される。この溝も北に対して西に振れている。

25SX003

No.21・31地点で確認された枕木状の木材群の埋地遺構。4本が土層が変換する面上で並んで置かれていた。材は取り上げと共に崩壊したが、大きいもので太さ30cm、厚さ20cmを測る。

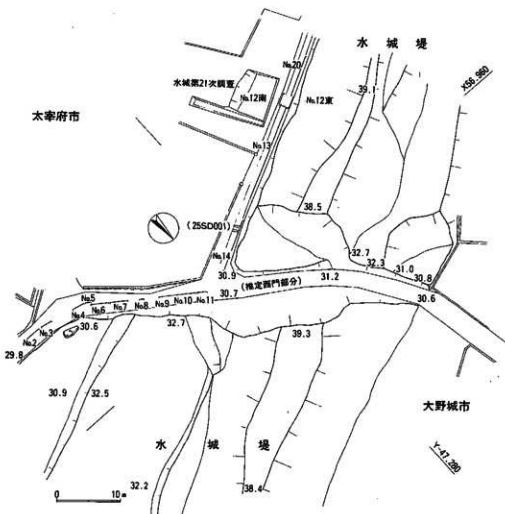


Fig. 98 第25次調査区配置図(1) (1/600)

検出された土層は土塁積土中の下位にあたり、西側にも木材や枝葉を敷き詰めた層があり、積土初期に人為的に置かれたものと判断している。木々は木道とするほどの連続性はない。

4) 遺物 (Fig.106・107、Pl.67、別表1)

縄文土器

深鉢 (1・2)

No.19地点の淡黒灰色粘土層から出土したもので、外面にナデによる粗い条痕がみられる。口

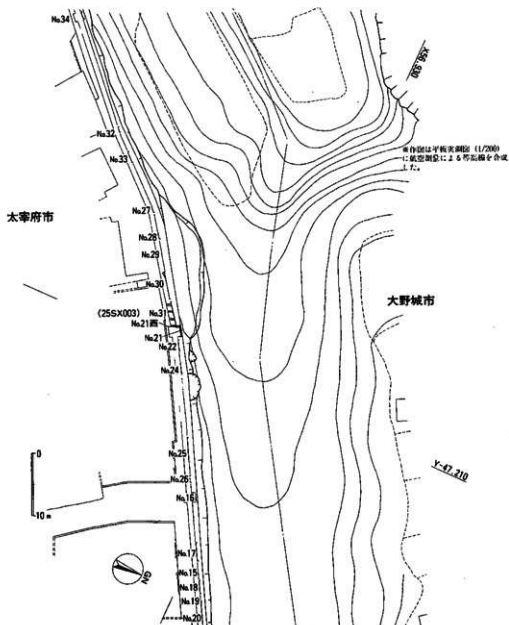
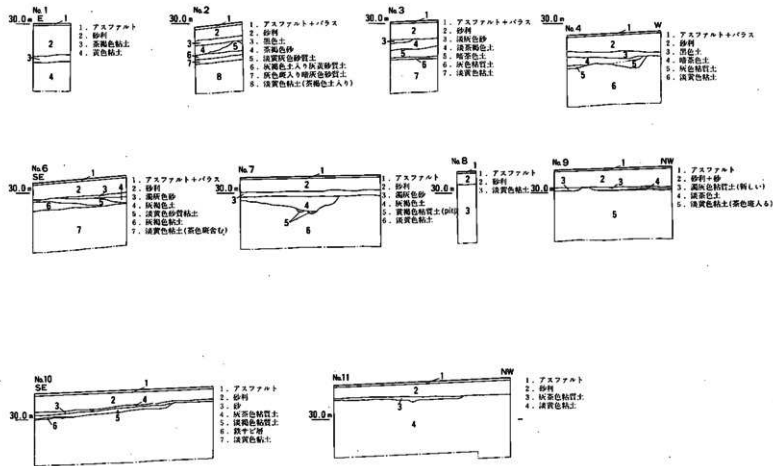
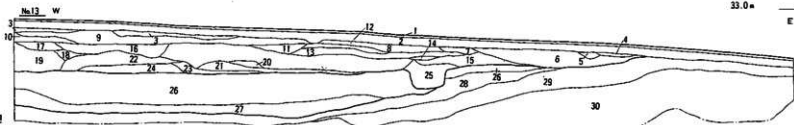


Fig. 99 第25次調査区配置図(2) (1/600)

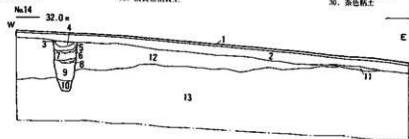
Fig. 100 第25次調査各地点土層断面図(1) (1/80)



0 2m



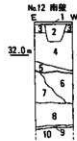
- | | | |
|---------------------|---------------------------------|---------------------|
| 1. アスファルト | 11. 茶色粘土ブロック入り淡黄色粘質土 | 24. 淡茶褐色砂質土 |
| 2. パラス屑 | 12. 黄褐色粘質土 | 25. 暗褐色ブロック入り茶褐色粘質土 |
| 3. 暗褐色砂質粘土 | 13. 淡黄色ブロック入り明茶色土(茶色強い) | 26. 暗褐色ブロック入り淡黄色粘質土 |
| 4. 茶褐色粘質土 | 14. 黄褐色粘質土(粘質強い) | 27. 暗褐色ブロック入り茶褐色粘質土 |
| 5. 明茶色土 | 15. 淡黄褐色塵砂粘質土 | 28. 黄褐色粘質土 |
| 6. 淡黄色ブロック入り明茶色土 | 16. 淡黄色粘土ブロック混. 茶褐色砂粘質土 | 29. 茶褐色粘質土 |
| 7. 黄褐色粘質土 | 17. 茶色粘土ブロック入り淡黄色粘質土 | 30. 茶色粘質土 |
| 8. 黄色塵埃ブロック入り淡茶色粘質土 | 18. 茶色. 黄色粘土ブロック入り茶褐色砂質土 | |
| 9. 暗茶色砂質土 | 19. 茶色粘土ブロック入り淡黄色粘質土(17より淡黄色強い) | |
| 10. 茶褐色粘質土 | 20. 淡黄色粘質土 | |



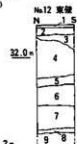
- | | |
|-------------|-------------------|
| 1. アスファルト | 10. 明茶色土(粘質ボヤした土) |
| 2. パラス屑 | 11. 茶褐色土 |
| 3. 茶褐色粘質土 | 12. 茶褐色土 |
| 4. 黄褐色土ブロック | 13. 黄褐色粘質土 |
| 5. 淡茶色粘質土 | |
| 6. 茶色砂土 | |
| 7. 茶色土 | |
| 8. 淡茶褐色粘質土 | |
| 9. 茶褐色土 | |
- (1より強いボヤボヤした土)



- | | |
|-------------|-----------|
| 1. アスファルト | 10. 暗茶褐色土 |
| 2. パラス屑 | 11. 茶褐色土 |
| 3. 茶褐色粘質土 | |
| 4. 黄褐色土ブロック | |
| 5. 茶褐色砂 | |
| 6. 茶色土(灰入) | |
| 7. 明茶色土 | |
| 8. 暗茶褐色土 | |
| 9. 明茶色土 | |
| 10. 茶褐色土 | |
| 11. 黄褐色粘質土 | |



- | |
|-------------|
| 1. アスファルト |
| 2. 茶褐色土 |
| 3. パラス屑 |
| 4. 白色粘土ブロック |
| 5. 茶褐色土 |
| 6. 淡茶褐色砂質土 |
| 7. 黄褐色粘質土 |
| 8. 黄褐色粘質土 |
| 9. 黄色砂 |
| 10. 灰色粗砂 |

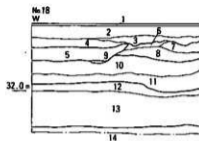


- | |
|-------------|
| 1. アスファルト |
| 2. パラス屑 |
| 3. 茶褐色土 |
| 4. 白色粘土ブロック |
| 5. 茶褐色土 |
| 6. 黄褐色粘質土 |
| 7. 黄褐色粘質土 |
| 8. 黄色砂 |
| 9. 灰白色粗砂 |

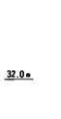
0 2m

Fig. 101 第25次調査各地点土層断面図(2) (1/80)

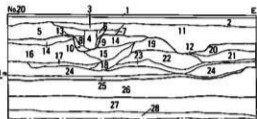
Fig. 102 第25次調査各地点土層断面図(3) (1/80)



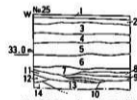
- | | |
|----------------|-----------------------|
| 1. アスファルト | 8. 黄色土(白色土上のブロック層) |
| 2. バタス層 | 9. 黄色土ブロック層 |
| 3. 灰色土(成層地) | 10. 深紅色粘土(黄色粘土ブロック入る) |
| 4. 黄灰色土(二次自然砂) | 11. 紅褐色土(灰色粘土ブロック入る) |
| 5. 灰褐色土(耕土) | 12. 黒褐色粘土(礫入る) |
| 6. 黄灰色土 | 13. 明灰色砂 |
| 7. 明黄灰色土 | 14. 深褐色粗砂 |



- | | |
|-----------------|----------------|
| 1. アスファルト | 13. (白色土ブロック層) |
| 2. バタス層 | (紅色土入る) |
| 3. 黄褐色土 | 14. 深紅色粘土 |
| 4. 黄色土 | (二次自然砂・礫層地) |
| 5. 黄褐色土 | 15. 紅色粘土 |
| 6. 深紅色粘土 | 16. 紅黄褐色土ブロック層 |
| 7. 灰褐色土 | 17. 紅色土 |
| 8. (白色粘土ブロック入る) | (白色土ブロック層) |
| 9. 灰褐色土 | 18. 白色土ブロック層 |
| 10. 白色粘土ブロック層 | 19. 深紅色粘土 |
| 11. 深紅色土ブロック層 | 20. 深褐色粘土 |
| 12. 白色土 | (縄文後期層包含層) |
| | 21. 黄色粗砂土 |
| | (縄文後期層包含層) |
| | 22. 明灰色粗砂 |
| | 23. 黄灰色粗砂 |



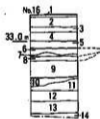
- | | | |
|-----------|-----------------|-----------------|
| 1. アスファルト | 11. 棕色土 | 21. 白色土ブロック層 |
| 2. バタス層 | 12. 灰褐色土 | 22. 深紅色粘土 |
| 3. 砂褐色土 | 13. 褐色土 | (白色粘土ブロック入る) |
| 4. 粉褐色土 | 14. 紅褐色粘土 | 23. 黄色粘土 |
| 5. 黄色土 | 15. 紅色土ブロック層 | (白色粘土ブロック入る) |
| 6. 黄色土 | (白色粘土ブロック入る) | 16. (白色粘土ブロック層) |
| 7. 褐色土 | 17. 灰白色粘土ブロック層 | 24. 暗茶褐色粗砂 |
| 8. 深褐色粘土 | 18. 棕色粘土(白色土入る) | 25. 暗褐色粗砂(シト質) |
| 9. (白色粘土) | 19. 深褐色粘土 | 26. 暗褐色粗砂 |
| 10. 深褐色粘土 | 20. (白色土ブロック層) | 27. 暗褐色粗砂 |
| | (紅色土入る) | 28. 黄灰色粗砂 |



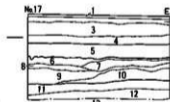
- | | |
|----------------|-------------------|
| 1. アスファルト | 8. 黄褐色粘土 |
| 2. バタス層 | 9. 暗褐色粘土 |
| 3. 深黄色砂質土(自然砂) | 10. 黄褐色粘土ブロック入る |
| 4. 黄褐色砂質土(自然砂) | 11. 深黄色粗砂 |
| 5. 暗褐色粘土 | 12. 黄褐色粘土 |
| 6. 深褐色砂質土 | (No.17, 20と同様に相当) |
| 7. 暗褐色粘土 | 13. 深褐色粘土 |
| | 14. 黄褐色粘土 |
| | (黄褐色粘土ブロック入る) |



- | | |
|-----------------|--------------------|
| 1. アスファルト | 8. 暗褐色粗砂入り粘質土 |
| 2. バタス層 | 9. (白色粘土ブロック層) |
| 3. 黄白色土 | 10. 黄褐色シルト(紅色粘土) |
| 4. 黄褐色土 | 11. 黄褐色グライ土(自然土流入) |
| 5. 灰褐色土(耕土) | |
| 6. 黄色土(耕土) | |
| 7. 灰白色土(黄色土混じり) | |



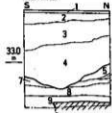
- | | |
|-------------|------------|
| 1. アスファルト | 8. 灰色シルト |
| 2. バタス層 | 9. 棕色粘土 |
| 3. 黄白色土 | 10. 灰色粘土 |
| 4. 黄褐色土 | 11. 淡黄褐色粘土 |
| 5. 灰褐色土(耕土) | 12. 黄褐色粗砂 |
| 6. 黄色土 | 13. 灰白色粗砂 |
| 7. 白色粘土 | 14. 黄褐色シルト |



- | | |
|---------------|---------------------|
| 1. アスファルト | 8. 黄色土ブロック層 |
| 2. バタス層 | 9. 深褐色粘土 |
| 3. 二次自然砂・バタス層 | 10. 黄褐色土(白色土ブロック入る) |
| 4. 黄砂質土層 | 11. 深褐色粘土 |
| 5. 暗褐色土 | 12. 棕色粗砂 |
| 6. 暗褐色土(耕土) | 13. 暗褐色粗砂 |
| 7. 黄色土 | (深褐色土ブロック入る) |

0 2

No.21西壁



- 1 アスファルト
- 2 バタス層
- 3 灰色砂質土
- 4 淡灰色土(現代埋土)
- 5 淡青色粘質土
- 6 赤褐色土
- 7 暗灰色粘質土
- 8 淡紅色粘質土
- 9 茶褐色粘質土
(石灰粘土)

No.21



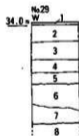
- 1 アスファルト
- 2 バタス層
- 3 灰入り灰色砂質土
(カタラン)
- 4 青灰色土(二次直砂)
- 5 淡青色粘質土
(灰物多く入る
低層層相)
- 6 淡青色粘質土
- 7 淡紅色粘質土(赤褐色土入る)
- 8 淡黄色粘質土
- 9 淡紅色粘質土(赤褐色土入る)
- 10 茶褐色粘質土
- 11 黄色粘土



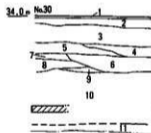
- 1 アスファルト
- 2 バタス層
- 3 青灰色粘土
- 4 淡灰色粘質土
- 5 淡青色粘土
(青灰色粘土
ブロック入る)
- 6 淡紅色粘土



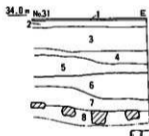
- 1 アスファルト
- 2 バタス層
- 3 黄褐色砂土
(灰砂)
- 4 青灰色粘土
- 5 青灰色粘土
- 6 淡紅色粘土
(青灰色粘土
ブロック入る)
- 7 淡紅色粘土
- 8 暗灰色粘土



- 1 アスファルト
- 2 バタス層
- 3 腐葉土
- 4 青灰色粘質土
- 5 黄褐色粘質土
- 6 暗灰色粘質土
- 7 黄褐色粘質土
(青色ブロック入る、腐葉土)
- 8 茶褐色粘土



- 1 アスファルト
- 2 バタス層
- 3 黄褐色土(カタラン)
- 4 茶褐色粘土
- 5 暗灰色土
- 6 暗灰色粘質土
- 7 明黄褐色粘質土
- 8 濃黄色粘質土
- 9 淡黄色粘土
- 10 淡茶色粘土
(青灰色あり)



- 1 アスファルト
- 2 バタス層
- 3 黄褐色土(カタラン)
- 4 腐葉土(腐葉土)
- 5 暗灰色砂質土
- 6 淡青色粘質土
(茶色粘質土が塊状に入る)
- 7 淡黄色粘質土(青灰色あり)
- 8 黄色粘質土(腐葉土)

(25Sx003)

0 2m

Fig. 103 第25次調査各地点土層断面図(4) (1/80)

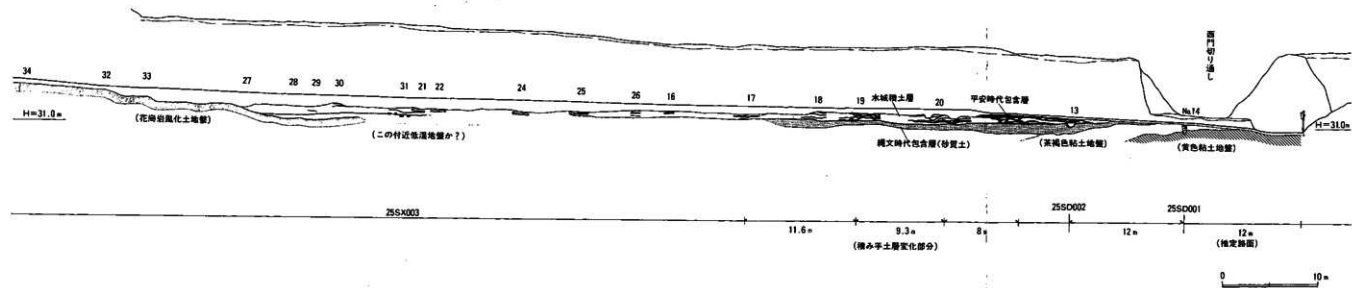


Fig. 104 第25次調査土層概念図 (1/400)

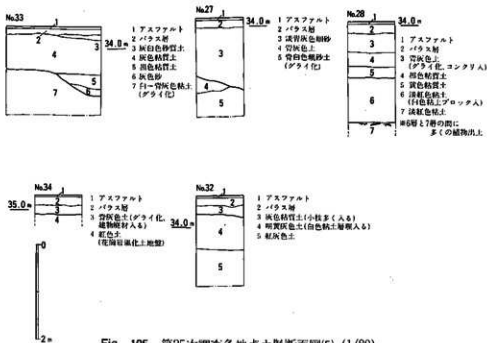


Fig. 105 第25次調査各地点土層断面図(5) (1/80)

縁端部の形状や胴部の屈曲具合などから突帯文土器が出現する直前の時期、晩期中頃の所産と思われる。

須恵器

甕 (3・4)

No.19地点の白色粘土層 (水城積み土層中) から出土した。時期の特定は難しい。

瓦 (5・6)

土器積土層を覆う茶褐色土から出土。21次調査では同層から平安時代の土器が複数検出されている。5は平瓦、6は九瓦。格子文様のタタキ裏を持つ。

木製品 (7~11)

25SX003出土木材のサンプル片。樹種は未鑑定。

5) 小結

今回の調査と第21次調査の所見から以下のことが判明した。

- ・西門切通付近にはもともと安定した粘土の基盤層が高まり状に存在していた。
- ・西門西側にも土塁テラスの延長が存在する。また、テラス上には少なくとも平安時代の遺構が展開している。
- ・積土中にも遺構 (25SX003等) が存在することが認められた。

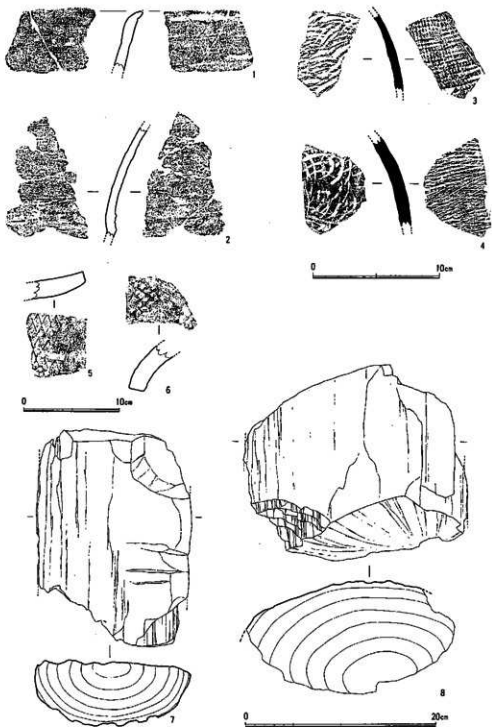


Fig. 106 第25次調査出土遺物実測図(1) (1/3・1/4)

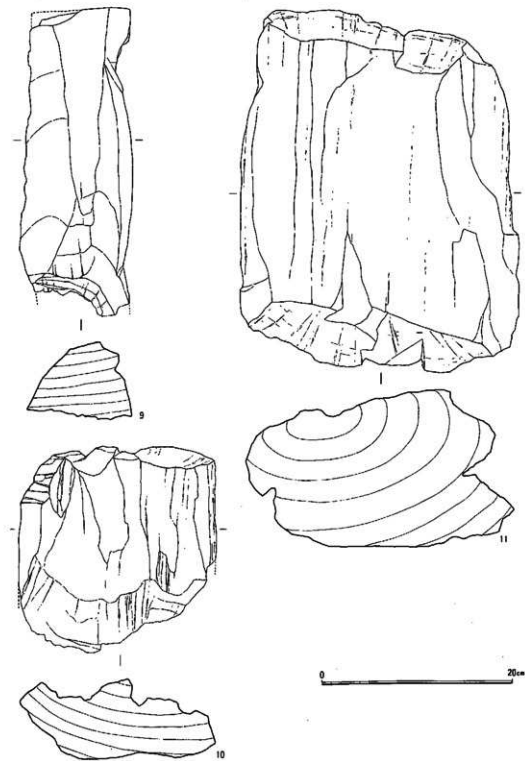


Fig. 107 第25次調査出土遺物実測図(2) (1/4)

IV まとめ

1 水城西門内側の遺構と水城の構造 (Fig.108, Pla.3)

水城の西側の門の存在については、以前から付近の民家に門礎が残されていたことから、その存在は周知のものとされてきた。1979年に福岡県教育委員会によって春日市春日公園内でおこなわれた発掘を契機とする一連の調査によって、西門を起点とする広域道路(官道)の存在が明らかにされ、門の存在はゆるぎないものになった。1993年の太宰府市の島本遺跡での調査では門の内側約200mの地点でもこの路面が検出され、門の南北には東西に溝芯々幅10mほどの側溝を持つ道路が取り付く構造が明らかになった。今回報告の第25次調査でも切り通しの直前に布振り状の溝SD001が検出され、溝の方向はおおよそ先の道路の方向に合致している。このことから、現在の切り通しの形状は崩落によって本来の幅より狭くなっており、東西方向の積み土のレベルの状況から現在の路面は旧来の面より1.4mほど掘り下げられていると判断される (Fig.108参照)。切り通しの壁面に二三の花崗岩の石が見られるが、おおよそこの高さに乗っている。門存在時には門を官道の南北から見ると一段高い位置に見えたものと思われる。



Fig. 108 水城西門内側の遺構と地盤 (1/2500)

土層の観察からの所見は第25次調査で多少触れているが、試掘の所見も含め再述したい。

水城の積み土は切り通しの約100m西から始まる。積みだしたのは東から延びる花崗岩風化土の丘陵端部で、積み土は最も下の部分では切り通し付近にあった黄色と褐色の粘土層が用いられている。観察しえた土層のデータの範囲では東西方向の積み手の単位は10m前後であった可能性がある（Fig.108参照）。調査範囲では木樋は確認されなかった（第25次調査では全区間に亘って積み土の最下層まで検出しえたものではない）。積み土の南側は新しい時期の河川の侵食、砂、粘土の堆積を受けている。19-140地点では江戸時代後半の遺構から門の南側が一時低湿地化していたと判断される。

水城堤の内側を土塁の方向に沿って流れた河川の跡は、水城寺の乗る小山の南北の谷を通過する2本の流れが想定される（Fig.108アミ部分）。もし、木樋を用いて水城の外堀に水を導水していたとすれば、この谷筋が利用されたものと思われる。外堀や木樋の規模からすれば導水については何らかの調整施設が必要で、今後はこの谷の中や上位にある池にまで注目する必要がある。

2 水城東門内側の遺構（Fig.109、Pl.3）

水城の東側の門の存在については、以前から旧街道（日田街道）の路傍に門礎が残されていたことから、その存在は周知のものとされてきた。東門を通過する広域道路（古代官道）は門の南北3箇所以上で確認され、内側では筑前国分寺、国分尼寺の前面に向かう分岐路も見つかっている。今回の第16・18次調査では奈良時代の整地層が門内側、官道東側に広がっていることが確認され、無文磚、瓦類が多数出土し、第18次調査では文様磚と鬼瓦が出土した。官道の東側では第10次調査（九歴）で「水城」銘の墨書土器を出す8世紀後半の井戸が、また、その北のテラス上の第24次調査（九歴）では2間×6間の南北方向の掘立柱建物が検出されている。さらにその西側の第11次調査では埴を焼いた窯が確認された。第16・18次調査で出土した埴は至近にあるこの窯で生産されたと考えられる。これらの遺構群は近似した時期に形成された一連のものと考えられ、第18次調査では須窓器の坏、皿を用いた転用硯等が出土しており、8世紀中葉以降この場所に特定の官衙があったことが推定される。

8世紀中葉から後半という時期は韓半島にあった新羅国との関係が悪化し、天平神護元（765）年には柘土城とともに「修理水城専知官」がおかれ（『続日本紀』）、この時期に水城が軍事的理由により再度整備されたことを窺わせている。また、地理的状况として大宰府と博多湾を結ぶ幹線道路も、8世紀初頭頃に供用された官道西門ルートは8世紀後半には門の内側は荒廃しており公道としては利用されていない可能性が指摘され、先の水城東門周辺に官衙が形成された時期は、博多湾側から大宰府政庁へのルートの主体が東門を通過するルートに移行していった時期でもある。

平安時代の文献資料には大宰大貳の着任の際の公印の受渡が水城でおこなわれ（『小右記』1005年）、詩歌には「みつきのせき」と歌われ（『大貳高遠集』1005年）ここに特定の官衙、関があったことを匂わせている。養老令開市令蕃客条には山陽道各国に関が設けられていたことが見られ、蕃客の上陸地にある福岡平野に関が設けられていた可能性は少なくない。「関」の構造については岐阜県の「不破関」が発掘調査によって明らかにされており、平城京遷都後に形成された、全体を土塁に囲まれ、中心的な建物は築地壁によって囲まれた東北の城柵に似た定型化した官衙であることがわかっている。また、軍防令縁辺諸郡人居条には「凡縁東辺北辺西辺諸郡人居。皆於城堡内安置」とあり、「城堡」とは『義解』では「堡者、高土以為堡。軍防賊也」とされ、西辺にあたる大宰府はその適用を受けたものと思われる。

以上、今回水城東門周辺で抽出した特定官衙の性格については調査の所見を踏まえ、軍事、交通、儀礼などの多角的視点からの検討が必要である。



Fig. 109 水城東門内側の遺構と街路 (1/5000)

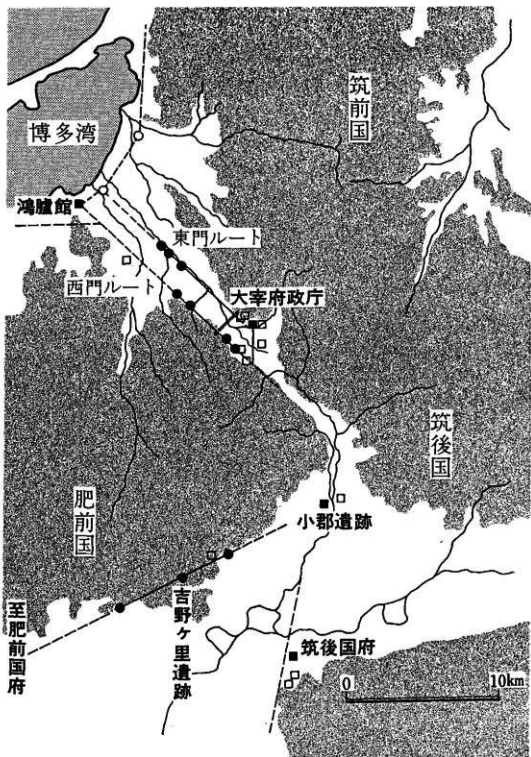


Fig. 110 大宰府周辺官道ルート図 (1/25万)

3 水城の構造について

1 第17次調査まとめ

第17次調査内容を総括する意味でここに成果を簡明にまとめておく。

木樋の問題

今回の調査で解明された点から木樋の構築に関しては少なくとも次のような2通りの解釈が可能である。

①縦樋と横樋は一体に構築するものでこれをT字形に組み合わせる際、横樋側掘形を後で埋めた。この場合、柱穴c dは構築時におけるなんらかの仮設工事用施設跡の可能性を持つ。

②縦樋と横樋は時期の違うものとみる。当初、縦樋のみであったが、後に横樋を追加、補修した。この場合、柱穴c dは当初の縦樋に付設するもので、横樋を追加する際撤去された。

今回の調査により柱穴c dの存在と層位関係によって、①②の案とくに②が新たに浮上してきたわけであるが、東門側木樋についてはこのような点が明らかではない。樋そのものの残存状態が良好であるので、この保存のために今回のような木樋下部構造の発掘にまでは到っていない事柄がある。

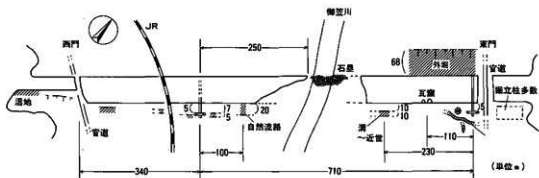


Fig. 111 水城全体概念図 (約1/5000)

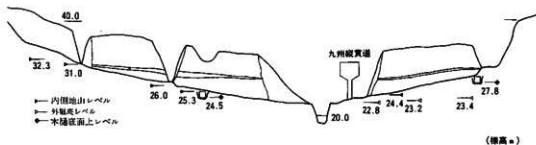


Fig. 112 水城レベル概念図 (水平方向約1/5000・垂直方向約1/800)

水城築堤の構築方法の解明

①水城土塁は一段高い本体部と基底部の2段から成り、基底部南側（テラス状部分）の上面は本体部へ近づくにつれて徐々にレベルを上げる。このテラス部分の積土は大きく見ると上下の2層に分けられる。この2層の違いは縦断する木桶の土層ではじめて確認できた。つまり上下の水平な積土の間に木桶の掘形を埋めた斜めの積土が入るので、この線を境に上下の異なる積土が識別できることとなったのである。木桶をはずれた部分であれば、単に水平の堆積が見られるだけで、上下の積土の識別が困難であろう。ただし詳細に検討するとわずかな差異は認められる。すなわち上部積土の1層の幅は下部積土の1層よりも厚く粗い点である。この点が質的に上下を分けるヒントになるであろう。本文中ではこの下部積土→掘形積土→上部積土の順次構築を版築I→版築II→版築IIIとした。

②この3段階の版築については2つの観点から解釈することができる。すなわち一連の築堤作業を3段階にわけて行ったとみるか、時代差によるものとみるかということである。後者の場合、樋および築堤の改修の可能性が考えられることとなる。

③この点について過去の調査例を見てみると、東門側木桶の第5次調査では内側テラス部のほぼ中央で縦横延長にあたる位置を調査しているが、堆積状況は確認できない。九州歴史資料館が1993年に行なった水城第24次調査では第5次調査区のすぐ西側を掘っている。横田賢次郎氏によると、版築の積土のレベル、厚さの状況を見ると、第5次調査木桶の掘形は版築の上から切りこんでいる事がほぼ確実という。つまりここでは第17次調査確認の版築I→版築IIという関係が確認された事になる。

④版築IIIについて補足しておこう。第17次の各断面に示す版築I・III標高値を見ると、南から北へ版築I上面のレベルは26.5、26.2、26.4mとはほぼ一定しているが、版築III上面のレベルは26.5、28.2と次第に上昇する。つまり水城基底部上面全体は版築Iによっていったん平坦に整形された後、版築IIIでさらに本体へ向かって積土を徐々に高くしている事がわかる。これは本体をより高く築くための方法とも思えるが、②で述べたように版築IIIを時期差と捉える事も今の段階では可能である。この解決にあたっては本体と基底部に続く断面調査が必要である。また横田賢次郎氏はテラス部地表面には不連続の段がいくつかあり、耕作などでつけられた段もあるが、築堤時に水城と平行に段がつけられた可能性も考慮する必要がある点を指摘されている。このように調査とともに新たな問題点が生じていて、総合的な調査が望まれる。

以上のように第17次調査の成果にいくつかの課題が内包されていて、今後、いっそう精緻な調査の集積が必要とされるだろう。

2 水城関連施設の概念化 (Fig.111・112)

水城跡は延長1.2km、高さ13m、基底部幅72mの土塁で東西2箇所には城門があり、このように巨大で堅固に築かれた古代土塁は他に例をみない。これまでの発掘調査により、北の博多側(外側)には幅60mの堀があり、この堀への導水する施設として土塁を横断する木樋が東堤1箇所で見えられていた。今回2箇所目の木樋が西堤で見えられたが、なお数箇所に設置された可能性がある。

水城跡に関しては発掘調査が進んでおらず、不明な点も多いが、これまでに判明している関連施設をここで整理して今後の水城解明への出発点にしようと思う。

Fig.111は各地点で掌握される関連施設のごくおおまかな位置関係、数値を示す。数値はあくまでも概数値であり今後の測量調査などで修正されるべきものである。

なお水城土塁は凡例にも示すように御笠川以东(国分側)を東堤、川以西(吉松側)を西堤、東門側木樋を東木樋、第17次木樋を西木樋と呼称しておく。

①内側の取水・導水施設……東西木樋の間隔は710m。両木樋の中央部位置に御笠川が縦断するので、御笠川を中心として各々東西に355m離れて木樋が位置する。西木樋と西門の距離は340mで、前記の355mに距離数値は近く、この事から西門周辺にも木樋を想定できそうである。第25次調査をこの周辺で実施したが木樋は確認はできなかった。東西の横樋は土塁の基底部斜面よりも内側(南側)に飛び出した位置にある。横樋と土塁端の距離は東西木樋とも5mである。

木樋に取水するための導水施設としては内堀の存在が推定される。しかし溝状の遺構が確認された地点もあるが築堤年代に一致する溝の報告はない。例えば東木樋の南から西へ蛇行する溝は樋取水口と接続せず、年代は不明(第8次SD067)。東木樋から西へ230mで検出された溝は近世までの遺物を含み、内堀とするには難点がある(第6次SD055)。つまり現状段階では内堀の可能性は薄く、自然流路あるいは(自然流路+一部の人工的流路)の導水方法が考えられる。これらの調査のなかで築堤年代に直接関連しないが築堤以前・7世紀前半の溝と築堤以後・8世紀の溝が注意される。

(A) 築堤以前の溝は第8・14・17次であり、これらは土塁との直接的な重複関係はないが、第17次では木樋の遺構面より古い溝17SD010(7世紀前半埋没)があり、これは東の14SD001に連続する一連の溝である。この古期の溝は水城とは無関係な方向を持つ。ただし水城以前の地形に影響された可能性があるため、水城築堤直前の地形環境を考慮する上で無視はできない。

(B) 築堤以後の溝は第17次の17SD012(8世紀中頃前後埋没)、西堤内側JR鹿児島本線の西で第7次の溝かとされるSD060(奈良前半~平安)、東木樋の南で第22次の22SD001(奈良?)がある。この中で注目されるのは17SD012で、これは土塁に平行し51m分検出しさらに西に続く。溝東端は木樋取水口手前で止まりさらに東には続かないが、8世紀に取水口まで導水路として機能した可能性もある。土塁端から溝の北側肩にまでは5mで、かつて土塁がここまで延長してい

た可能性があり注意したい（下記③参照）。

②外堀……東堤には幅68mの外堀がつく（第5次）。ただし検出範囲は一部にとどまるので堀外側の層は全体に及ぶのか追及する必要がある。

③土塁内側の延長……水城基底部幅は現状で約72mとされている。ところでこの内側斜面は築堤当時の状態よりもいくぶん削平されたのではないかと見る。これは上記①の土塁内側際から横樋までの距離5m間に遺構の空白部がある事、第17次では17SD012の北側肩は当時の土塁内際を表す可能性、同様に第8次検出の8世紀後半の井戸は木樋取水口よりも南側にある事、などの点から推定される。横樋の線まで土塁内側が南へ延長していたとなると、基底部幅が80m前後に復原される。

また東木樋から西110mの土塁内側では瓦窯跡が発見されており、窯の焚口ないし奥壁のどちらに近いのかがわかると、上記の問題を明らかにする材料となる。土塁内側が削平されているならば、こうした消極的状況から類推するほかはない。

④西門以西のテラス部（積土）の延長……第21次では土塁積土が確認されテラス部は西門以西にも延長している事が確実となった。西の第9次調査では積土がなく自然の堆積を呈し、テラス部は存在しない。テラス部積土の西終端位置は第25次調査により西門から西側約100mと推定される。

⑤その他の関連施設……今後検討が必要な部分を2、3あげておく。御笠川には石積み遺構が存在し洗堰のような施設が推定されている。この石積み遺構の範囲、土塁との関係、年代確定などについて解明が必要である。東門内側の東では試掘調査により柱穴が多数確認されており、官衙的建物跡が推定される位置である。

以上、水城をめぐる問題点の解明は、考古学的基礎作業によって新たな展開をみせ始めようとしている事を強調し、結びとしておきたい。

V 水城跡の保存について

保存の経緯

太宰府市における水城跡の保存に関する経緯を年表的に記述すると、次のとおりである。

- 大正10年3月3日 内務省は水城跡の史跡指定を告示する。
- 昭和13年12月28日 内務省は木樋取水口部分（国分側）の追加指定を告示する。
- 昭和28年3月31日 文化財保護委員会は同日付をもって同史跡を特別史跡に指定する。
- 昭和40年～昭和47年 九州縦貫自動車道が水城跡を通過する案について、建設省・日本道路公団と文化財保護委員会（昭和46年3月以後は文化庁）・福岡県教育委員会との間で水城保存をめぐる協議交渉がなされる。
- 昭和45年度 水城跡の公有化を開始する。
- 昭和48年度 福岡県教育委員会は水城跡の環境整備を開始する。
- 昭和50年5月 福岡県教育委員会の第5次調査により「外堀」が検出される。
- 昭和52年9月19日・20日・30日 福岡県及び太宰府市教育委員会は水城跡の前面及び内側の史跡指定拡張について、地元3地区（国分・水城・吉松）の関係者に対して説明会を行う。
- 昭和53年3月7日 文部省は土壘前面約60mの範囲と土壘西端部の追加指定を告示する。
- 昭和56年5月16日 文部省は土壘西端の取付部分の追加指定を告示する。
- 平成2年8月 太宰府市教育委員会の第17次調査（吉松側）により木樋取水口部分の遺構が検出される。
- 平成3年1月21日・22日 福岡県及び太宰府市教育委員会は、築城内舞台状部から約50mの範囲内（穴堤部を含む）と土壘前面約60mの範囲内及び西端の土壘取付部付近の地域（約8.6ha）の指定拡張について、地元3地区（吉松・国分・水城）の関係者に対して説明会を行う。
- 平成3年2月12日 吉松地区の地権者から前月の指定拡張の説明会に伴う質問状が提出される。
- 平成3年9月25日 福岡県及び太宰府市教育委員会は、国分地区の関係者に対し指定拡張について第2回目の説明会を行う。
- 平成5年9月22日 文部省は指定拡張予定地の一部（穴堤部及び土壘内側の一部）の追加指定を告示する。

指定保存の経緯

水城跡は当初の指定以来、太宰府市市内においては4回の追加指定を経てその保存が図られてきた。そのなかで特に昭和40年代における九州縦貫自動車道が水城を通過する案に対する文化財の保存と景観保全の議論と昭和50年に発掘調査によって「外堀」が検出され水城の構造が一部解明されたことは、それまでの土壘だけではなくその周辺の地域も含めた保存の必要性が認識されることになった。そして、外堀にあたる土壘前面の一部は昭和53年に指定保存された。

この前後、太宰府市は福岡都市圏の住宅都市として急激に都市化が進み水城跡周辺においてもその後、住宅建築が通増した。そのような中、平成2年の開発に伴う緊急発掘調査により木樋取水口部分の遺構が検出されたことを契機として、自然景観保全のためだけではなく、後背地や穴堤部も水城跡という大規模な遺跡の範囲内（基盤）であり遺跡を理解するうえで、又その活用を図るうえで欠かせない部分であり、一体として保存する必要性が再認識されることになった。そこで太宰府市は文化庁及び福岡県教育委員会と協議のうえ現在の保存地域から約50mの幅で追加指定を行うことを地元公表するに至った。しかし、地元の意見は概ね反対の意見が多く、その理由の主なもの「①史跡指定による制約に対する補償的措置として、公有化するに必要な予算が保証されていない。②水城跡を将来どうしたいのか基本的方針が明示されていない。なぜ太宰府市側だけを早急に指定しようとするのか。③なぜ既開発地を含めた広

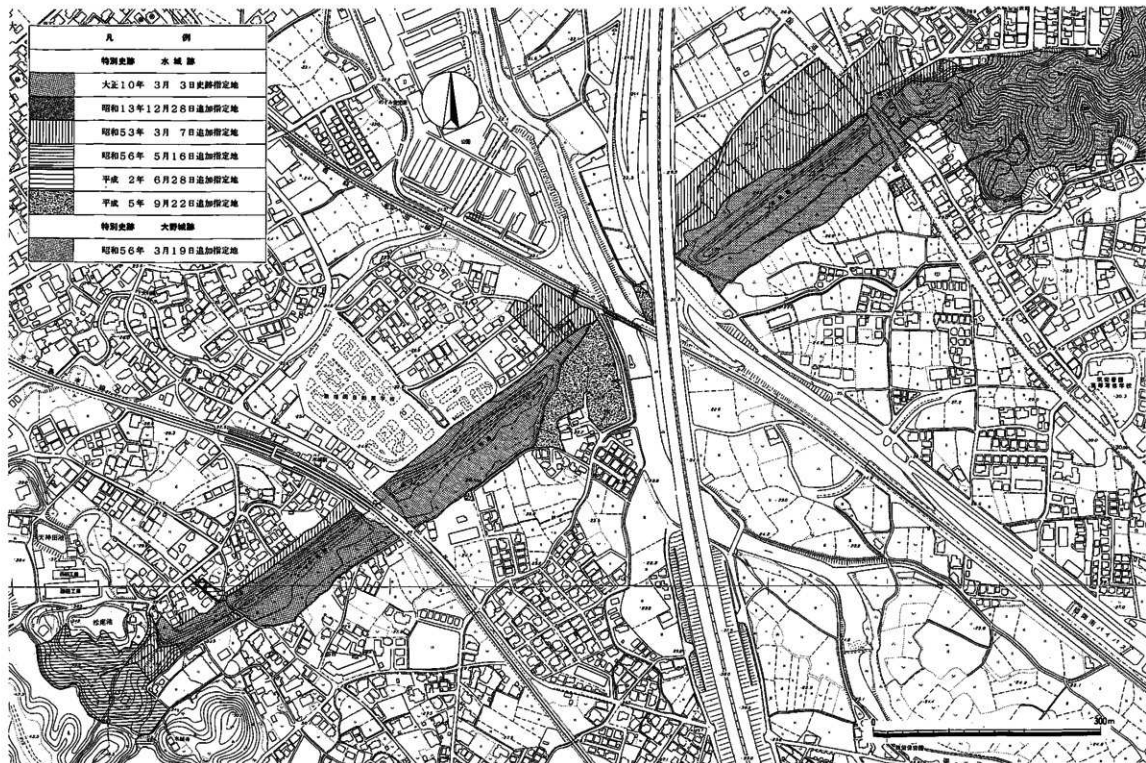


Fig. 113 水城跡史跡指定過程図 (1/5000)

範囲の地域を指定する必要があるのか。既開発地は安定的な土地として取得したものであり、将来に不安を抱く。④地域の発展を阻害するものである。⑤既指定地についても環境整備及びその管理が不十分である。」というものである。特に、追加指定に伴う公有化予算の問題は、所有者の指定同意をはばむ大きな要因となっている。

一方、この間にも所有者から住宅建築等の計画が次々に示された。これに対して、特に欠堤部における開発計画については、当地を保存できなければ現在進めている拡張指定の話も理解が得られなくなるという判断のもとに、指定保存について幾度となく交渉を重ねた。しかし、このような個別的問題を解決しないまま追加指定行為が長期化すれば、ますます所有者の理解が得られなくなることから、今後とも50m幅で指定拡張を進めることを前提として、緊急を要する地域については部分指定を行っていくことについて文化庁も理解を示し、平成5年9月に一部の追加指定が行われた。指定拡張は、今なお多くの疑問をかかえつつ進行中である。

今後の課題点（留意点）

- 1 指定拡張の問題については、前述の地元の反対意見を問題解決の考え方の軸として謙虚に受け止めていく姿勢が必要であろう。追加指定に伴う公有化予算を確保していく必要があり、さらに水城跡歴史公園構想のような将来像を描くことも必要であろう。なお、水城の保存は、都市計画と連動することの必要性も唱えられているところである。
- 2 水城跡は都市空間の流れを遮断するかたちで存するため住民にとっても不便を強いられることも多いので、史跡散策路として出来るかぎり整備する必要がある。特に、御笠川によって分断された東堤と西堤とはすぐ近くであるにもかかわらず大きく迂回しなければならず散策しながら直線的に結べないかと話題になって久しい。
- 3 築堤台状部の端部は大雨により幾度となく毀損しており、また上段土塁についても下草のないところは土砂の流出が危惧される。恒久的な土塁保全のため、土塁の変化を検診する手だてを考え、整備の方法も含めて適切な対応を検討する必要がある。
- 4 土塁上に繁茂する樹木は史跡景観としてあるいは自然景観として市民になじんで久しいが、かつては薪として採伐され成長が抑制されていたであろう樹木も今は大木となり、近年の大型台風によってたおれ、土塁自体が毀損している。今後は、専門家による指導助言を受けて、剪定等の適切な作業が必要となろう。
- 5 水城跡は未解明の部分も多く、保存整備のため学術調査による解明が急がれるところである。また、御笠川河川敷は追加指定予定地には入っていないが、御笠川と水城造営のあり方を考えるうえで重要な地域であり、今後の河川改修などには留意しなければならない。

VI 水城跡出土の鬼面文鬼瓦

1 発見から指定まで

昭和57(1982)年6月10日付けで、本資料は太宰府市教育委員会に寄贈された。寄贈者は、帆足組(代表取締役、帆足吉昭)である。まず始めにこうした行為について感謝申し上げる次第である。

遺物が発見された位置は、太宰府市大字水城1151番地の二級河川御笠川の川底である。出土した具体的な位置は、水城が御笠川によって分断される地点にあたり、水城跡の博多側基底ラインより若干博多方向に下った場所である。瓦の表面の風化状況から推察して、おそらく氾濫

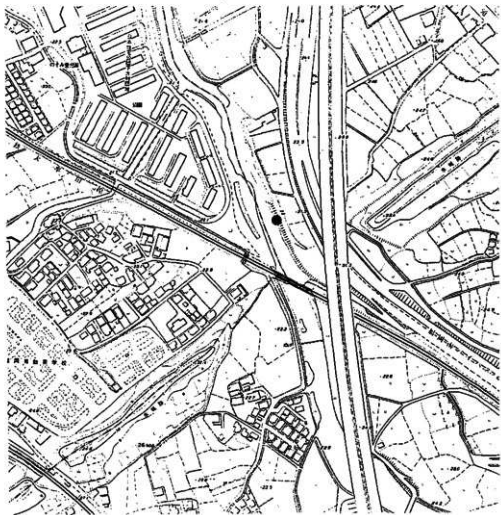


Fig. 114 水城跡鬼瓦出土地点位置図 (1/5000)

原の堆積中からの出土と思われ、御笠川の河川災害復旧工事を請け負っていた帆足組が工事中に偶然発見したものである。記録によれば、発見日は昭和56年6月18日とのことである。

さて、本資料は寄贈を受けたあと、埋蔵文化財保管証を福岡県教育委員会に対して提出し、市が責任をもって保管する由を報告した。その後、昭和58年10月4日に太宰府市教育委員会（教育長 陶山直次郎）から太宰府市文化財専門委員会（会長 大江田安定）に対し市指定文化財化への諮問を行なった。その結果、同年10月13日付けで太宰府市文化財保護条例第4条に基づき市指定有形文化財（考古資料）とする旨、答申があった。諮問内容は次のとおりである。

- ①同種の遺物の出土例はあるが、ほぼ完形のまま出土した例はなく、表面が摩滅してはいるものの、すぐれた芸術的作品ともいうべきもので、大宰府の歴史を物語る貴重な資料である。
- ②特別史跡水城跡付近の御笠川内より出土しており、同遺跡との関連等、大宰府の歴史を解明するうえで重要である。
- ③現在、市が所有保管しており、市の文化財として保存し、市民に公開していくことにより、郷土の歴史への理解と文化財保護普及、活用に効果大である。

これを受けて太宰府市教育委員会では、諸手続きを終えたあと、昭和59年10月8日付けで告示した。その内容は以下のとおりである。

太宰府市教育委員会告示第4号

太宰府市文化財保護条例（昭和54年4月1日条例第11号）第4条第1項の規定に基づき、太宰府市指定文化財第2号として次のように指定告示する。

昭和59年10月8日

太宰府市教育委員会

- | | |
|--------|--|
| 1、指定種別 | 有形文化財（考古資料） |
| 2、名称 | 鬼瓦 |
| 3、員数 | 一個 |
| 4、法量等 | 次章に記載 |
| 5、出土地 | 太宰府市大字水城1151番地（水城跡隣接御笠川内） |
| 6、所在地 | 太宰府市教育委員会 |
| 7、所有者 | 太宰府市 |
| 8、指定理由 | この鬼瓦は、大宰府の歴史上意義が深く、かつ代表的な資料であり、これを保存するという基本方針に基づき指定する。 |

なお、同日付けで原遺跡（原山無量寺跡）出土経筒一式も同様の指定を受けた。この資料の詳細は、後日刊行予定の原遺跡に関する報告書で紹介する予定である。

2 鬼瓦の概要 (Fig.116, Pla.68)

本資料は、大宰府政庁跡出土の鬼面文鬼瓦と同系統のもので、頂部の一部と左下端を失うほかは、ほぼ完存している。

瓦正面に顔面のみを表現し、下顎中央部分と下歯は九瓦にかぶる部分にあたるため大きく抉られていることから表現されていない。歯牙は上下とも表現されるが、摩滅のため下牙は不明瞭である。さらに右（以下に記載する上下左右の用語は、実測図に向かっての上下左右を表す）の下牙は九瓦挿入部の抉り位置がずれたためか一部が不明瞭である。上歯は幅13.5cmの範囲に表現されるが、かなり摩滅しており歯の本数は明確ではない。鼻は高く盛り上がり、その部分での厚さは13.6cmにもなる。鼻孔はわずかな窪みで表現される程度にとどまる。頬もまた大きく盛り上がっているが、右側を欠失しているのが惜しまれる。眉は力強く吊り上がり、目は空豆状に大きく飛び出す。目玉は軽い2条の段で表現されるが、右側は摩滅しているため確認できない。眉間には同心円状にめぐる力瘤が浮き出され、頭部には緩やかな沈線で頭髮が表現される。さらにその左右と両眉の先端には突線で頭髮（鬘）があらわれる。頬の下および大きく開いた口の左右には同様の突線で鬘が表現されている。さらに口の左右（顎）には卷毛（鬚）が表現されていたとみられるが、本資料は摩滅が著しく右側の一部が珠文状になってかすかに認められるほかは確認できない。瓦の周縁部分には珠文帯が巡っているが、そのほとんどすべてに半円形の傷があり、半球形状を損ねている。どうやら范型を抜く際に手を滑らせて、一度瓦面のうえに范型を落としたようである。類似の傷は左側目の下面にも存在する。

眉間中央には、外面で直径2.9cm内外、中央付近で直径2.2cmの穿孔がある。釘による固定が想定される。頂部には鳥袋のあたりとして直径15.0cm程度の半円形で平坦に窪ませた部分がある。下端は九瓦挿入のための抉りがあり、幅17.0cm、高さ9.0cmの歪んだ半円形を呈している。この抉り部分は鋭削りによって仕上げられている。また下端の側面は粗く強い横方向のナデが認められる。

総高49.7cm、現存最大幅40.2cm（下端復原幅約43.5cm）を測り、文様は頬の下面に窮乏な部分があるが、すべて范型からおこしたものと考えられる。ただし、頭部付近の側面については、范から抜き取ることを考えると勾配が逆になっている部分が認められる。文様部分の范と側面は別材でできていた可能性を示唆するものと思われる。なお、范の素材は確認できない。

裏面はかなり粗い仕上げで終わっており、押圧の痕跡で凹凸が著しい。また釘穴は裏方向へ心棒を引き抜いたためか、穿孔部分の周囲がやや盛り上がっている。側面は范型に粘土を押し

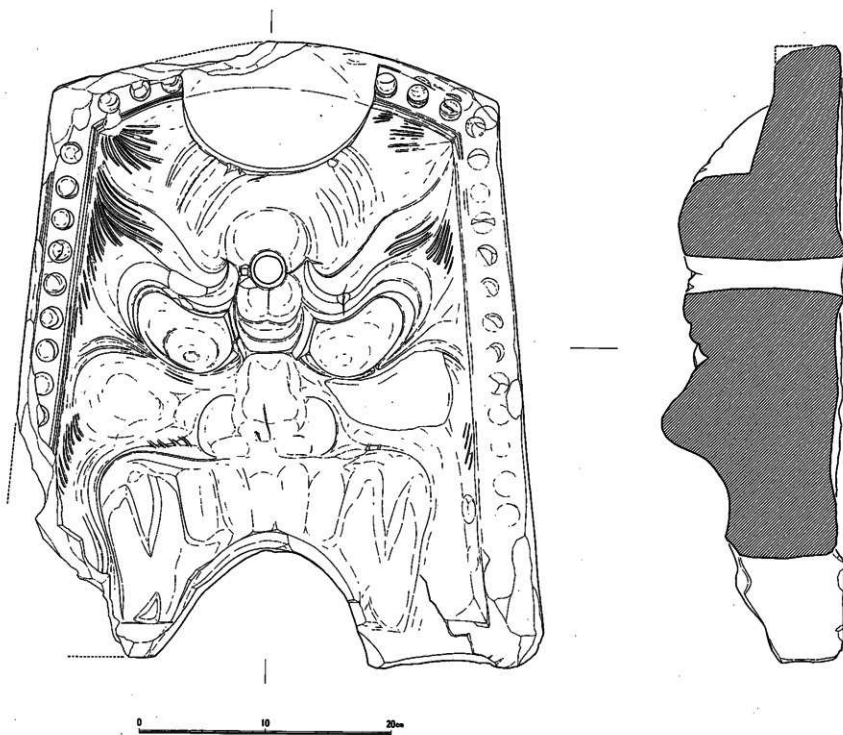


Fig. 115 水城跡出土鬼瓦实测图 (1/3)

つけてのち特に調整を施した形跡は確認されない。粘土塊の接する部分が不規則な沈線としてわずかに確認される。

胎土は大きめの砂粒や白色小斑、黒褐色小粒などを多量に含んだ粗いものである。焼成は表面風化によってあまく見えるが、かなり硬質に焼きしまっている。

なお、風化の度合いは鼻から下及び右半分に顕著であり、特に口部右側はほとんどが摩滅によって消滅している。

3 他の例と比較して

大宰府関連遺跡から出土している同系の鬼面文鬼瓦と比較するといくつかのことが判明した。比較した資料は大野城跡出土の2例である。他の資料はほとんどの部分が復原されたもので、比較の材料としては好ましくない。

さて、問題となるのは上歯の部分である。本資料では上歯の本数は確定できない状況であるが、上歯全体の幅は大野城跡例と同数値を得ており、かすかな痕跡として残る段が何らかの痕跡と考えられた。写真や実測図ではその段による稜線の関係から5本歯に復原できるようにみえるが、資料を比較するとその段状に残る部分は、歯自体の盛り上がり部分に相当していると思われることから、本資料も6本に復原して差し支えないと思われる。

眉間に存在する穿孔部分の比較では、穿孔の角度や法量に個体差があるところから、棒状のものは范に固定されていたのではなく、別造したものを直接范に押し当て、粘土を詰めていったものとみられる。完成後（焼成前）引き抜いたのであろう。

下顎を挟む丸瓦挿入部分は、瓦の側面としては唯一削り調整の施される部分で、大野城跡例も同様である。したがって個体によって微妙にその形状が異なっている。これはすべての個体で手を加える必要があったことを示しており、范自体が挟まれた形状を呈していなかったか、あるいはこれよりもやや小さめの挟りであったことが想定される。もちろんこの挟む範囲を特定するために何らかの目印は存在していたとみられ、上歯の下にみられる半円形の隆起部分がそれに相当するのではないかと考えられる。

また、大野城跡例では瓦当面に粘土を押し込んでいった痕跡が随所に確認されるのに対し、本資料ではそれが側面のみ確認される程度である。本資料がかなり丁寧に作られたのであろうか。

データの得られた部分で、主として細部を比較してゆくとほとんどすべての部分で同数値または近似値を得ることができた。范傷等の一致は確認できていないが大野城跡出土の2例と本資料は、おそらく同范と考えられる。

4 製作年代など

大宰府出土の鬼面文鬼瓦については、これまで7世紀末から8世紀初頭の年代が与えられていた。しかし、平城宮、平城京内寺院（南都七大寺）、大宰府の鬼面文鬼瓦を検討した毛利光俊彦は、都城整備の一環として平城宮、大宰府で鬼面文鬼瓦が採用され、発展していったものと考え、その開始期を和銅年間（708～714）とみている¹⁾。

大宰府政庁が本格的な瓦葺建物として出現したのが政庁の第II期とされる時期であり、この創建の年代が問題となるところである。これまでの調査の所見では、政庁第II期建物が鴻臚館式軒瓦を主体的に採用する点で、この瓦が和銅年間を遡らないと考えられる²⁾ことから、創建の年代をこのころに置くことが考えられている。また、南門及び中門から出土した鎮壇の土器はやはり8世紀前半の資料である。その他、後殿地区整地層から出土した木簡に「竺志前」の記載があり、筑紫国が前後に分割されたのが690年頃でこれを遡らず、和銅年中の前半を下限³⁾とすると考えられていることから、政庁周辺の整地の時期の一端が窺える。このように考古学的資料では政庁第II期の開始をおおむね8世紀第I四半期⁴⁾と考えられているといえる。

このことから、本資料が大宰府跡出土例と仮に同范であるならば、やはり毛利光の指摘するように和銅年間頃を考えるのが妥当ではなからうか。

ちなみに、大宰府系鬼瓦の上方に作られる鳥衾のあたりとみられる窪みであるが、その法量からうまく収まる瓦を拾い上げると、鴻臚館式軒九瓦がほぼぴったりと当て嵌まる。観音寺で用いられる老司式軒九瓦では直径が大きすぎてうまく収まらない。当時、実際にはどのように軒九瓦を置いていたのかは知る術がないが、同時期の平城宮所用の鬼瓦にはこのような鳥衾を意識した部分はなく、それは鬼瓦自体が大宰府例よりも彫りが浅いことに起因する可能性がある。これに対して大宰府例は彫りも深く、鳥衾（軒九瓦）を固定する意味からもこのような施設を必要としたのではなからうか。したがってここに九瓦が収まることを最初から意識して設定したと考えると差し支えないものと思われる。ただし、鬼瓦面よりも前方に大きく突き出して九瓦を設置するとした場合（この場合、窪みは当初から必要ないと思われる）や、特定の鳥衾が存在していたならばこの限りではない。

このように鴻臚館式軒九瓦と組み合わせると言えるならば、やはりその年代は和銅年間に置くべきではなからうか。なお、ここで比較した大野城跡2例の出土地点は太宰府口城門跡から出土したもので、同時に鴻臚館式軒九瓦が出土している点も注目される⁵⁾。

さて、本資料の出土地点について簡単にコメントしておきたい。出土位置が水城跡の中間地点で、この場所はこれまで建造物の存在を想定されている地点ではなく、どこに用いられたか明確ではない。しかし、摩滅が部分的であることからそれほど遠くから流れついたものとは考えられず、この出土位置を重視するならば、今見る水城跡の御笠川による切れ目部分（当初は今よりもっと狭かったと考えられる）にも何らかの施設が存在していたことを想定する必要が出てこよう。

水城跡で確認される切れ目はこの他に西門、東門の推定位置がある。この位置には律令期の官道が敷設されており、西側の官道の整備が8世紀前半と考えられるところから、おそらくこのころに水城自体にもなんらかの手が加えられた可能性を想定することができる。鬼瓦の発見はそのことを物語っているのではなかろうか。

最後になったが、大野城跡出土資料との比較に際して九州歴史資料館の栗原和彦調査課長のお手を煩わせた。記して感謝いたします。

註)

1、毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦—8世紀を中心として—」【研究論集VI】(奈良国立文化財研究所学報 第38冊) 1980

2、高橋章「鴻臚館系瓦の様相」【大宰府古文化論叢】下巻 1983

3、倉住靖彦「大宰府出土の木簡」【西日本文化】103 1974

4、横田賢次郎「大宰府政庁の変遷について」【大宰府古文化論叢】上巻 1983

他に文献資料では『領聚国史』に「大宰府城門災」の記事が723年にみられ、この段階である程度の建物は建築されていたと思われる。筆者はこれらの史資料から710年頃～723年の間に第II期政庁がある程度使用可能な状況になっていたと考え、別の要因を加えて715年～717年頃に完成したのではないかと考えているが、私見のため今回は本文から外した。拙稿「大宰府の造営」【古文化論叢】31号 1993。

5、横田義章【特別史跡 大野城跡VII 太宰府口城門跡発掘調査概報】1991 福岡県教育委員会

別表1 出土遺物一覧表

凡例

- ・1)の中の数字は確計数を示す。
- ・②=2個体 ③=同一個体2片 (= [i]個体) (3)=個個体3片
- ・N×VはN,またはV個の意。
- ・N~VはN, V, V初期のうちどれかの意。
- ・前期分組は「大塚村東坊跡」1983年大塚村史教育委員会の方針に基づく。
- ・古墳時代の期名については、小田富土器式の編年に基づく。
- ・「宮ノ本遺跡」1992年

試掘 18-127

須臾器	環a(2), 葉, 高坪(1), 壺(1)
土師器	埴×陶c(1), 片(4) 平安~

試掘 18-163

須臾器	壺(1)
瓦質土器	壺12c中?
輸入陶器	朝鮮瓦輪陶器? 壺
瓦	平(格子)
肥前系陶器	環
肥前系陶器	壺11, 小瓶

水城11次

瓦質土器	片
瓦	平(横(1)), 埴(3), 片

水城12次

須臾器	蓋3(1), 埴a(1), 埴c(1), 葉
土師器	高坪, 鉢, 壺, 壺(布留)
黒色土器A	小瓶(1)
瓦	平(横(1), 斜格子(1))

茶色砂土

須臾器	壺, 環
土師器	片

灰色砂土

須臾器	壺3, 埴, 葉
土師器	蓋(古墳前期), 埴c, 埴a
瓦	陶器密系 片(1)
白磁	片(1)
弥生土器	壺(中腹), 葉(中腹)
瓦	片

125X001

須臾器	片
土師器	壺
弥生土器	正口壺(中腹)
石製品	スタレイバー(灰山岩)1, 黒曜石(2)

水城13次

須臾器	壺3, 埴
土師器	小瓶a(赤)
白磁	片(1)
土師質土器	七輪サン(3)
須臾質土器	鉢(原形)1(1)
陶器陶器	刻線; 筒形(1)
陶器陶器	その他; 花籃?(1), 片(7)
肥前系陶器	壺付; 埴(1), 片(6)
瓦	平(斜格子), 片

水田原放遺

須臾器	壺
土師器	片
陶器陶器	その他小物; 片(網支手)1(1)
肥前系陶器	壺付; 片(2)
瓦	平

灰色砂土

須臾器	壺, 壺
土師器	片
青磁	須臾系 壺1 1-27(1) 同須臾系 壺 1-18(1) 同須臾系 壺 1-a(1)
白磁	埴 11(1), VI×VII(1), 片(1) 17(1)
陶器陶器	筒筒; 片(1) その他; 埴(1), 網支手(1), 片(1)
肥前系陶器	壺付; 片(2)
瓦	平(斜格子), 片
金銀銅器	不明鉄製品(1)

灰色砂土

須臾器	蓋c, 片
土師器	埴(赤), 埴片
青磁	須臾系 壺 1-5a(1) 同須臾系 壺 1
白磁	1 本山(平手のみ)1(1), 片(1)
陶器陶器	片
弥生土器	片
瓦	平(横, 片)
石製品	土塊(1)

茶色砂土

弥生土器	壺, 高坪(1)
------	----------

灰色砂土

須臾器	埴片?
弥生土器	壺片(1), 正口壺(1), 高坪(1)
石製品	フレーク(安山岩)1(1)

125D001

弥生土器	壺(1), 壺(中腹)1(1)
------	-----------------

水城14次

白磁	壺 V-1(1)
----	------------

土土

須臾器	壺, 埴c, 蓋3
土師器	埴c, 高坪, 片
黒色土器A	小瓶
瓦	平(横), 瓦
石製品	複製陶片(黒燐石)1(1)

白灰色砂土

須臾器	壺1
瓦	平(横(1))
石製品	割片(黒燐石)1(1)

145D001 茶白色砂土層

須臾器	埴(古墳), 壺2(1), 壺c(1), 壺1, 埴c(1), 埴a(1), 葉
土師器	壺, 片
瓦	平, 瓦1横(1))
石製品	石籠(安山岩)1(1), 安山岩片(1)

145D001 茶白色砂土層

須臾器	埴c(1)
土師器	片

145D001 黒灰色砂土

須臾器	壺(2)
水製品	用途不明加工品(10), 杖(1), 杖7(1)

145D001 灰白色砂土

須臾器	壺1, 埴壺(小田原-B)1(1)
土師器	壺(布留)
水製品	用途不明加工品(18), 杖(2)

145D001 明色砂土

須臾器	壺(12), 埴壺(小田原-B)1(1)
土師器	壺
水製品	用途不明加工品(34), 割7(1), 磨盤(1), 杖(1), 杖7(1)

水城15-2次

4トレンナ産土
国産陶器 その他(小物)：大甕(2)
肥前系陶磁器 染付：罌口(1)

4トレンナ白磁砂

須臾器 壺

4トレンナ茶色砂

土師器 片

6トレンナ産土

須臾器 坏c、甕c
瓦 瓶 平(横?)

水城16次

須臾器 坏a(1)、坏c(3)、甕a(2)
土師器 耳(高)(1)、片
土師貫土器 七輪片(6)、大甕(1)
国産陶器 密結陶輪：瓶(2)、片口(1)、片(2) 磁輪：鉢(5)、甕鉢(3)、甕(5)、片(10) 磁胎：鉄(横毛手)(3)、小瓶(2)、鉢(3)、皿(4)、才飯(4) 甕(2)、甕鉢(3)、榎木鉢(1)、片(13) その他：片(2)
肥前系陶磁器 染付：丸瓶大(1)(8)、丸瓶小(6)、大瓶(9)、小瓶(9)、 鉢(1)、蓋ね鉢(1)、甕鉢(3)、片(11) プリント染付：小瓶(1) 色染付：甕(3) 白磁：甕(4)、軒皿(1)
瓦 瓶 平(横)(1)、軒筒子(2)、丸、軒平(1)、埴(2)
金銀製品 磁引

黒灰色土

須臾器 甕(1)、坏(2)、坏c(1)、壺(1)
土師器 壺(1)
土師貫土器 七輪(1)、火鉢(3)、甕鉢(1)
瓦貫土器 火鉢(1)、片(1)
国産陶器 磁輪：鉢(1)、片(7) 磁胎：瓶(2)、鉄(横毛手)(1)、小瓶(1)、片(1) 染付：丸瓶大(3)、皿(1)、片(6) プリント染付：甕(2) 色染付：大甕(1)、小瓶(1) 白磁：片(1)
瓦 瓶 平(横、片)、丸、埴(3)、蓋ね平片、片(1)
石 製品 磁石?(1)

茶褐色土

須臾器 坏c(2)、甕a(1)、壺、坏a
土師貫土器 火鉢?
国産陶器 磁胎：畑鉢(1)
瓦 瓶 平(横)、丸(横)、埴(2)、軒丸(通懸間)(1)、蓋ね平片

165D001 暗灰色粘土

土師貫土器 大甕(1)
国産陶器 磁輪：畑鉢(3)、指分手付木法(1) 磁胎：瓶(1)、甕(1) 染付：広耳瓶(1)、丸瓶大(2)、小甕(1)、方皿(1)、鉢(1) 肥前系陶磁器 白磁：甕(2)
瓦 瓶 平(横、片)、丸、片、蓋ね丸片(1)

165D001

須臾器 甕(1)、皿a(1)、鉢(1)、片(1)
土師器 壺(1)、片(4)
土師貫土器 片(7)
瓦貫土器 片(1)
国産陶器 磁輪：畑鉢(6)、壺(1) 磁胎：鉢(3)、大甕?(2)、片(10) 磁胎：茶白(1) 染付：丸瓶大(1)(3)、大甕(5)、方皿(1)、鉢(3)、蓋ね鉢(1) 片(15) プリント染付：畑鉢(2) 色染付：甕(1) 白磁：片(1)
瓦 瓶 平(横)、丸(横)、埴(5)、片
金銀製品 貨幣
その他 磁

165X003

須臾器 片
土師器 片
瓦 瓶 丸

165X004

国産陶器 磁輪：甕(1)

165X005

土師器 片
土師貫土器 大甕(1)
国産陶器 片
瓦 瓶 平

165X006

瓦貫土器 火鉢
国産陶器 磁輪：甕(腹部に華孔あり)(1) 磁胎：甕(2)(横毛手)
瓦 瓶 茶(横、片)、片
土 製品 瓦玉(1)

165X007

須臾器 片?
瓦 瓶 片

165X009

須臾器 片
土師器 片
瓦 瓶 片

165X010

須臾器 片
土師器 杯
瓦貫土器 火鉢
国産陶器 磁胎：壺?(1)
瓦 瓶 平(横)

165X011

須臾器 片
土師器 片
瓦 瓶 片

165X012

須臾器 片
瓦 瓶 片

165X013

須臾器 壺
土師器 片
瓦 瓶 片

165X014

須臾器 片

165X015

国産陶器 磁胎：鉢?(1)
瓦 瓶 平(横)

165X016

土師器 坏a(1)、坏c

165X017

須臾器 片
瓦 瓶 平(横)

165X018

須臾器 壺
土師器 埴b(1)
瓦 瓶 平(横)

165X019

土師器 片
瓦 瓶 片

165X020

土師器 片
国産陶器 磁胎：甕?(1)
瓦 瓶 平(横)、丸、片

16SX021
瓦 類 字(横、片)、片

16SX022
土 師 器 片
瓦 類 片

16SX023
土 師 器 鉢
肥前系陶磁器 染付；刷(1)
瓦 類 字(横、片)、丸、片

16SX024
須 恵 器 片
土 師 器 小皿
瓦 類 字(横、片)、丸、片

16SX025 上冊
土 師 器 片
瓦 類 字(横、片)、丸、片

16SX025 下冊
須 恵 器 藥
土 師 器 片
瓦 類 字(割捨了(1)、横(1)、片)

16SX026
瓦 類 字(横)、片

16SX027
瓦 類 片

16SX028
土 師 器 鉢(1)
瓦 類 片

16SX029
土 師 器 片
瓦 類 字(割捨了(1))

16SX031
瓦 類 片

16SX032
須 恵 器 片
土 師 器 皿？(赤)
瓦 類 字(横)、片

16SX033
土 師 器 小皿(赤)、片
瓦 類 字(横)、片

16SX034
瓦 類 丸(横)、片

16SX036
土 師 器 片
瓦 類 片

水城17次

17-1次表土
須 恵 器 藥、環c
土 師 器 字×黒片、横c
須 恵 系土器 鉢(茶黒系)(1)
須 恵 系陶器 陶輪；割鉢(2)、鉢(3)、土器(2)、歩口(1)、片(6)
肥前系陶磁器 染付；丸(横)(2)、大皿(2)、小皿(4)、どんぶり皿(1)、片(4)
白繪；刷(1)
弥生土器 片(1)
瓦 類 瓦葺瓦片(1)、片(2)
産 物 品 磁器品

17-2次表土
須 恵 器 藥、環(小田田・B)
肥前系陶磁器 染付；刷
瓦 類 群字(1)

唐土

須 恵 器 高坪(古墳)、蓋c、環c(1)、鉢b、坪
土 師 器 鉢c、字×黒
骨 磁 須 恵 系 藥 1.5m(1)
片(1)
瓦 類 片

暗灰色粘土

須 恵 器 藥、環c(1)
土 師 器 片
木 製 品 用途不明加工品(3)、膠粉材(1)

17SX001A

須 恵 器 藥、環×黒瓦(1)
土 師 器 藥(3)
木 製 品 木片

17SX001A 住次b

土 師 器 藥(1)
木 製 品 用途不明加工品(6)

17SX001B

須 恵 器 藥
土 師 器 片
弥生土器 藥
木 製 品 用途不明加工品(13)、彫行(1)、杖(2)、柄杓(2)、器持把手(1)
杖(1)、枕木(1)
石 製 品 スタレイパー(灰山岩)(1)

17SX001B 下冊

須 恵 器 藥(1)、環c(群用銀)(1)

17SX005A

須 恵 系土器 鉢(茶黒系)(1)
瓦 類 片

17SD010

須 恵 器 藥、坪(1)
土 師 器 鉢(古墳?)
石 製 品 石輪(忌部谷)(1)

17SX011

須 恵 器 藥
土 師 器 片

17SD012 上冊

須 恵 器 環(小田田)、蓋(2)、環×字×c(5)、環a(1)、皿a(1)
土 師 器 鉢c、藥
瓦 類 字(横目印き)(2)、丸、群字(1)
石 製 品 スタレイパー(安山岩)、安山岩片(1)

17SD012

須 恵 器 中身a(6)、環c(10)、長柄皿(1)、蓋(4)、蓋、蓋(2)、高坪(1)
蓋(2)、蓋(1)、蓋(2)(1)、高坪(1)
土 師 器 藥、鉢(1)
瓦 類 片
石 製 品 石輪(安山岩)、割片(黒曜石)(2)
土 製 品 土塊(スサノ)

17SX013A

須 恵 器 藥
土 師 器 片

17SX013B

土 師 器 藥(古墳)
石 製 品 黒曜石片(1)

17SD012 下冊

須 恵 器 藥、環c(1)
土 師 器 片
瓦 類 片

本城18次
表 意 1

須 恵 器	環c(13)、環a(15)、環a(5)、環a(1)、環(1)、環(1)、環(12) 片(15)、環×環(1)
土 師 器	環(12)、環b(3)、環c(1)、環c(1)、把平(1)、小環a(赤)(1) 環(1)、片(5)
青 磁	環a(1) Ⅷ(1)
白 磁	環a(1) Ⅷ(1)
土師貫土器	七輪、火鉢、火消釜蓋、袖らく、植木鉢、鉢
瓦 質 土 器	火鉢、火消釜蓋、火鉢
定年土器	環(1)
瓦 類	平(筒指子)(4)、溝、平行印、縄文平行、片(1)、埴(7) 丸(1)、釘平(2)、丸(繩、片)、丸瓦(1)、雙斗瓦(1)、片
金属製品	貨幣(1)、釘(3)、不明(1)
石 製 品	砥石(1)、石磨(2)、おはじき(1)、環(天草石)、石臼(2)
その他	ビー玉(1)

灰色粘土

須 恵 器	環、環a(1)、環c(1)、環c(1)、小環(1)、環c(2)、環、環×環 環(2)、環a(1)、環(1)、環、小環a(1)、片
土 師 器	環、環c(2)、環a(1)、環、把平?(1)、片 板指環(4)
瓦 類	平(筒指子)(2)、片(1)、丸(繩、片)、埴(2)、片
石 製 品	砥石(1)

18SX001

青 磁	環a(環系)Ⅷ(1)
土師貫土器	環(1)
瓦 質 土 器	火鉢(1)
須 恵 陶 器	黄緑磁輪; 片L(1)、巻物(1)、片(2) 陶輪; 把平(1)、片(2) 磁輪; 把平(1)、土盤(1)、土鏡蓋(1) 磁輪; 丸繩(赤)(10)、丸繩(小)(5)、藍片輪(9)、藍(2)、片(22) 小皿(1)(5)、大皿(5)
肥前系陶磁器	プリント染付; 雲ね鉢(3) 色染付; 丸繩(小)(5)、磁利(1)、香鉢(1) 白磁; 方小皿(2)、片(5)

18SX002

須 恵 器	環c、片
土 師 器	環
土師貫土器	七輪(4)、七輪サシ(6)、鉢(2)、片(10)
瓦 質 土 器	火鉢(4)
須 恵 質 土 器	鉢(須恵系)(1)
国産陶器	黄緑磁輪; 鉢(1) 陶輪; 環(5)、環鉢(4)、鉢(御毛手)(1)、土盤(1) 磁輪; 磁(1)
肥前系陶磁器	染付; 丸繩(大)(1)、丸繩(小)(2)、丸繩(3)、筒茶碗(1)、片(8) 小皿(2)、大皿(1)、鉢(1)、小皿(板指型)(1)、磨料(2)
肥前系陶磁器	プリント染付; 小皿(2)、小皿(1)、磁利(1) 色染付; 陶(1) 白磁; 雙乳(2)
瓦 類	平(繩、片)、丸、片、近世瓦片
金属製品	釘(1)
石 製 品	滑石碗(2)

18SX003

須 恵 器	環c、環3、環、環a、環
白 磁	環(1) Ⅷ(1)
土師貫土器	七輪サシ(6)、七輪片(2)、片(10)
瓦 質 土 器	火鉢(2)、片(1)
国産陶器	黄緑磁輪; 片口(1)、片(1)、 陶輪; 鉢(2)、環鉢(4) 磁輪; 陶(7)、植木鉢(1)、片(3) 無輪; 陶(1)?
肥前系陶磁器	染付; 広葉輪(2)、丸繩(大)(1)、丸繩(小)(1)、丸繩(1)、片(8) 小皿(1)、磁利(2)、小皿(1)、方皿(1)、大皿(1)、 環口(2) プリント染付; 小皿(1)、磁利(1) 色染付; 陶(2)、小皿(2)、小皿(1)、片(1) 白磁; 陶(3)
瓦 類	瓦葺葺平(1)、平(繩、筒指子)(2)、穂子小(1)、片(1)、丸(1) 片
金属製品	刀子(1)、釘(2)
土 製 品	土塊

18SX004

土 師 器	高坪(1)
土師貫土器	七輪サシ(1)、片(2)
国産陶器	陶輪; 土盤(1)、片(2) 瓦葺(片)(1)
肥前系陶磁器	染付; 丸繩(大)(1)、丸繩(小)(1) プリント染付; 雲ね鉢(1) 白磁; 片(3)
瓦 類	平(繩、片)、丸、片、近世瓦片

18SX005

須 恵 器	環
土 師 器	環a(環系)(1)
土師貫土器	七輪サシ(1)、片(2)
国産陶器	黄緑磁輪; 片(1) 陶輪; 環(1)、土盤(1)、土鏡蓋(御毛手)(1)
定年土器	環(1)
瓦 類	平(繩、片)、丸(繩、片)、近世瓦片、片

18SD006

土師貫土器	七輪サシ(方形)(1)、片(1)
国産陶器	陶輪; 雲×磨利(御毛手)(1) 無輪; 片(1)
肥前系陶磁器	染付; 雲ね鉢(1)、小皿(1)、片(1)
瓦 類	平(筒指子)(1)、片(1)、丸、繩、近世瓦片

18SD007

国産陶器	黄緑磁輪; 片口(4)、環(1)
肥前系陶磁器	プリント染付; 片(1) 色染付; 片(1) 白磁; 磁利(1)、磁利(1)
瓦 類	平、近世瓦片

18SD008

須 恵 器	環c、環a、環、環a(環系)、片
土 師 器	環c、小環a(赤)(1)、片
土師貫土器	七輪サシ(1)、七輪片(2)、鉢(1)、片(7)、人形?(1)
瓦 質 土 器	片(5)
国産陶器	黄緑磁輪; 鉢(5) 陶輪; 環(2)、環鉢(2)、環(6) 磁輪; 御毛手(1)、鉢(1)、打丸(1)、巻物(雷)(?) 土盤(1)、土鏡(1)、片(9)
肥前系陶磁器	染付; 丸繩(大)(2)(5)、丸繩(小)(3)(6)、筒茶碗(2)、方皿(3) 小皿(1)(4)、蓋茶碗(1)(4)、鉢(1)、磁利(3)、片(19) プリント染付; 雲ね鉢(1) 色染付; 花磁(1) 白磁; 方小皿(2)、片(11)
瓦 類	平(繩、片)、丸(筒指子)(2)、繩、片、片、近世瓦片
金属製品	釘

18SD009

土師貫土器	七輪(1)(2)
国産陶器	陶輪; 環鉢(1)
瓦 類	瓦葺瓦

18SX010a

瓦 類	平(繩)(2)
-----	---------

18SX010b

瓦 類	平(繩)(1) (18SX010aと混合)
-----	-----------------------

18SX011

土師貫土器	七輪サシ(1)
国産陶器	黄緑磁輪; 環(1)
瓦 類	平(繩)、近世瓦

18SX012

肥前系陶磁器	染付; 広葉輪(1)
瓦 類	平(繩)

18SX013

須 恵 器	環c、環
土 師 器	環
肥前系陶磁器	染付; 花磁(1)
瓦 類	平(繩、片)、片

18SD014
須臾器 片
土師器 片
土師貫土器 片(6)
須臾陶器 須臾(2)、須臾(1)、土管(1)
肥前系陶器群 須臾；丸輪(大)(2)
肥前系陶器群 色須布；丸(3)
瓦 類 平(横、片)、丸、片
土 製 品 管状土器(1)
18SX015
肥前系陶器群 プリント染付；彫刻(1)
瓦 類 平(横)(2)

18SX016
須臾器 須臾、杯c、器c、杯a、須臾形(1)、片
土師器 杯、壺
土師貫土器 片(1)
須臾土器 片(1)
須臾陶器 須臾；壺(3)
肥前系陶器群 須臾；彫刻(1)
肥前系陶器群 プリント染付；小皿(1)、碗(1)、須臾(1)
肥前系陶器群 色須布；須臾(1)
白磁；片(2)
弥生土器 片？(3)
縄文土器 片？(1)
瓦 類 平(横、片)、丸(横、片)、片、埴(3)、近世瓦片

18SX017
土師器 須臾形(2)
瓦 類 平(横、片)

18SD018
須臾器 須臾(1)、器×皿(1)
土師器 埴(1)
瓦 類 平(横、片)、埴(2)

18SX019
須臾陶器 須臾；片(1)
瓦 類 平、丸、近世瓦片

18SX020
須臾器 器×皿(1)
瓦 類 平(横)(2)、片

18SX021
土師器 片(1)
瓦 類 平

水城21次
弥生
須臾器 杯c、壺
瓦 類 平(横)

21SX001
土師器 片(1)

21SX002
須臾器 壺
土師器 片

21SX004
須臾器 鉢b(1)
土師器 瓶c(1)
須臾土器A 瓶c(1)
瓦 類 平(須臾子(1)、丸)

21SX005
土師器 瓶c(1)
瓦 類 平(横)(2)、須臾子、片(1)、片(1)
石 製 品 石鉢(加礫石)(1)

21SX006
瓦 類 平(1)

21SX007
弥生土器 片？

21SX008
土師器 片
瓦 類 平(横)(2)、丸

21SX009
須臾器 埴(小田原・B)
土師器 瓶c

21SX011
土師器 埴a

21SX012
須臾器 壺？
土師器 片

21SX013
土師器 瓶c(1)
瓦 類 平
土 製 品 瓦葺(1)

21SX014
須臾器 壺
土師器 瓶c(1)
瓦 類 片

21SX016
土 製 品 瓦葺(1)

21SX017
土師器 壺
瓦 類 平(須臾子(2))

21SX018
瓦 類 片

21SX019
須臾器 埴壺c(1)

水城22次
弥生末土
須臾器 壺3、鉢？、壺
土師器 支脚
弥生土器 壺(須臾)(2)
瓦 類 平(横)(2)、須臾子(1)、須臾子(1)、新平(壺形？)(1)
土 製 品 須臾子(1)

東区弥生土
須臾器 壺
須臾陶器 須臾；須臾(1)
須臾陶器 小物；土瓶(2)、片(1)
肥前系陶器群 須臾；小皿(4)、鉢(2)、小瓶(1)
肥前系陶器群 プリント染付；大皿(1)
白磁；壺形(1)、小皿(1)
瓦 類 平(横、須臾子)

22SD001 須臾系弥生土
須臾器 壺、出耳
弥生土器 壺、片(1)
瓦 類 平(横)(4)、丸(壺)(1)、瓦葺(1)
土 製 品 メンコ(弥生)

22SD001 淡路系色絵土
須臾器 須臾(？)、片
須臾土器 片
瓦 類 丸(1)、近世平瓦葺(1)
土 製 品 須臾片(加礫石)(1)

水城25次
No.19 白色絵土ブロック
須臾器 壺(2)

No.19 淡路系色絵土
縄文土器 須臾鉢(6)

別表2 土器の計測表

A.番号 B.扉開番号 C.内底のナゲの有無 D.板状底の有無
 類・領器器 土・土器器 器・黒土土器 単位cm

12 灰褐色粘土

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
器A 小甕	1	2	12.4	4.0+	—	—	—
器B 杯c	2	1	—	2.3+	7.6	—	—

14 SD 001 褐色砂土層

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
器A 杯a	1	2	—	2.0+	10.8	○?	—
器B 杯c	2	1	—	2.0+	—	○	—
器C 杯c	3	2	—	3.3+	8.4	○?	—

14 SD 001 赤色砂土層

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
器A 杯a	1	4	13.0	4.1	9.3	—	—

14 SD 001 明褐色砂

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
器A 杯a	1	6	14.2	3.3+	—	—	—

16 黄土

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
器A 杯a	1	4	—	2.3+	8.7	—	—
器B 杯c	2	3	—	1.9+	8.5	○	—
器C 杯c	3	2	—	3.1+	9.3	—	—
器D 杯c	4	5	—	2.4+	8.1	○	X
器E 杯c	5	1	—	1.4+	15.1	○	—
器F 杯c	6	6	—	0.8+	5.1	?	X

16 SX 016

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
器A 杯a	1	32	—	1.2+	5.8	?	?

16 SX 018

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
器A 杯a(赤)	1	33	—	1.7+	4.6	X	X

17 黄土

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
器A 中杯c	1	18	13.0	3.3	8.2	○	—

17 SX 001A・B

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
器A 杯c	1	1	—	—	9.4	—	—

17 褐色粘土

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
器A 杯c	1	3	—	—	9.4	—	—

17 SD 010

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
器A 杯a	1	4	12.6/10.8	3.2	—	○	—

17 SD 012

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
器A 中杯c	1	9	12.7	3.0	8.5	○	—
器B 杯c	2	13	14.4	4.0	10.8	○	—
器C 杯c	3	15	—	—	9.4	○	—
器D 杯c	4	18	—	—	9.6	—	—
器E 杯c	5	16	—	—	10.9	○	—

17 SD 017上層

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
器A 中杯c	1	11	12.0	3.5	9.2	○	—
器B 杯c	2	12	—	—	7.2	○	—
器C 杯c	3	10	13.8	3.5	9.7	—	—

17 SD 017中層

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
器A 中杯c	1	17	—	—	9.2	○	—

18 黄土

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
器A 杯a	1	36	17.2	3.1+	—	—	—
器B 杯c	2	33	—	2.2+	—	—	—
器C 杯a	3	29	17.4	2.2	14.1	—	—
器D 杯c	4	30	14.4	1.8	11.4	○?	—
器E 杯c	5	28	18.0	1.6	14.3	—	—
器F 杯c	6	24	—	3.6+	10.4	○?	—
器G 杯c	7	25	—	2.1+	15.0	○?	—
器H 杯c	8	19	14.4	2.0	—	X	—
器I 杯c	9	20	14.6	1.7	—	○	—
器J 杯c	10	—	—	2.5+	—	○	—
器K 杯c	11	27	—	1.3+	—	X	—
器L 杯c	12	26	18.4	2.0+	—	—	—
器M 杯c	13	23	—	1.2+	6.6	○	X
器N 杯c	14	23	—	1.1+	8.4	○	X
器O 杯c	15	22	—	2.2+	6.9	○	X

18 褐色粘土

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
器A 杯c	1	7	—	1.6+	7.5	○	—
器B 杯a	2	10	—	3.3+	9.8	○	○
器C 杯c	3	8	—	1.9+	7.3	○	—
器D 杯c	4	9	13.0	2.9+	—	—	—
器E 杯a	5	11	18.2	1.6	14.8	—	—
器F 杯c	6	6	18.6	1.6+	—	—	—
器G 杯c	7	5	18.2	1.8+	—	○	—
器H 杯c	8	4	18.2	1.7+	—	○	—
器I 小甕a	9	15	12.0	2.6+	—	—	—
器J 杯a	10	13	13.3	2.7+	—	—	—
器K 小甕	11	14	—	4.5+	6.3	—	—
器L 杯a	12	12	18.5	2.3	14.5	—	—

18 SD 006

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
器A 小甕a(赤)	1	34	6.6	0.8	5.8	X	X

21 SX 004

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
器A 杯c	1	2	—	—	7.8	—	—
器B 杯c	2	3	—	—	7.6	—	—
器C 杯c	3	1	—	—	14.6	○	X

別表3

チップ材計測表

単位:cm

14SD 001 明茶色砂岩

番号	図取番号	長	幅	厚
1	1	18.70	8.90	1.60
2	2	18.40	8.10	1.60
3	3	15.40	7.10	2.60
4	4	17.10	6.10	2.40
5	5	28.80	7.90	1.20
6	6	21.00	4.30	1.40
7	7	14.35	7.60	1.50
8	8	14.20	6.20	1.20
9	9	12.90	5.70	1.90
10	10	15.70	3.75	1.85
11	11	10.30	3.80	0.70
12	12	7.90	4.10	0.55
13	13	9.40	3.90	0.70
14	14	8.90	3.40	1.15
15	15	9.50	4.00	0.50
16	16	10.20	3.90	2.10
17	17	15.90	4.40	1.70
18	18	10.00	7.95	2.05
19	19	15.80	7.65	0.95
20	20	10.10	6.30	1.20
21	21	9.10	1.80	1.30
22	22	8.60	5.90	2.00
23	23	9.60	4.70	1.30
24	24	12.40	2.80	1.20
25	25	12.80	5.00	0.90
26	26	13.60	3.10	0.65
27	27	9.05	3.10	0.90
28	28	7.10	4.55	0.80
29	29	5.90	4.95	1.20
30	30	7.60	3.80	1.00
31	31	9.50	5.00	2.50
32	32	11.70	2.70	1.00
33	33	10.30	3.60	3.30
34	34	13.30	12.60	7.30

14SD 001 黒灰色粘土岩

番号	図取番号	長	幅	厚
1	1	18.1	6.0	1.9
2	2	11.1	6.2	1.0
3	3	7.3	4.2	1.5
4	4	6.5	4.7	0.9
5	5	7.7	5.0	1.0
6	6	5.6	4.9	1.7
7	7	13.9	6.4	1.7
8	8	8.2	3.7	0.6
9	9	6.4	4.5	1.1
10	10	6.4	2.6	0.4

14SD 001 灰白色砂岩

番号	図取番号	長	幅	厚
1	4	10.3	6.70	0.80
2	5	8.20	4.40	0.80
3	6	7.70	3.90	0.60
4	7	8.50	2.70	1.10
5	8	8.20	7.50	1.50
6	9	12.60	4.10	0.80
7	10	8.80	4.50	0.60
8	11	10.10	2.90	1.80
9	12	4.60	3.30	0.60
10	13	15.20	3.60	0.70
11	14	13.90	2.70	0.90
12	15	15.50	3.90	1.30
13	16	9.90	2.65	1.10
14	17	11.15	6.85	1.90
15	18	5.50	4.30	1.50
16	19	4.60	2.80	0.60
17	20	7.00	3.90	0.80
18	21	7.00	2.10	1.35

17SX 001A 粘土岩

番号	図取番号	長	幅	厚
1	5	12.7	9.0	2.2
2	6	5.5	2.7	0.9
3	7	5.6	3.3	1.0
4	8	4.6	3.9	0.7
5	9	7.7	3.4	1.3
6	10	9.2	3.6	1.3

17SX 001 A - B

番号	図取番号	長	幅	厚
1	1	55.6	4.2	1.5
2	2	14.8	4.8	2.1
3	3	32.2	3.4	3.0
4	4	14.0	5.6	3.0
5	5	14.6	4.0	2.4
6	6	17.0	6.2	6.1
7	7	17.9	6.9	3.0
8	8	8.5	4.7	1.4
9	9	9.3	5.0	3.6
10	10	18.8	7.5	4.0
11	11	35.2	3.2	3.0
12	12	15.0	5.0	2.1
13	13	12.2	2.3	2.5
14	14	16.4	3.6	0.7
15	15	8.6	8.2	4.0
16		69.1	10.8	5.0
17		17.8	8.4	3.0
18		14.0	8.7	3.2
19		59.6	16.8	7.6
20		46.8	3.1	1.8
21		8.4	2.1	2.1
22		18.0	3.5	1.1

17 暗灰色粘土

番号	図取番号	長	幅	厚
1	2	14.4	6.0	1.7
2	3	8.4	5.7	1.2
3	4	6.8	7.8	4.0

写真図版



水城跡遠景 (南西から、左上は小水城)



水城東堤遠景 (東から)



水城西堤遠景 (東から)



水城跡遠景 (西から、奥は大野城)



東門付近遠景（南から）



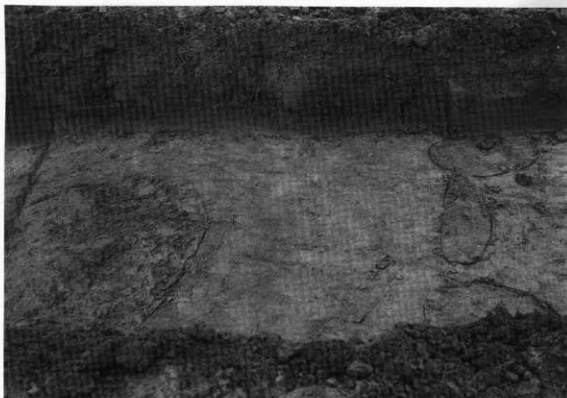
西門付近遠景（南から）



19-036地点トレンチ (南から)



18-124地点1トレンチ (東から)



18-124地点1トレンチ遺構検出状況（南から）



18-124地点4トレンチ（南東から）



18-124地点4トレンチ土層堆積状況(北から)



18-172地点近景(南東から)



18-172地点土層堆積状況 (南から)



18-101地点2トレンチ土層堆積状況 (北から)



18-189地点トレンチ (西から)



18-189地点土層堆積状況 (南から)



18-163地点トレンチ (西から)



18-169地点土層堆積状況 (西から)



18-038A 地点トレンチ (西から)



18-038A 地点遺構検出状況 (南から)



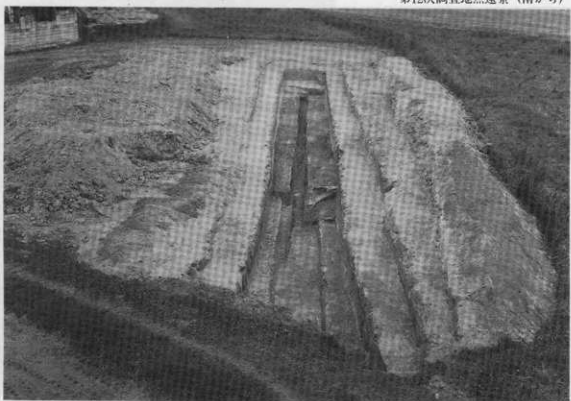
第1次調査塚跡断面 (同上斜め方向から)



第2次調査塚跡断面 (同左)



第12次調査地点遠景（南から）



第12次調査区全景（北西から）



第13次調査全景（北から）



第13次調査遺構検出部分（東から）



13SD001 (東から)



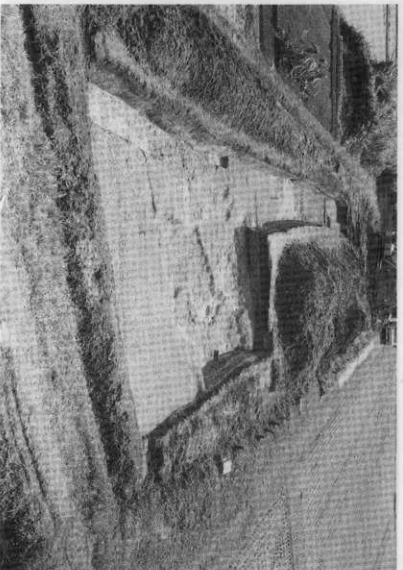
第13次調査西壁土層断面 (東から)



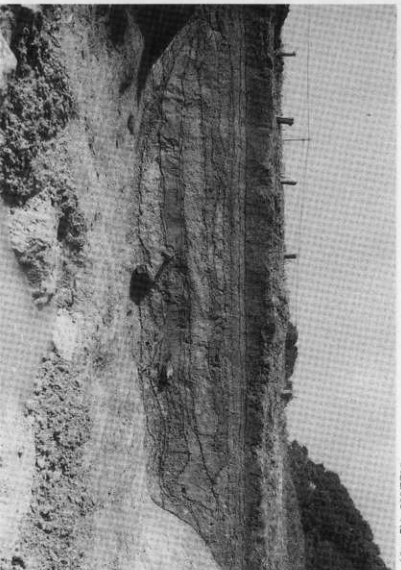
第14次調査遠景 (空中写真、左の森が水城土塁)



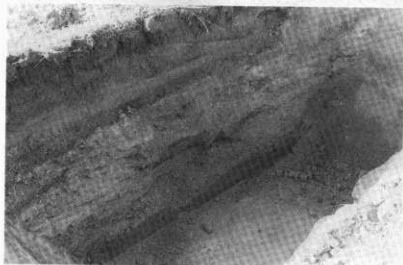
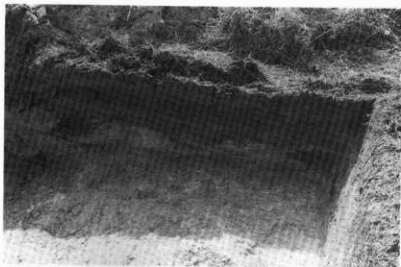
第14次調査全景 (空中写真、左が北)



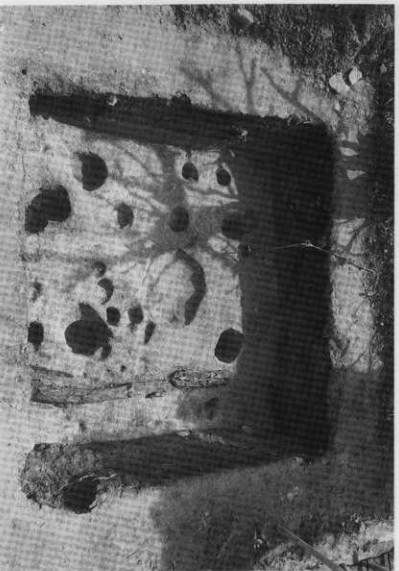
14SD001 (北东)



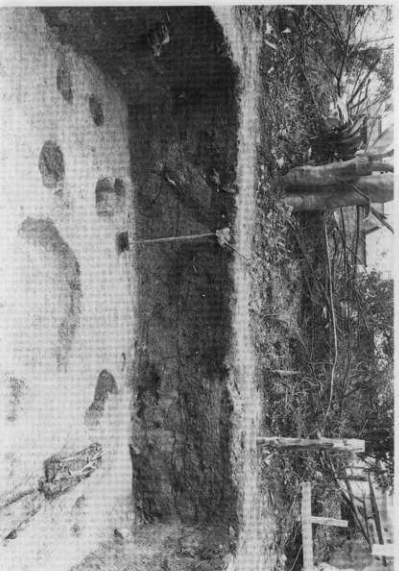
14SD001西壁土層断面



第15次調査各地点トレンチ



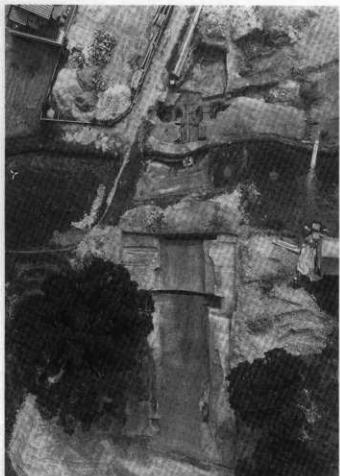
第16次調査全景（東カ5、上層）



第16次調査区西壁上層断面



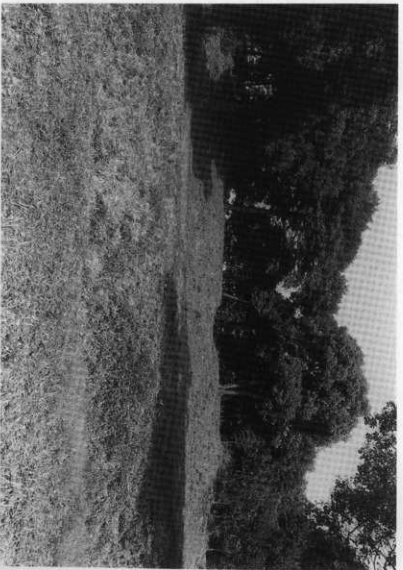
第17次調査木樋関係部分 (空中写真、上が北)



第17次調査遠景 (空中写真、上が南)



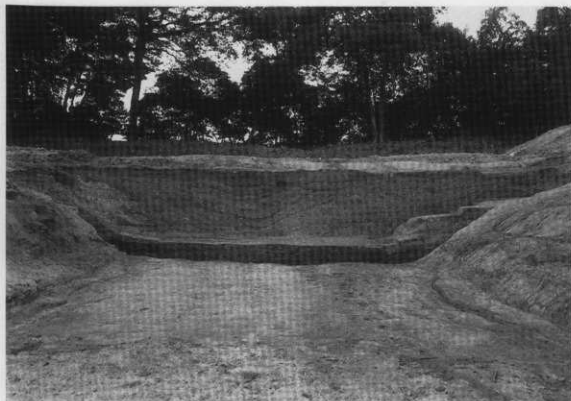
第17次調査遠景 (西から)



土塁に残る木種抜き跡 (南から、中央の窪み)



土塁上面木種抜き跡 (東から)



第17次調査⑨C土層断面（南から）



第17次調査⑨C土層断面西側細部（南から）



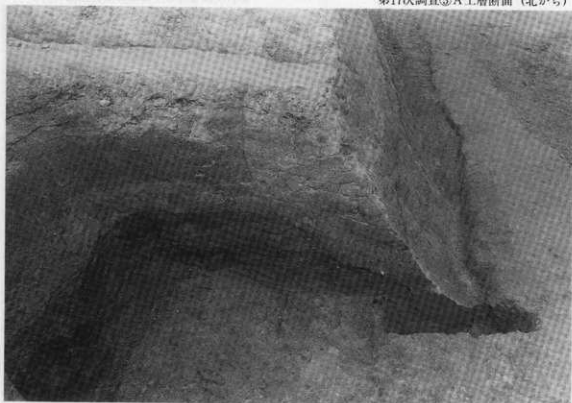
第17次調査④C土層断面東側細部 (南から)



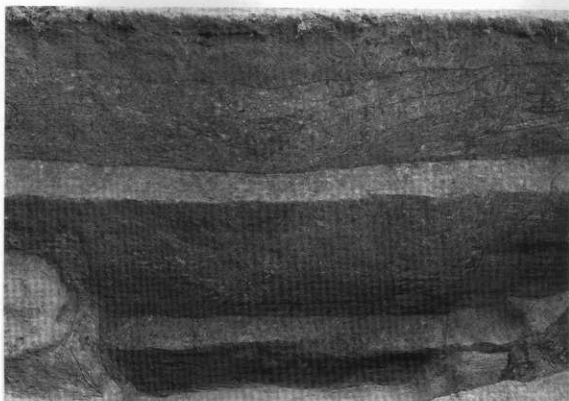
第17次調査⑥・⑤C土層断面 (南東から)



第17次調査⑤A土層断面（北から）



第17次調査⑤C土層断面（南から）



第17次調査③A土層断面（北から）



（20号）調査路上部・北西側面（北西から）

第17次調査③A土層断面東側部分（北西から）



第17次調査③A土層断面西側部分（北から）



第17次調査⑨B・⑧土層断面（東から）



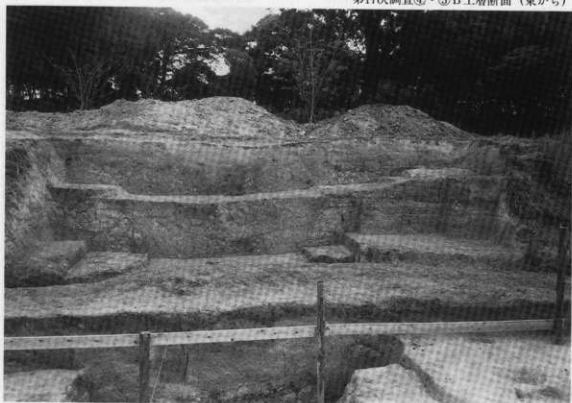
第17次調査⑥・⑦B・⑧土層断面（東から）



第17次調査⑥土層断面（東から）



第17次調査④・⑤B土層断面（東から）



第17次調査②土層断面（南から）



第17次調査②土層断面東側細部 (南から)



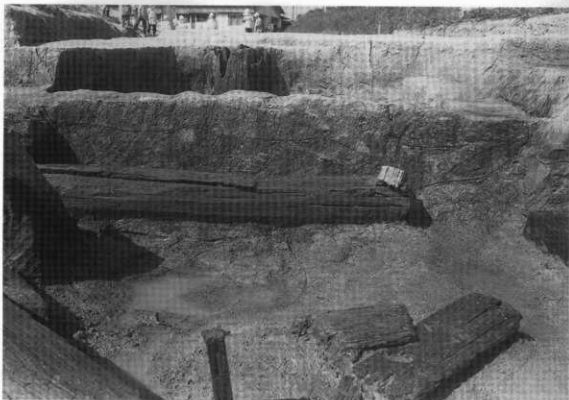
第17次調査C4土層断面 (南から)



17SX001A 縦横樋交叉部土層断面 (西から)



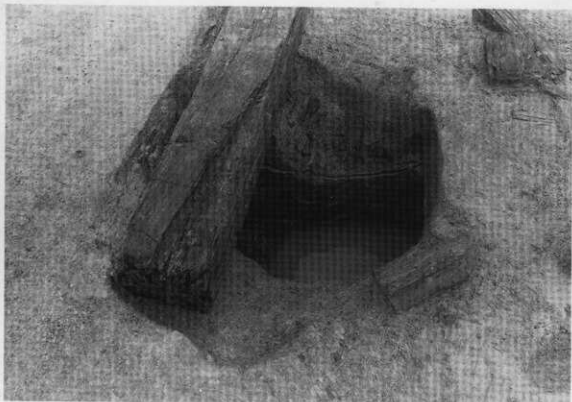
17SX001A 縦横樋交叉部土層断面 (南から)



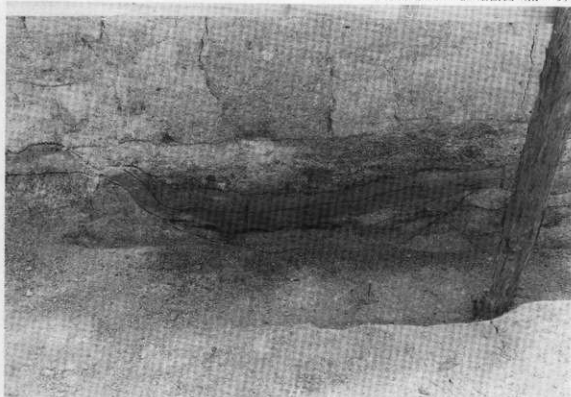
第17次調査C7土層断面（東から）



第17次調査柱穴b土層断面（南から）



第17次調査柱穴d土層断面（南から）



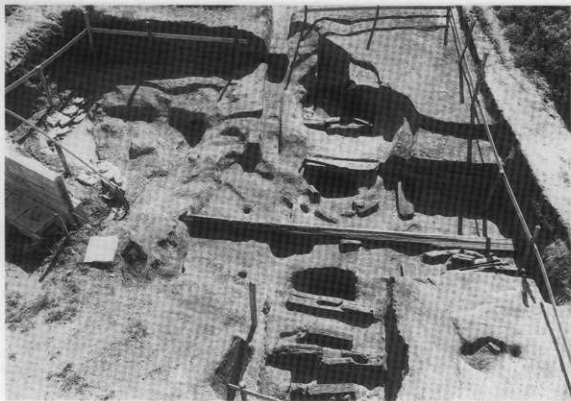
第17次調査C1土層断面細部（東から）



第17次調査土塁下調査区 (東から)



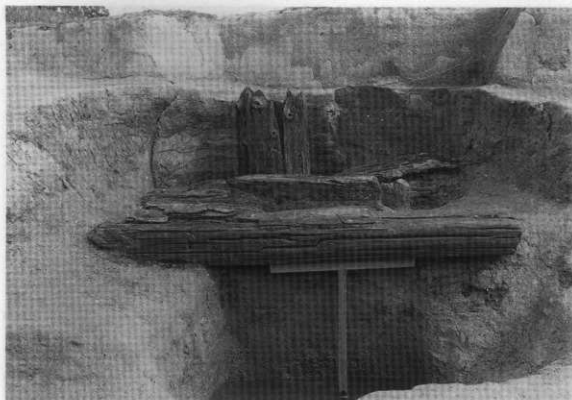
17SX001調査状況 (南から)



第17次調査取水口部分（東から）



第17次調査横種枕木配列状況（西から）



第17次調査B5見通し状況（西から）



第17次調査柱穴a付近（南から）



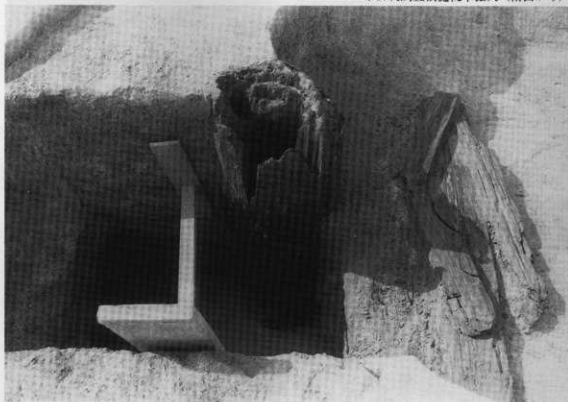
第17次調査横樋枕木見通し (東から)



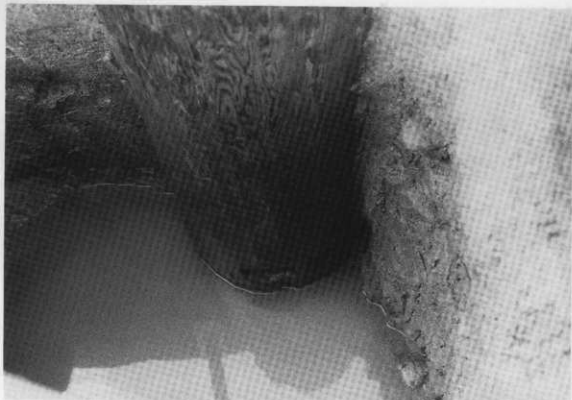
第17次調査B7見通し (西から)



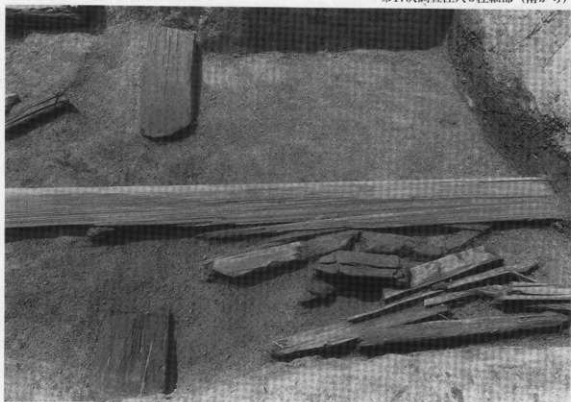
第17次調査横樋枕木拵大 (南西から)



第17次調査柱穴b付近 (南から)



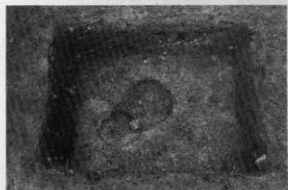
第17次調査柱穴b柱細部 (南から)



第17次調査縦樋木材片検出状況 (東から)



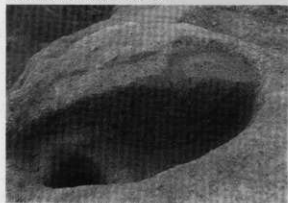
第18次調査区全景 (空中写真、上が東)



18SX020検出状況 (南から)



18SX015検出状況 (南から)



18SX010土層断面 (南から)



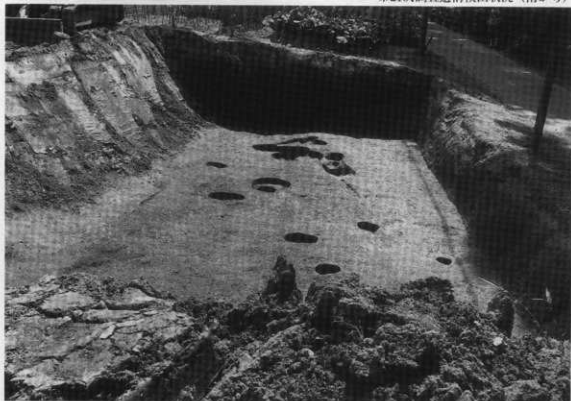
第19次調査区全景 (南から)



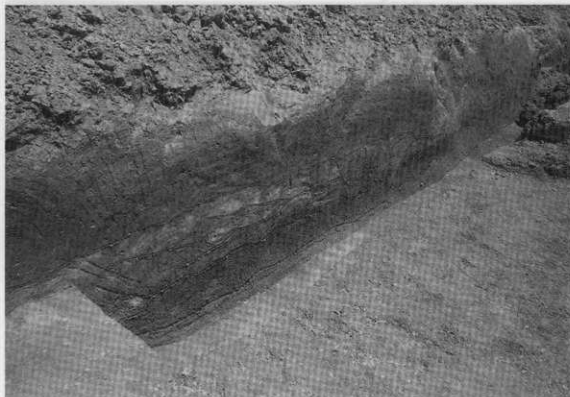
第19次調査段落ち部土層堆積状況 (西から)



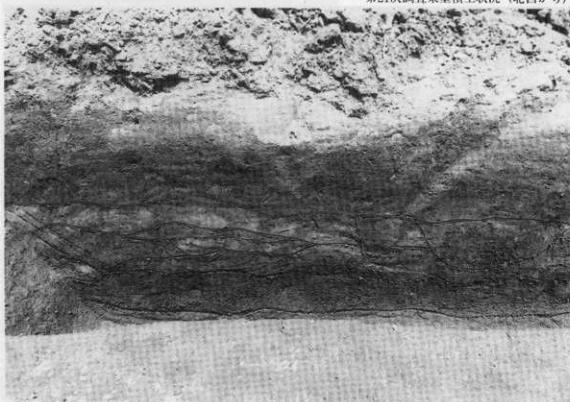
第21次調査遺構検出状況（南から）



第21次調査完掘状況（東から）



第21次調査東壁積土状況（北西から）



第21次調査東壁土層断面（西から）



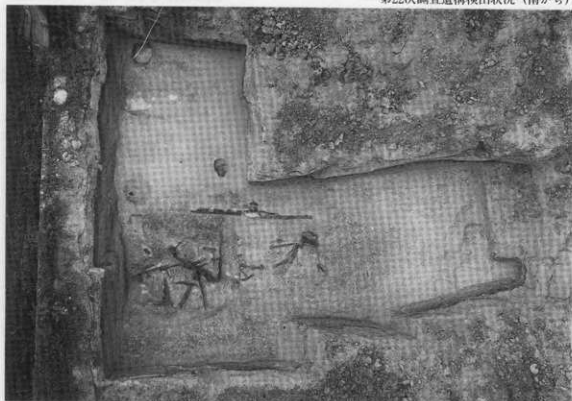
第22次調査地遠景 (南から、上が土塁)



第22次調査地全景 (西から、左端窪地は木種取水口保存部分)



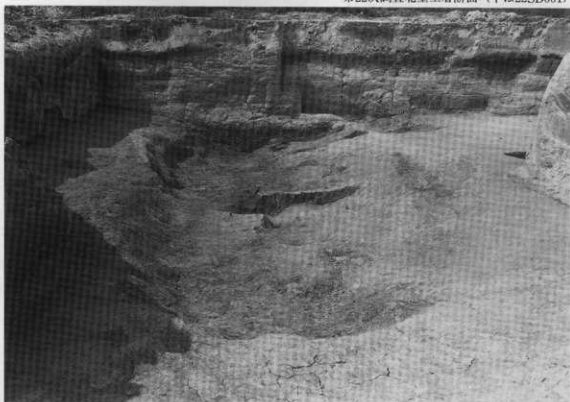
第22次調査遺構検出状況（南から）



第22次調査西調査区全景（空中写真、左が北）



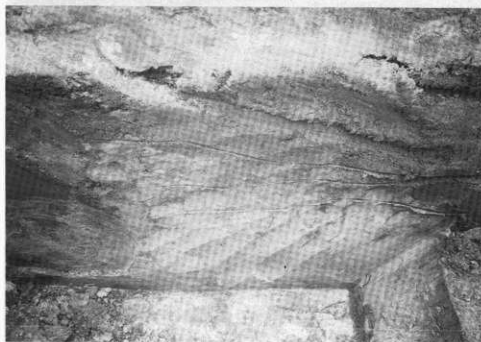
第22次調査北壁土層断面（下は22SD001）



22SD001完掘状況（南から）



第23次調査トレンチ (西から)



第23次調査北壁土層断面 (南から)



第23次調査積土段落ち状況（西から）



第25次調査 No.5 西壁土層断面（東から）



第25次調査区状況 (No14の東から、右は土塁)



第25次調査 No14 25SD001



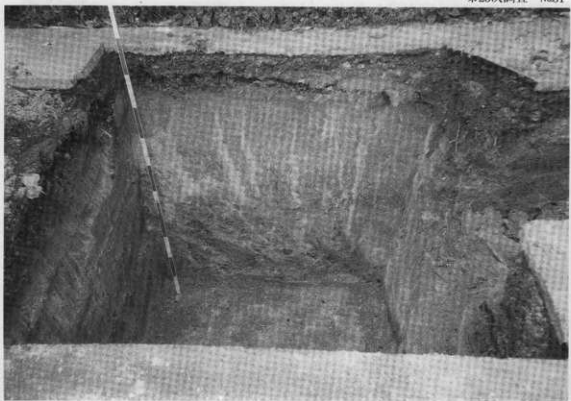
第25次調査 No21 西側



第25次調査 No13



第25次調査 No31



第25次調査 No34

18-127地点

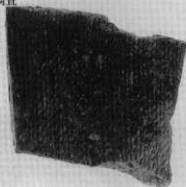


1



2

第11次調査



1



2



4

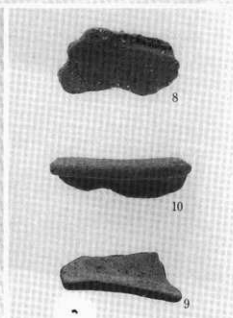
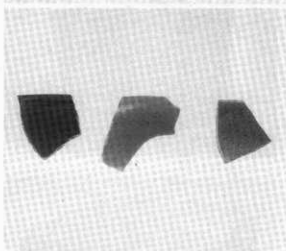
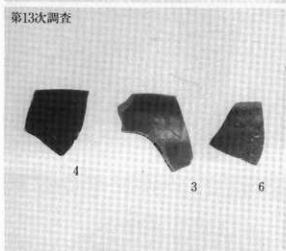


3

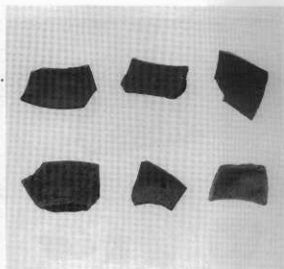
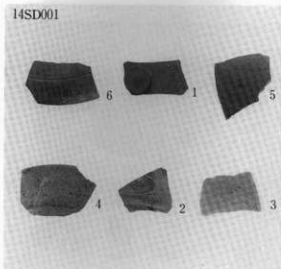
第12次調査



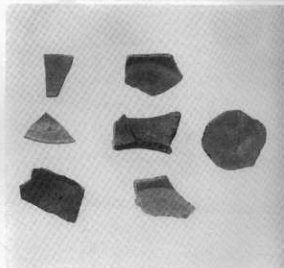
第13次調査



14SD001



第16次調査表土



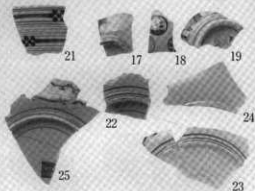
16SD001



12



14



21

17

18

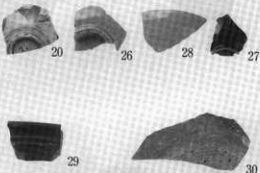
19

22

24

25

23



20

26

28

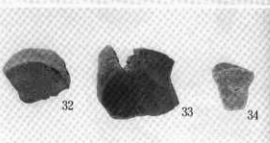
27

29

30



31



32

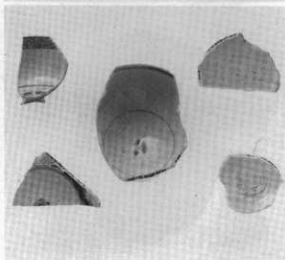
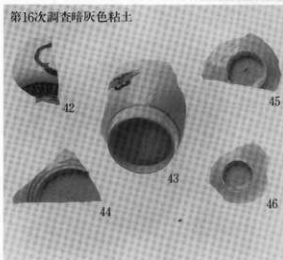
33

34

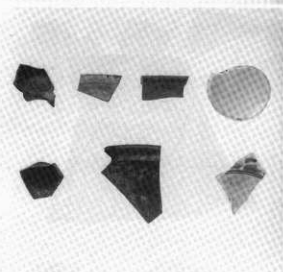
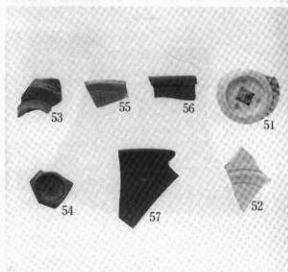
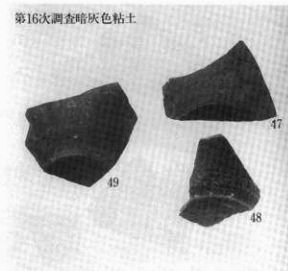
16SD001



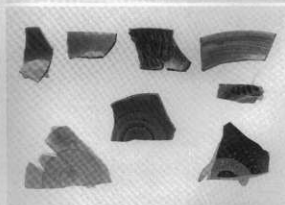
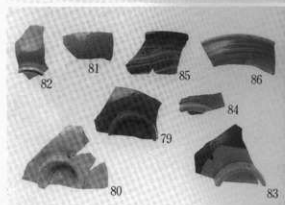
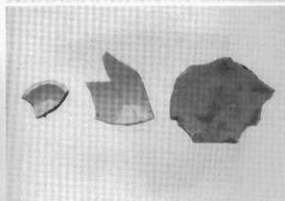
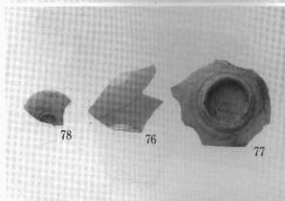
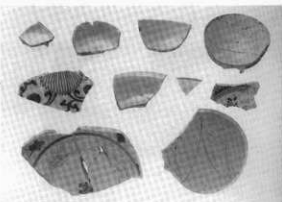
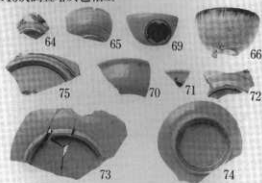
第16次調査暗灰色粘土



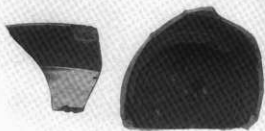
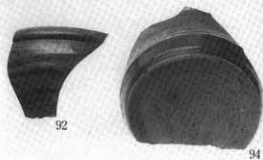
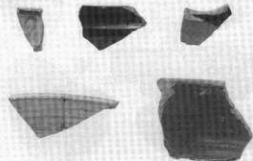
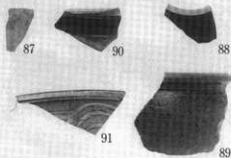
第16次調査暗灰色粘土



第16次調査暗灰色粘土



第16次調査暗灰色粘土



第17次調査



第17次調査



10



13



18



1



2



3



4



5



1



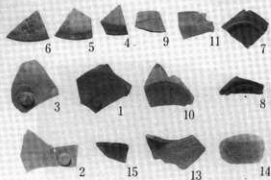
第17次調査



1



第18次調査



16

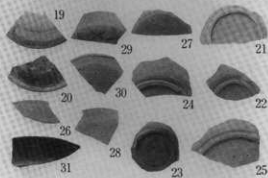


17



18

第18次調査



第18次調査



第18次調査



46



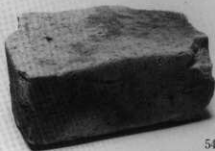
47



50



52



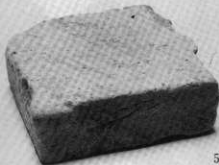
54



53



56



55

第18次調査



57



58



59



60



61



62



63



64



67



65



66



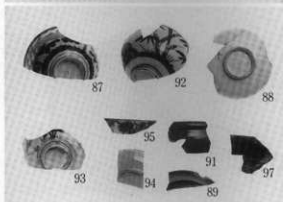
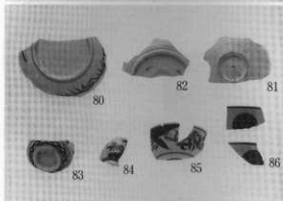
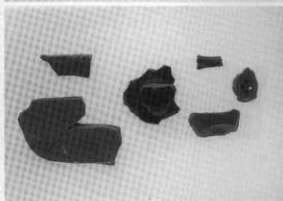
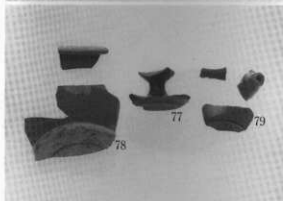
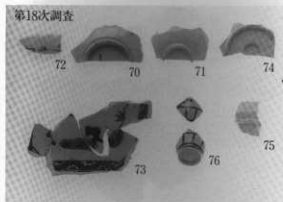
68



69



第18次調査



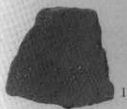
第18次調査



第21次調査



第22次調査



第25次調査





水城跡出土鬼瓦

水城跡

平成6（1994）年3月25日

発行 太宰府市教育委員会
太宰府市大字観世音寺1丁目1番1号

印刷 大成印刷株式会社
福岡市博多区東那珂3-6-62